又それ程私の魂の死は本當であつたのです。又彼の肉の死はこれを信じなかつた私の魂の空虛であつただけ、それだけ眞實であつたのです。さて熱病は愈々重り、私はもう死ぬところでムいました。若し私が其時世を去つたなら、貴下の律法によれば、私の咎にふさわしい刑罰は火と火と苛責とに投げ込まれるのでなければ又何處へ行かれましたらう。母は私の病氣を知らなかつたのでムいますが、なほ自分の傍にゐない私の爲めに祈りました。けれども到る處に在す貴下は、彼女のゐる處で、彼女の祈りに聽き、又私のゐる處で、私を憐み給ふたのでムいました。斯うして私は肉體の健康を囘復致しました。然し私は斯樣に危篤に瀕しながらも洗禮を志願しなかつたので、神を冒瀆したといふ考へから、心は穩かでなかつたのです。私は曩に囘想して、告白致しましたとほり、少年時代に、私の母の信仰により洗禮を願つた時は、小兒ながらも、今よりは寧ろ立派でムいました、けれども成長して却つて恥多いものとなりました。だから私は(同時に靈と肉)二つの死にあはすこと望み給はなかつた貴下のみ旨を、愚かにも私は嘲り笑ひました。私は此處に充分言ふことが出

來ます、まつたく母の私に對するその愛情と、又肉體的に私を產んだときよりも、どれぐらゐ遙に大きな苦痛を以て母が私を靈に於て再び產まうとしたかといふことを。

ですから斯うして若し私が死にまして、その爲め彼女の慈悲深い心が斷腸の思ひをしましたなら、如何して母が癒やされるか、私は知りません。して又、此樣に絕える間もなく痛切を極めた祈禱は、貴下のみ許にさゝげられる外、何處に置くべき場所がありませう。それとも、慈悲に在す神よ、本當に貴下は此潔白、謹愼な寡婦の煩悶、卑遜な心を輕蔑なさいますか。母は盛んに施物をなし、貴下の聖徒をいたはり、またそれに奉仕して、朝夕日に二囘宛貴下の祭壇に供物を捧げないでは一日も過ごすことがなく、貴下の會堂に絕えず御詣りを致しました。それは決して無駄話や、年寄つた女達のお喋りをしようとしてゞはなく、貴下をその說敎のうちに聽き、同時に彼女自らをその祈りのうちに貴下に聽いて戴かうといふ積りでした。貴下はこんな者の涙を輕蔑し、貴下のお助けのうちから跳ねのけておしまひなさいますか。涙を流して母が貴下に御願ひ申したものは、金銀でもなけれ

ば、又失くなつてしまふ寶でもなかつたのです、只その子の魂の救ひでムいました。貴下の賜物によつて彼女は斯うなつたのでムいます、それを貴下は彼女を輕蔑なさいますか。否々、決してさうではムいません。主よ、まつたく貴下は近くに在して、私共に聽き、又爲さることは、豫め一々順序を立てゝ、それに基いて事を爲し給ふのでムいます。貴下はいろ〳〵な夢と、貴下のみ答へによつて（そのうちの或るものは私に既に述べました、又或るものは未だ述べてをりません）母をお欺きになつたものとはどうしても考へられません。母はそれを一々深くその信仰の胸裡に藏つて置いて、丁度貴下からいたゞいた肉筆のであるかのやうに、それによつて貴下に御履行を迫り、懇願してゐました。何ぜかと云へ證書ば、「貴下の憐憫はとこしへに絶ゆることがない」（詩篇第一一八の一）から、貴下は彼等の負債總てを免るし、しかも貴下の御約束に基づいて、自ら負債者となることも厭ひ給はなかつたのです。

十　懷疑哲學と唯物主義

そこで貴下は私を此重病から回復せしめ給ふて、貴下の婢の子の肉體を暫時健康に爲し給ひました。それは貴下が更に優れた、更に確な靈の健康を彼に與へようと思召したからでムいます。けれども、其頃私は羅馬にあつてもなほかの人を欺き、又自ら欺かれてゐるマニケウス教徒の聽聞者（私が病氣にかゝつて、恢復した家の主人も矢張りその一人でムいました）であつたのみならず、「選らばれし者」と彼等仲間で言ふ者達とも交りを結んでゐました。といふのは私には矢張り、罪を犯すものは私共ではなくて、他に私の知らない性質が自分の身體にあつて、それが罪を犯すといふ（マニケウス教の說明）のが本當なやうにおぼえたからでムいました。で私は自分には罪はないこと、亦どんな惡事をしたときでも、それは貴下に對して罪を犯したのではないから、別に魂を癒して下さいと、貴下に、自分の罪を告白するには及ばない事だなどと思つて私の慢心を悅ばしてゐました。然し乍ら私は好

んで自分といふものを辯護して、私のうちにはあるけれど、私ではない、何やら得體の知れない或る物に好んで罪を塗りつけてしまひました。けれども眞個これは私でムいまして、私の不信は私の自我に逆つて、分裂したのでムいます（即本然の自我と不信の自我とが分立した）しかも此罪は私を罪人として裁かなかつたので、愈々度し難いものでムいました。その上に、私は自我を貴下の前に屈服さして救ひを受けるよりも、寧ろ貴下、全能の神よ、貴下を私に服從さして、自ら滅びようとしたのは、咀ふべき不義でムいました。ですから貴下は「わが口のまへに門守を置き、わが唇のまはりに堅固なる扉を」（詩篇第百四十一の三、四）置き給ひませんでした。ですから私はなほ彼等の所謂る「選ばれし者」と結托してゐました。けれどもこの僞りの敎に、否それどころか、若しより優れたものに遇はなければ、それに滿足してをらうと決心した事柄にさへも、最早利益を受けることが絶望となりましたから、私はやう〳〵倦怠し出して、注意しなくなりました。

それは所謂るアカデミコスと稱ばれる哲學者達があつて、一切の事は疑はしいと云ひ、

且つどんな眞理も、人間はそれを識る能力がないと斷定しましたので、私はその人達の說を聞いて、其人達は他の者共よりも賢いと思つたからなのでムいます。が私は未だその眞意が呑み込めなかつたので、只一般に雷同附和して、確にそれは本當だと思つたゞけでムいました。そこで私の宿の主人は、マニケウスの書に充ちてゐるいろ〳〵の怪しい話を信じてゐるのを見ますと、私は明々白に彼をとゞめて、ちつとも遠慮しませんでした。けれども私は此異端に加はつてゐない人々に交はる以上、彼等と親交を斷ちました。私は最早以前のやうな熱心をもつて此異端の擁護は致しませんでしたが、それでも此宗派（マニケウス敎の信徒は多く羅馬にもをりました）との親密な交際は、私が他に求むる道を遲延さしました。天地の主にして、眼に見える、或るは見えないものゝ總ての創造者よ、特に私は眞理を發見すべき望みを失ひました。それは彼等は貴下の敎會に於て、眞理から私を轉向さしたからでムいます。また貴下が人間の肉をもち、私共と同じ手足の如き肉體的輪廓の束縛を受け給ふは、不似合ひなことだと私は思つたのでムいます。又私の神に就て考へ

ようとするとき、私はそれを物體の容積としてより外には、何とも考へようを知らなかつたのでムいました（何ぜかなれば總て物體でないものは存在しないと私には思はれたのでしたから）此處に最大の誤りと、且つどうしても避け得られない殆んど唯一の原因がありました。

さうなものですから、私は惡も又一種の本體であつて、忌むべく、醜いそれ特有の容積をもつてゐると信じました。更に又私の當時の信仰によれば、善に在す神はどんな惡るい性質をも創造し給はなかつたことになつてゐましたから、私は（善惡）二つの容積を立て、互に相反してゐながら、双方ともに無限に存在するものである。只惡の方は範圍が狹く、善の方が大きいのだと考へました。抑も此發端がいけないので、それから〳〵と、種々樣々な冒瀆を私は續けました。私の心は公教會の信仰に復歸せんと努めましたけれど、私の信じてゐたことは公教會の信仰でないところから、私は追ひ返へされました。また私の神よ貴下の御慈悲は感謝に堪えません。私には、貴下が總ての部分に於てその得給ふた人間の

形に於て有限に在すと想像するよりも、たとへ惡の容積の貴下に對立する點に於て、貴下の有限を認めざるを得ないにしても、他の方面に於ては貴下が無限に在すことを信ずる方が、敬虔であると思はれました。無智であつた私には、惡は啻に本體であるのみならず、實質であると思はれました。何ぜかなれば、私は心といふものは微細な物體であつて、空中に彌漫してゐるものとより外に考へることが出來なかつたからなのです。又貴下の獨りのみ子に在して、我々の救主にておわします方をすらゝたとへて言へば、貴下の最も輝く塊型のうちから、私共を救ふが爲めに分出し給ふたものだと、私は信じてゐました。そして私は空想に描いた斯うしたこと以外には、キリストについて何事をも信じなかつたのでムいます。その上、キリストの性質がさうであるならば、肉とその精神とが混じらないでは、處女マリアから生れることは出來ない筈だとへ私は考へました。けれども私が斯う想像に描いたものが混じつて、しかも如何して汚れないことが出來たかは、私自身も識らなかつたのでムいます。だから私はキリストが肉の爲めに汚されたと信じさゝれたくないの

で、その受肉といふことを信ずることを嫌ひました。今貴下の靈の人々が、私の此告白を讀むならば、きつと柔しく、又愛らしい顏をして、私に向つて微笑なさるでムいませう。けれども本當に私は斯麼人間でムいました。

十一　マニケウス教と天主教

更に私は貴下の聖書のうちで、マニケウス教徒等が批評したところは、總て辯護することの不可能ものと思つてゐました。けれども又、私は此書藉（聖書）に通じてゐる人達とさうした「非難のある」事柄を談じて、その人がそのことを實際どう思つてゐるか、實驗してみようと思ひました。といふのは、マニケウス教に反對して、その教徒の面前で語り且つ論じたエルビデイウスといふ者の言葉が、既に私がカルターゴにゐたときから、私の心を動かしてゐたからでムいます。此人は容易に反駁し得られない文句を聖書から引き出して來ましたが、マニケウス教徒等の是に對する答辯は極めて薄弱なやうに私は思つてゐ、

ました。のみならず彼等はその答辯すらも容易に公けにしないで、窃かに私共にみせました。それは斯ういふことでムいました、キリスト教の信仰に、ユダヤ人の律法をつぎ木をしようと思つて、誰か知ら新約聖書を揑造したのであると。さう言ひながら、自分等もその正本といふものを一つも差出すことは致しませんでした。けれども私は形體の空想にすつかりと拘らはれて、其容積に壓しつけられ、幾分か窒息の氣味で、その下から喘ぎ〳〵貴下の眞理の精氣を求めたのでしたが、清く、純粹にそれを吸呼することは出來ませんでした。

十二　下劣な羅馬學生

私は羅馬に來た目的どほり、熱心に修辭學を敎へ始めました。そこで先づ若干の人々を自分の家に集めますと、その人々たちの紹介で、又廣く知られるやうになりました。然るに意外、私が嘗て遇はなかつたところの他の罪が羅馬で行はれてゐることを知りました。

それは眞に墮落してゐる青年達が、カルターゴの「攪亂」を此處では行はなかつたのは前に聞かされたとほりでムいましたが、多くの青年等は敎師に對する報酬を踏み仆して、拂ふまいと共謀して、俄かに他へ轉校するのでムいました。金錢の爲めに正義を輕んずる信義の破壞者共があつたことでした。「完き憎みではなかつたけれど」（詩篇第百卅九の二十二）私の心は是等の青年達を憎みました。是は彼等が爲すことが不正であるからと云はうよりも、寧ろ私が彼等の爲めに困らされたものですから、大に彼等を憎くがつたのでしたらう。本當にこんな者共は卑劣千萬で、貴下を離れて姦淫を行ひ、現世の過ぎ去る假相と、また攪めば手を汚すやうな穢らはしい利得とを慕ふて、果敢ない世を愛し、却つて貴下を——姦惡な魂を呼び返して、しかも貴下に歸るなら、赦して下さる不朽の貴下を輕蔑するのでムいます。私は今も斯麼邪曲な者どもを憎みます。尤も若し改めたらば私は愛します。私は彼等が、金錢よりもその學ぶところの敎へを重んじて、更に又、神よ、別して學問よりも貴下、卽ち眞理にして、又確實な善の豐滿、最も潔い平和に在す貴下を愛するようにありたいと

願つてをります。けれども當時は、貴下の爲めに彼等の悔悟改善を望むよりも、寧ろ私自身の爲めに彼等の邪惡を爲すことを好まなかつたのでムいます。

十三　アムブロシウスに會ふ

そんな驅梅でしたから、ミラノの人々が羅馬の市長に使者をやつて、自分達の市に修辭學の敎師を公費を以て派遣して貰ひ度いと求めて來ました時、私は、それがマニケウス敎の迷妄に醉つてゐる人々の斡旋によるものであるとは知りながら、內實彼等を離れて去らうといふ下心で、自分が行き度い旨を申し出て、當時の市長シムマクスに二三の題について試驗を受けて、とう〳〵其處へやられました。但しマニケウスの信徒達は私の內心を知らなかつたのでした。そこでミラノに來て、當時名聲嘖々たる貴下の敬虔な働き人、司敎アムブロシウスに逢ひました。彼の雄辯はその頃貴下の登熟した穀物と、膏油の歡喜と、葡萄酒の素面の醉ひとを、ふんだんに貴下の民に與へてをりました。私は知らないうちに

御導きによつて彼のところに參りました。彼によつて貴下を知り、み許に導かれるようにとの御攝理でムいました。此神の人は、私の父のやうに私を受けて、如何にも司敎らしく私の來着を迎へました。その爲めに私は此人が好きになりました。尤も最初は眞理（是は貴下の敎會にないものと私は諦めてゐました）の敎師としてゞはなく、只私に對して親切な人としてゞムいました。私は其人が自分の人々に論じて聞かすところを熱心に傾聽しました。けれども當然抱いてゐなければならぬ目的を以てゞはなくて、たゞ彼の辯舌が果してその評判どほりであるか、或はそれが噂以上に流麗か、それとも劣等かを試さうと思つたのでムいます。それで私は熱心に彼の詞に耳を傾けました。けれどもその話してゐる問題については私は冷淡な、嘲笑的な傍觀者でムいました。私は彼の話の甘さを悅びましたが、話振りはファウストスよりも、魅力快感に於て劣りました。勿論言つてゐる事柄は比較になりませんでしたけれど。けれどもその前に立つた私の如き罪人には、救ひは遙に離れてゐました。それでも無意識の裡に少し宛近寄つてゐたのでした。

十四　信仰の萠し

何ぜかなれば、私はアムブロジウスの話つたことを學ぶのでばなくて、只そのどう話すか、話振りを聽かうと努めたのですが（私はどうして貴下に近づく道を發見すべきかといふことにはもう望みを失つてゐましたから、私に殘るところは斯麼つまらない希望だけだつたのです）私が擇んだ言葉と共に、私が氣にとめない言葉とが一緒に私の心に來ました。畢竟私はそれを分けることが出來なかつたからでムいます。斯うして心を開いて、彼がどんなに巧みに語るかを聞いてゐた時、徐々ながらも、如何に眞理を語つてゐるかといふことも亦入つて來ました。又マニケウス敎徒の攻擊に對して、少しも反駁を加へられないと私が考へてゐた公敎の信仰も、今は何の恥かしいこともなく公言し得られると私は思ふやうになりました。舊約聖書の一二箇所、又屢々此喩になつてゐるところが說明せられるのを聞いたときは、殊にさうでした。そんな箇所は私が文字通りに解釋したときには精神的

に殺されてしまつたのです。

註 * cum ad litterum accipierem occidebar.「儀文によりて之を承認すれば、仍ち殺ろさる」之はコリント後書第三章第六節 nam litera occidit, spiritus autem vivificat.「そは儀文は殺し、靈は活かせばなり」といふ句から來てゐる。儀文とは文字どほり、文字の意味といふことである。

斯うして此書の多くの箇所は靈によつて釋明されましたから、私は律法と豫言とを呪ひ嘲る者に對して、決して反駁は出來ないものと諦めてゐたことを今は責めるやうになりました。けれども詳細にして、且つ謬りなく反對論を駁擊する學識博大な辯護者があるから、それで公教の信仰の方がまさつてゐるとは思はれず、又双方ともに其主張することを維持し得たところで、その爲めに私の主張はいけないものだとも思はれなかつたのでムいました。畢竟、公教の信仰は敗けたとは私に見えなかつたのでムいますが、それでも未だ勝つたとも見えなかつたからでムいます。

そこで私は、如何してよくマニケウス教徒の教義は僞りであると決定し得られるかを知

らうと一生懸命に考へました。若し私が靈の本體が何であるかを考へつくことが出來たら彼等の奸計は忽ちに破れて、私の心から驅逐せられてしまふのでしたらうに。けれども私はそれをすることが出來なかつたのでムいます。けれども愈々考へ、又いろ〳〵の物を比較してみますと、私は、此世界の組立、また感覺に觸るゝところの自然の全體に就いては哲學者達の說の方が眞理に近いと判斷致しました。そこで私はアカデミコス派の態度と思はれるところに從ひ、總てを疑ひ、總ての物の間に逡巡、狐疑して、遂にマニケウス教徒たることをやめようと決心致しました。私の懷疑時代にすらも、既に或る哲學者達よりも下にあるものと私が思つた斯の宗派に止まつてをるべきではないと考へました。尤是等の哲學者共はキリストの救ひの名をもたなかつたので、私は自分の魂の病ひの癒しを委かせることを斷然拒みました。ですから私は何か慥りと定まつたものが、何處に私の道筋を擇ぶべきかを、明かに示すときまでは、私の兩親が私にすゝめてくれた公教會の洗禮志願者になつてをらうと決心致しました。

第六篇

一　聖モンニカ來る

私の幼少の時からの希望よ、貴下は私をおいて何處に在したのですか。何處に去つていらしたのですか。まつたく貴下は私を、四足の獸や、空の鳥よりも堅く造り給ふたのです。だのに私は暗い、滑り易い場所を歩るいてゐて、貴下を自分の外部に求めて、私の心の神を見出さなかつたのです。又海の底にまでも行きました（詩篇第六十六の二十二）、そして常に眞理を信ぜず、それを發見することに失望しました。其時私の母はその強い信仰に扶けられ、海山越えて遙々と私の後を慕つて、あらゆる危險も貴下のみ手に守られて、安らかに私の處へ着きました。母は海上で危難に遭つたときなどは、慣れない乘客があはてゐるのを、自分は落着いて、却つて之を安心させる役の水夫共をすら勵まして、きつと安着することを言ひ

きかせました。彼女は幻のうちに、貴下のみ誓ひを見たのでした。來てみると、母は私がまつたく眞理を研究することに失望して、危急な位置に立つてゐるのを見出しました。けれども未だ公教會の信徒にはなつてゐませんでしたが、もう疾くマニケウス教徒ではないことを私が申しましたとき、母は全く意外のことを聞いたやうに歡びに滿ち溢れました。けれども彼女が安心したのは、その爲めに私をもう死んだものとして嘆き、心の棺に納めて送り出したあの私の悲慘な部分がなくなつたことでした。母は貴下が「寡婦の子、若者よ、われ汝に言ふ、起きよ」と仰言れば甦つて物を言ひ始め、これをその母に渡し給ふようにと願つたのでした。ですから、彼女が日々涙を流がして、貴下に願つたことが最早それ程までも果されて、而も未だ眞理に達しなかつたが、迷妄から曳き出されたことを聞かされても、母の心は沸き立つ歡喜に亂れることはなかつたのでムいました。却つて母は眞に一切を約束して下さつた貴下が、その殘りの分をも何時かは下さることと確信してゐましたから、非常に安心して、信仰にみちた心で、自分が此世を去る前に、私が公教會の信

徒となるのが見られることを、キリストにおいて自分は信ずると、申しました。母が私に言つたのは只それだけでムいました。けれども慈悲の源よ、貴下の御助けが速かに來て、私の闇を照らすようにと、母は貴下に對して、愈々熱心に祈り、涙を多く灑ぎました。また益々熱心に教會堂に行き、湧いて生命に流れ入る水の源泉であるアムブロシウスの言葉に耳を傾けました。母は此人を神の使として愛しました。といふのは當時私は此人の爲めに不安と煩悶に陷し入れられたのでしたが、それは暫時の間だけであることを母はちやんと識つてゐました。是が過ぎ去つて、醫者の言葉で言へば、危篤と呼ぶ、一層烈しい發作があつた後、私の病氣が直つて、健康になると母は確信してゐました。

二　母鄉里の迷信を棄つ

そこで母は、アフリカでする慣はしのとほり、諸聖人の紀念に建てられた御堂に、菓子、パン、葡萄酒とを携へて行きましたが、門番の爲めに禁じられました。それは司教の禁令

に基いたことを知りましたとき、母は如何にも恭しく、柔順に服從しましたが、私は、母が禁止の理由は何故かも査さないで、斯う易々と自分の習慣を棄て去つたことを變だと思ひました。といふのは母は葡萄酒を飲んだところで、その心を棄すこともなければ、又酒を好む爲めに眞理を厭ふこと、恰も禁酒の歌に對して、好酒家が水を呑むことを厭がるやうなことはなかつたのでした。けれども彼女が以前カルターゴで此飲食物の壺を携えて行つたときには、只一口舐めて、あとは他にやるので、決して一緒になつて飲むのではなかつたのです。又それも酒ぎらひな自分の口にあふ程にうすめて、ほんの只禮儀の上から、小さな猪口で一杯飲むだけだつたのです。又若し死者の爲めに建てられた紀念の御堂で、此の樣な祭りの行はれることが瀕繁な場合には、母は此同じ盃を携へあるいて、總ての處で用ひました。啻に澤山水を混和したばかりでなく、持ち廻つたゝめに、まつたく生溫くなつたその葡萄酒を人々に頒けて飲ましたのでムいます。だから是は母が、人々の歡樂をたすけようとしたが爲めではなくして、その信仰を熾にしようと思つだのでムいます。祖

先を祭ることはまるで異教徒の迷信に酷く似てゐるから、よしそれを謹直に行つたにもせよ、してはならないと、司教から誡められてゐるものであると知ると、母は快くそれを止めたのでムいます。

そこで地上の果物を充たした籠の代りに、一層純潔な願望に滿ちた心を、殉教者達の記念の御堂に携へて行き、又及ぶ限りの施しを貧乏人にすることを學びました。是れは斯うして主の御受難に倣つた殉教者達が榮えの冠を戴いた場所に於て、主の御聖體（聖餐のことは斯くいふ）を正しくいたゞかせようといふのでした。けれども主なる我が神よ、之を禁じたものが、若し私の救ひを望む爲めに、母が非常に愛敬したアムブロシウスのやうな高徳な人でなかつたなら、恐らく母はその言葉に從つて、容易に此習慣を破らうとはしなかつたらうと私には思はれます。私の心はみ前にあつて、その事について以上述べたやうに思ふのでムいます。アムブロシウスの方ではまた母の信仰篤い話を聞いて、眞に母を愛し、母は多くの善いことをし、又熱心になつて、足繁く教會に行きました。ですから私に會つたと

き、アムブロシウスは屢々口をきはめて私の母を褒め、君は本當にいゝ母をもつて幸福であると申しました。しかもその母がどんな子をもつてゐたかは知らなかつたのでした。私はこんなことを總て疑ひ、生命の道を見出すことが出來るなどとは決して思つて居りませんでした。

三　聖人の教へ

けれども主よ、私は未だ、貴下に、お助け下さいと祈りもせねば、嘆きもせず、却つて一般の學問に熱中して、理屈ばかり言つて始末がつきませんのでした。そして斯の様に立派な人達から尊敬せられるアムブロシウス自身を、私は世間並みの考へから、幸福な人であるが、たゞ獨身生活を守つてゐるだけは苦しいことだらうなどと思ひました。けれどもその人の抱いてゐる希望や、その立派な心が、誘惑に對してどれ程闘つてゐたか、逆境に處しても、なほどれ程の慰藉を受けてゐたか、又貴下のパンを咀嚼玩味する時には、どれ

程の喜悦が、その心の隠くれた口に味はれるかなどのことは、私の推察の及ばぬところでその實感などは夢にも知らなかつたのでムいます。然るにアムブロシウスの方では又私の惑ひをも、私の危險な陷井をも知りませんのでした。何ぜかといへば常に彼のそばには群衆が雜踏してゐましたから、私は彼の言葉を聞くことも、又彼に話すことも出來なかつたので、私の欲することを思ひどほり充分に彼に訊ねることが出來なかつたのです。彼は人々の患難に一身を捧げて仕へてゐたのです。また僅かの間でも、その方の煩ひがない時には、彼は必要な營養を取つて身に元氣をつけ、或は讀書をして心を養つたのでした。讀書の時には、彼の眼は紙面を滑り去るので、意味はその心で探りました。然し聲と舌とは默つてゐました。私共が屢々彼を訪ねてみますと（誰でも入つてもかまはず、又誰が來たとも斷らなくともいゝことになつてをりましたので）、いつも彼は斯うして默讀してゐるのを見るばかりでムいました。私共はそれを見て永いこと默つてそこに腰掛けてゐるのでしたが、「聽て何も言はず」そのまゝ立去つてしまふのでムいました。斯う一心になつてゐるの

を誰だつて妨げることを致しませう。私共は思ひました、職務の煩らはしさから遁がれて靜に精神力を養ふ爲めに得た此ほんの僅かな時間を、他の事の爲め奪ひ去られることは、彼の欲しないところであらうと。或は又彼が朗讀したなら、その本の著者が何か不明瞭なことを言つてゐるとき、或る注意深い聽者、又は迷ふた聽者は彼にそれを說明してくれと賴むか、さうでなくとも愈々面倒な或る問題を論じてくれと願ふことを懸念したかも知れないのでした。それはそんなことに折角の暇を潰させられたならば、自分が讀まうと思つたとほり、澤山の本を讀むことは出來なかつたのでせうから。尤も彼の聲は少し話すと、ぢきに弱つたので、彼がその聲を惜しんで大事にしようといふのが、それ以上の理由であつたかも知れません。兎にも角にも、どういふ動機から彼が默讀したにもせよ、斯麼人に於ては、その動機はよいのでムいました。

私が答へて欲しいと思つたものゝうちで、貴下の最も神聖な御宣託の出る彼の胸に尋ねる幾會が私に與へられたものは、只本當に簡單に答へられるものついてだけでムいました。

私の熱心な希望を披瀝するには、先方に十分のひまが入用であつたのでムいますが、それは一度も見出されませんでした。けれども彼が主の日（日曜日のことなり）毎に人々に眞理を含む言葉を正しく說くのを聞きましたとき、私は、神の聖書に對して、私共を欺く者共が結んだいろ〳〵狡猾な奸計の難問は皆解決せられたといふことを、愈々深く確信するやうになりました。斯うして貴下が恩寵により、母なる敎會を通して生れがはらせ給ふた貴下の靈の子供達は、貴下が人間を御自分の像に似せてお造りなつたといふ事を解釋して、貴下が人間の肉體の形によつて拘束せられ給ふものだと、信じてゐないと私が知りましたとき（尤も如何なる精神的の實質にてあらせられるかについては、私は未だ微かにも、或は朧ろげにすらも分らなかつたのでしたが）私が多年の間吠えついて立ち向つたのは公敎會の信仰ではなく、肉的空想の假構に對してゞあつたことが分つて、面を赧めながらも喜びました。私は訊ねて、學ばねばならないものを、生意氣にも非難した程甚しく冒瀆で、又敬虔を缺いでをりました。おゝ最も高く、しかも最も近く、最も秘密に在して、しかも最も顯はれ

てゐ給ふ貴下よ、貴下は或るものはより大に、又或るものより小さな手足といふやうに、様々な肢體を有ち給はないのです、けれども如何なる場所にも制限せられ給はないし、又此様な具體的形をも有ち給ひません。けれども貴下のみ像（すがた）に似せて人を造り給ました。照覽ましませ、人は頭から足まで空間に制限せられてをるではムいませんか。

四　儀文と聖靈

斯く貴下の此み像がどんなふうにして存在するかを知らなかつたので、私は「敎への門を」叩いて、どうして信ずべきものでせうかと、訊くべき筈であつたので、決して猥りに反對し、又嘲笑すべきものではなかつたのでムいます。ですから一體確實なものとは何であるかといふ念が、愈々烈しく私の胸を嚙むにつれて、私は愈々益々恥ぢました。其わけは、確實であるぞと約束せられて、しかも此様に長らく愚弄せられ、欺かれて、よくも私は、斯うまで多く確實でないものを、本當に確實であるかのやうに、幼兒のやうな迷ひと

熱心とを以て喋々とおしやべりしてゐたのに、後になつて、そんなことは皆虚偽であることが知れたからでムいます。けれども彼等が不確實であつたことや、嘗て自分が精神的盲目となつて、爭ひを好み、貴下の公教會を誹謗したのは、その當時彼等の言ふところが本當だと誤解したからのことであると、私は確に信じます。私は公教會で、眞理を教へるとは未だ認めがつかなかつたのですけれど、私が激烈に非難したやうな悪いことを教へないことだけは私も認めました。斯うして私は迷ひながらも心を改めました。而して我が神よ貴下の獨子の身體である教會（私は其處で末だ嬰兒の折りにキリストのみ名に入れられたのでした）が此様な馬鹿げた迷妄にとらはれてゐないこと、又その健全な教理に於ては、萬物の造り主に在します貴下を制限して、貴下はたとへ大いに在しまして空間に於て制限せられ給ひませんけれど、なほ到る處、人間の五體の形に制限を受け給ふといふ妄説をとなへないことを私は歎んでをりました。

私は律法（おきて）と豫言者等の舊約聖書が私の前に置かれる時には、奇怪なものに見えたのでム

いましたが、最早さうした眼を以て讀まんでも濟むことを嬉しく思ひました。私は曩には貴下の聖者達がさう思つてゐるとて、その人達を責めたのでしたが、その實は、彼等はさう思つてはゐなかつたのでムいました。また私はしば〳〵アムブロシウスがその信徒に向ひその説教のうちに熱心をこめて「儀文は殺ろし、靈は活かす」といふ使徒の言葉を、恰も典範であるかの如くに薦めるのを聞いて嬉しく思ひました。何ぜかなれば、彼は神秘の面紗（ヴェール）を取除いてくれたのでムいます、そして儀文どほりにすれば、邪曲を教へるものと見へる、此靈といふことの意味を明かにして呉れたからでムいます。斯うして彼の語つたことは、私が未だ眞だか、僞だかを確めなかつたのですけれど、彼は未だ少しも私を躓かすやうなことを語りませんでした。眞逆様に誤謬の谷に陥込むことを懸念して、私はきつと心を引締めて、何物をも容易に斷定しなかつたのです。けれども斯してぢつと停止してゐたばかりで、却つて一層酷い目に殺ろされたのです。といふのは私は、自分で親しく見ないことでも、なほ七と三とを合はして十になることが確實であるとほりに、確實であるよ

うにと希望したからでムいます。私は未だ此最後の比例が實證によつて理解されないだらうと思ふ程には、氣がちがつてゐませんでした。只私は私共の感官に觸れ得ない他の物體にもせよ、または物體としてゞなければ考へ得られない靈體にもせよ、總てが此のとほり數理的正確を以て明かにせられんことを冀つたのでした。そして私は信じて癒やされ、斯うして私の魂の瞳は清められ、永久に絶ゆることもなく、又缺ぐるものとてない貴下の眞理に、どうにかして向けられる筈だつたのです。然し惡い醫者にかゝつてゐた者は、善い醫者にあつても、屢々その身を任かせることを恐れるものであるやうに、私の魂も又同樣「思ひきつて神の教會の御手に、身をまかせきらなかつたのでムいました」是は信じないかぎりは、癒やされることの出來ないものだつたのに、信じさゝれるものが若しや虚妄ではないかと懸念して、私は癒されること拒み、信仰の良藥を調合して、全世界に漫延してゐる病に用ひ給ふて、その藥にそれ程大きな權威を與へ給ふた貴下のみ手にしばらくは反抗致してをりました。

五　聖書の權威とその用

その時以來私は何よりも先づ公教會の教理を擇んだのでムいます。又同時に公教の教理は、別に論證を用ひないでも信仰せらるべき筈のものであつて、（或る種の人に向つては別として、教理はそれ自身に於て論證せられることが出來るか、それとも全然出來ないか、どつちかだつたのです）マニケウス教徒の教義よりは、一層穩健で、又何の僞りもないことを私は感じました。マニケウス教に於ては、私共の信仰は、或る智識を得るだらうといふ怪しげな約束の爲めに嘲けられ、その次には論證することが出來ないから、只信ずべきものだと、荒唐無稽のものを強ゐつけられるのでした。けれども主よ、貴下は其後、最も柔しく、最も憐み深いみ手をもつて、徐ろに私の心に觸れ、これを靜め、私が見たこともなければ、又其行はれた時分に在りもしなかつたけれど、私が信じてゐた數多のことを、私に考へさして下さいました。即ち貴下は、世界の歴史にあらはれた多くの出來事、私がま

だ見もしないところの市のことや、多くの友人や、多くの醫者や、又多くの誰彼等私共が信じないとすれば、此世に於てどんなことも爲し得ないもの、最後に、若し人のいふところを信じないでは、私自身では知ることの出來ないこと、卽ち私がどんな兩親から生れたかといふことを、どれ程堅く信じてゐるかといふこと――こんなものを總て考へてみますと、私に、貴下の聖書(卽ち貴下が殆んど總ての人民の間に、一大權威として定め給ふたところの聖書)を信じる者はよし、さもなくて、信じないものは罪せらるべきものであるぞと、懇々と說き諭して下さいました。なほ又人が私に對して「どうしてお前は是等の書が唯一にまします、眞なるもの、又最も眞なる神のみ靈によつて人類に與へられたと信ずるのであるか」と、言つたところで、それを聽かんでも差支へないとも諭し給ました。何ぜかなれば此根本の點こそは凡てのものにまさつて先づ信ずべきものであるからでムいます私は矛盾だらけな哲學者達の諸書中で讀んだ、牽强附會の曲論も貴下の在すといふ私の信仰だけは、換言すれば、貴下の如何なる御方に在すかは、私は知らなかつたのですが、貴

下の在すといふ信仰だけは奪ふことは出來なかつたのでムいます。又人間の爲す業は皆貴下の支配に屬してゐるといふ信仰をも、私から奪ひ敢ることは出來なかつたのでムいます。

けれども私が此信仰は或る時に强く、また或時には弱くなりましたが、貴下の實在し給ふことと、私共を顧みたまふこととは常に信じてゐました。たゞ貴下の本體について、どう考へたものであらうか、或はまた貴下に私をつれて行く路、卽ち貴下に伴れ歸る道は、どういふ路であるかを私は知らなかつたのでした。そこで單純に理性によつて眞理を見出すには、私共は餘りに弱は過ぎ、その爲めには聖書の權威が必要でありましたから、私は當時下のやうに信ずるやうになりました――貴下か若し私共が聖書によつて貴下を信じ、また聖書によつて貴下を探すことを好み給はなかつたとしたら、貴下が總ての國々で、聖書に斯のやうに卓越した權威を決して與へ給ふことはなかつた筈である――と。その理由は私が是迄聖書のうちで怪しみ、又躓かされたことが、多く合理的に說明せられるのを聞いて、私はその奧義の深いことを思ひ、その權威はます〳〵尊いもとと私に見えるやうに

なり、また神聖な信仰に適ふやうに思はれ出ましたからでムいます。聖書は萬人に讀まれて理義明白ではムいますが、その意義はいやが上にも深遠で、その奥義には威嚴が具はりしかも全く謙讓抑遜して、言葉を平易にし、文體を通俗にしながらも、萬民をその公開したところの懷中に受入れて、狹き門（眞理に入るの門を意味す）を通つて、貴下に到る少數の人々を導くために、心の光りではないやうなものにも注意を加へてをります。もつとも若し聖書が巍然として、斯の樣な權威の絕頂に立てをらず、またその神聖な虛謙によつて、その懷に群衆を引き寄せなかつたならば、此少人數ですらも遙かに大多數であると申されませう。當時私はそんなことを考へてをりましたが、貴下は正しく私と一緒に居り給ふたのです。私が嘆きましたら、貴下は私に聽き給ひましたし、また世の廣き路（亡びに至るの道は廣くしてその門は大いなり）をさすらへ歩るいてゐましたけれども、貴下は私を棄て給はなかつたのです。

六　野望は空し

私は榮譽、富貴、婚姻といふやうなものに憬れてゐましたので、貴下は私を嘲り給ひました。私はこんなものに於て、最もつらい苦難を被つたのでムいますが、貴下は貴下御自身ならぬ物は何に限らず甘くないやうにして、益々み惠みをふかく爲し給ひました。主よ私の心を御照覽下さいませ、貴下は斯麼ことを私が想ひ起して、貴下に告白することを望み給ふのでムいます。ですからどうぞ私の魂を貴下に寄り縋らして下さい。貴下は私の魂を、死の粘ばり强い鳥黐から解き放して下さいました。私の魂はどんなにかみぢめなものでムいましたらう。しかも貴下はその傷の痛みを激しからしめ給ふたのです。それは私の魂が一切のものを放棄して貴下に立ち歸り、立ち歸つたゝめに、癒やされるようにといふ御心盡しでムいました。貴下は萬物を超越して在すのです、そして貴下のみ手を離れては萬物はあり得ません。さて私が皇帝に對する頌辭を述べる日に、貴下は如何に私をあしらひ給ふて、私を困らしておしまひなさいましたでせう！　私はまつたく困つてしまひました。私は嘘ばかり吐いて、しかもそれが嘘だと知つてゐる人々から喝采せられたのでした。

私の心は斯うしたつまらないものを得たいといふ慾望にあこがれて、思ひに身を燒き盡くすのでした。で或るとき、私はミラノの街を通りますと、一人の乞食がをるのを見付けましたが、彼は滿腹で、戯れ興じてゐるやうに私には思はれました。そこでは私は嘆息して一緒にゐた友人達にむかひ、私共自らの狂亂の結果起つた多くの悲しみについて語りました。といふのは私共はその時自分達は慾望にかられて、自分の不幸といふ重荷を曳ずり、又その曳ずることによつて一層荷を重くして、大に艱難辛苦しながら、或る目的を達せんと努力してゐるのでムいました。然るに私共が達しようとしてゐたことそのものは、既にその乞食が到達してしまつてゐたところなのに、私共は乞食の喜悅にすらも、遂に到達することは出來なかつたのでムいました。換言すれば、彼が乞食して得た金錢に換へて得たその快樂を、私共は斯くの如く迂餘曲折、百方苦しみながらに搜し索めてゐたのでした。が然し彼も是も共に現世の幸福に過ぎません。彼とて眞の幸福を有つてゐたのではありません。けれども私は未だも斯うした野心を抱いて、なほ一層確實ならぬものを求めてをり

ました。彼は確實に喜んでゐました。然るに私は心配してゐたのでムいます。彼は安心してゐました、然し私は不安の裡にゐました。けれども人が若し私に、樂しむ方がいゝか、恐れる方がいゝか、お前は何つちを取るかと、訊きましたなら、私は樂しむ方を取ると答へたでせう。更にまた、では乞食たることを望むか、それとも當時のお前自身であることを願ふかと訊いたなら、私は心配と恐怖とに疲れてはゐましたけれど、矢張り、自分自身であることを願ひましたらう。がさういふふうに判斷するのは間違つてをりまして、決して本當ではムいません。といふのは、私が乞食にまさる學問をもつてゐたにしても、私は乞食にまさるとは申されないからでムいます。私は學問に喜悅を見出さず、却つて學問を以て人を樂しましたのでムいました。即ち人々を敎へることはしないで、只彼等を樂しましただけでムいました。ですから貴下も又懲しめの杖をもつて、私の骨を碎き給ふたのでムいます。

私の魂に向ひ「人の樂しむ理由には相違がある。あの乞食は醉ひを、お前は榮譽を樂し

んだのではないか」といふ者よ、私の魂から去れ！　主よ、此處に所謂る榮譽とは何でムいますか。貴下に於てのそれではムいません。乞食の樂しみが眞正のものでないやうに、私の榮譽も本當のもゐではムいません。しかも私の魂を覆滅することにかけては一層大きいのでムいます。彼はその夜自分の醉ひを消散さしてしまひましたでせう、けれども私は醉うたまゝに寢て、又醉うたまゝで起きました。神よ、貴下は私が幾日斯のざまであるか知召し給ふのでムいます。けれども「何處から來るかによつて相違がある」がムいます。私もそれを承知してをります。また敬虔な希望の歡喜はこんなつまらないものとは比較にならない程相違してをります。然し其當時に於ては、乞食の方が私よりも上でした。といふのは彼の方が疑ひもなく私よりは幸福だつたからでムいます。彼は喜悅に涵されてをり私は心配に惱まされてゐたからといふだけではなくて、彼は祝福の施與者の上に降らんことを言つて葡萄酒を獲ましたのに、私は僞りを語りながら虛しいものを求めたからでムいます。當時私はよくこんなことを親しい友達に話しました、そしてそれが私にとつてどん

な結果を齎したかを屢々氣付きました。それが私ととつて損となつたときには、私は憂ひました、そして私の不幸を倍にしました。また幸運がほゝゑみかけてくることがあつても私はそれをとらへることを厭がりました。何ぜかなれば幸運は殆んどいつも私がそれをとらへるに先立つて、逃げ去つてしまつたからでムいます。

七　友を同心せしめる

友人として共に生活してゐた私共の間では、いつも此事を慨いてをりましたが、中にも私はアリピウスとネブリディウスとよく此事を語り合ひました。この二人のうちアリピウスは私と同じ市に生れたもので、兩親は其市の上流社會のものでしたが、彼の齡は私よりも上でした。で彼は、タガステの市で私が初めて教授を開いたとき、私について教はり、後カルターゴに行つてからも、私について勉强したのでムいます。彼の目に映じた私は、親切で且つ博學な人だつたので、彼は大變私を慕ひ、私の方でも又、彼が年の少ない割には

極めてその德性の著しいのを認めたので、彼を愛しました。けれども馬鹿げた見世物に熱狂してゐたカルターゴ人の惡風俗の渦卷は、彼を演技場裡の狂瀾に溺沒さしてしまひました。然し彼が此のやうに、無慘な目にあつて、その渦中にころがつてゐる時には、私は其處で、雄辯學の師となつて、公立學校をやつてゐたのでしたが、生憎くと、私の父と彼の父との間に或る事情の爲めに、仲違ひを起して、彼は未だ私に敎へを乞ふ都合になつてをりませんでした。私は彼が演技場の見世物にどれ程深く溺惑してゐるかを見、且つその有望な前途を失はうとし、既に幾分失つてゐるの見まして、大變に心配致しました。けれども私は友人としての好誼により、又は敎師の威光を笠に被つて、彼を諫め、制して、正しい路に呼び戻すことは出來なかつたのでした。といふのは彼は私に對して、彼の父と同樣な惡感を抱いてゐると思つてゐたからでムいましたが、其實さうではなかつたのでした。ですから彼は此事については、彼の父の意見がどうであらうと頓着せず、私に會釋をしたり、又折々は私の敎室へやつて來て、少時講義を聽いては立去るやうになりました。

然し私は、彼がつまらぬ遊戯などに夢中になつて、盲目的に、無暗な慾望に逸つて、その爲めに折角の天才を滅ぼしてしまはないように忠告することを忘れてをりました。けれども主よ、自らの造り給ふた萬物の舵を司り給ふ貴下は、後になつて、貴下の子供達のうちから選ばれて、貴下の奥義の祭司となる筈の彼を忘れ給はなかつたのです。また彼の改悔を明瞭に貴下に歸し奉るが爲めに、貴下はそのことを私を通して爲し給ふたのですが、私はさうとは悟りませんでした。そこで或る日のこと、私は學生達を前に置き、いつものとほり敎壇についてゐたとき、アリピウスが入つて來て、私に會釋して、其處に坐り、私が論じてゐることに心をとめました。其時偶然、私は或る文章をとつて、それを講述してをりましたが、それを說明するのに、私の言つてゐることに興味を添へ、且つ之を一層明かならしめるつもりで、私は演技場のことを例に引かうと思ひ付き、斯の遊びに狂してゐる者共を烈しく罵つたのでムいます。神よ、貴下は知召します、私は其時、別段アリピウスを此精神的惡疫から癒やしてやらうなどとは夢にも思つてはをりませんでした。けれども

それを聞いた彼は、その事を自分に宛て、言つたことだとばかり思ひ込んでしまひました。そして他の人であつたら、私に對して怒りを發して、怨むべき筈のところを、此誠實な青年は、自分自身にむかつて憤り、却つて愈々私を慕ふやうになりました。といふのは貴下が、前に「智慧ある者を責めよ、さらば彼汝を愛せん」(箴言第九章第八節)と、仰言つて、貴下の聖書に編入し給ふだからでムいます。けれども私は彼を責めたのではなかつたのですが、知るも知らぬも總ての人を、貴下自ら知ろし召す順序(その順序は正しいのです)により用ひ給ふ貴下は、私の心と舌とを燃える炭となし給ふて、之により、此弱つた有望な魂に火を點けて、此通り癒やし給ひました。貴下の憐憫を考へない者は、貴下の讃美を稱へぬやうになすつて下さい。私は衷心から貴下の憐憫を告白致します。彼は私の此言葉を聞くや否や、好んで飛び込んで、そこで怪しい歡びに目を晦ましてゐた、非常に深い坑から、飛び出して、非常な克己心に振ひ立つたのでムいますもの。斯うして演技場の遊戯はのこらず彼から飛び去つて、再び彼は其處へ參らなかつたのでムいます。そこで彼は私を教師にし

たいとその父に願ひました。父は元より之を好まなかつたのですけれど、彼はとう〳〵父を說き伏せ、父も讓步して許るしたのでムいます。でアリピウスは再び私の聽講生となり私と一緒に、同じ迷信に陷り、マニケウス敎徒の間に伍して、外見だけの節制を守りました。彼は之を眞正で、且つ誠實なものだと思ひました。けれども本當のところそれは未だ德の最深處に觸れることの出來ない影でありました。しかも贋物に過ぎないもの〻上つ面だけに欺かれ易い魂をとらへたのでした。

八　アリピウスの再誘惑

けれども彼は兩親の榮達に眼が昏んで、矢張り此世の道を棄てず、法律を學ぶ爲め、私よりも先きに羅馬へ渡つて、其處で奇怪千萬にも、劍士の決鬪見物に耽るやうになりました。そのわけは、彼は最初斯うした見物を厭つて、排斥してゐたのでしたが、晝飯を喰つて歸る數人の同級生で、親しい者共と、フト街に遇つたのでムいます。すると友人達は烈

しく拒んで抵抗する彼を、心安立ての腕づくで、殘忍、血腥い此野蠻な見世物の行はれてゐたその當日、演技場に拉し去つたのでした。彼は其時友人達にかう申しました――「たとへ君等は僕の身體を彼處へ引張つて行つても、僕の心と眼とをそんな見世物に向はせることは出來はせんぞ。だから僕はゐたつて、ゐなかつたも同樣だ。僕はこの見世物と君等に打ち勝つのだ」と。友人達はそれを聞いて、よしそれでは、果してそのとほりに出來るかどうか、試してみるといつて、彼を引張つて行きました。彼等はアリピウスと共處に行き着いたとき、彼を及ぶ限り最上の場處に坐らせました。そのとき滿場は恐ろしい歡樂に熱中しきつてゐたのです。けれども彼は眼瞼をとぢ、心が斯る罪惡に向つて行くことを禁制しました。若し彼が耳をも此通りにとざすことが出來たらよかつたのでムいましたらうに。といふのは劍士が鬪つて斃れると、觀客の怕ろしい叫び聲が、烈しく彼の耳をうち、彼は好奇心にすつかりと打敗かされ、どんなものが眼に映つたにしろ、自分はきつとそれに打勝つて、本心を紊すことはないと、覺悟をしたものゝやうに、眼を開いたのでした。

その爲め彼は自分が見たいと熱心に望んだその劍士が肉體に受けた傷よりも、更に深い傷を彼の魂に受けました。また斃れて、大きな叫び聲をあげたものより、なほ無慘なさまで彼は精神的に斃れたのでした。此音がアリピウスの耳から入つて、彼の眼を開けましたそれはその間際まで勇敢といふよりも、寧ろ剛腹であつた彼の魂を取り挫く道を開く爲めであつたのです。と申すのは、彼の魂は、貴下に依り頼まなければならん筈のところを、不遜にも自分に依り頼んでゐたので、それだけ又愈々弱かつたからでムいます。そこで彼は此血を見るや否や、直ちに此殺戮の酒を飲み、脇目も振らずして、之に眼を注ぎ、兇猛な快感を飽くまでも貪り食らひて、しかもそれをさとらず、罪すべき爭鬪に滿悅して、血腥い歡樂に醉ふたのです。今や彼は入場した時の彼ではありません、矢張り其處にゐた群集の一人でした。只彼は後から來て、それに加つたのです。いやまつたく、彼をつれ込んだ者共のお仲間だつたのです。それ以上もう言ふ必要はムいません。彼は眺め、喝采し、興奮し、狂亂しつゝ此處を立ち去つたのでムいます。此狂亂は嘗に彼をして此處に彼を拉

し來つた友人達と一緒に再び見物に來させたばかりではなく、却つて自分が卒先してさうした程夢中にならしめました。けれども貴下は最も強い、最も憐み深いみ手をもつて彼を此處から引き出し、自分にたよらず、只貴下にたよるべきことを彼に敎へ給ふたのでムいます。

九　アリピウス盜みの嫌疑を受く

けれども之は後々の藥になるようにと、彼の記憶に貯へられました。なほ又彼が未だカルターゴに於て私の生徒として學んでゐた時分の同樣なことも矢張りさうせられました。その話は斯うでムいます。彼は學生達がいつもすることになつてゐる、自分の演說の課題について、お午(ひる)の時分、廣場(フォルム)(Forum は野天の廣場でローマの學者政治家が人を集めて演說するところ)で考へてゐたとき、貴下は彼を盜人として其處の警官に逮捕せられることを許し給ひました。惟ふに、貴下がこんなことをゆるし給ふたわけは他でもありません、後にはあのとほり大きな人物となるべき

彼に、物事を批判するときには、輕々しい信念によつて、猥りに人を罰してはならないことを、既に學ばして下さつたのでムいませう。彼は書板と筆(書板は板に蠟を塗り筆は鐵製のもの)とを携へ只ひとり裁判所の前を歩るいてゐたとき、學生達の仲間の一人で、本當の盜人である青年が、そつと斧をもつて、アリピウスに氣付かれないで、忍び込み、銀細工人達のゐる頭上を覆ふてゐる鉛の格子に達し、その鉛を切り取りにかゝりました。けれども上に聞える斧の音に、下なる銀細工人共が氣がついて驚き騷ぎ、人をやつて、其處に來合せた者は誰でも捕へさしました。其盜人は此騷ぎを聞くと逃げてしまひました。そして小斧をもつてゐては捕へられる恐れがありますから、それを棄てゝ行きました。此方(こなた)はアリピウス、その盜人の這入るのには氣は付かなかつたのですが、出て行くのを認め、その急いで逃げ去るのを見ました。そこで不思議に考へ、何事が起つたかを知らうとして、其處に這入り、小斧の打棄てあるのを見付けて、不審に思つて立つてゐるところを、どや〳〵とやつて來た人達は、双物を携へた奴が只一人其處にゐるのを見て、これこそはあの音を立てた奴で、

自分達が捕らへに來た其盗人だと思ひ込み、有無を言はせずアリピウスを引捉へ、曳きずり行き、市場の人々を集め、悪名高い一人の盗人を首尾よく捉へたことを自慢致したのでムいます。それから彼は裁判に附せられる爲めに、其處から伴れ去られました。

されども彼が受くべき教訓は是だけで充分だつたのでムいます。といふのは、主よ、貴下は直ぐにおいでになつて、罪の無い彼を救ひ給ふたからでムいます。たゞ貴下だけが罪無い人の證人に在し給ふのですから。

扨てアリピウスが曳き行かれるとき、公共の建物を管理してゐた一人の建築家に出會ひました。アリピウスを引つ捉らへた者共は此人に會つたのを非常に悦びました。といふのは、それまで廣場(フォルム)で品物が紛失した時には、此人はいつも此者共の仕業だらうと嫌疑を掛けたのですから、今アリピウスの捕らへられたのをみせて、是まで行はれた竊盗は誰がしたものだかを、此建築家に知らしてやるつもりだつたのです。然るに此人はいつも御機嫌伺ひに行く、或る元老院議官の家で、屢々アリピウスにあつてゐたのですから、直に彼で

あることを認めて、その手を取り、引き離して、一體どうしてこんな災難に遭つたのかを訊づね、詳細に事情を聽き取り、其處にゐて騒ぎ立ち、喚き立て、脅かしてゐる者共に向ひ、自分に跟いて來いと命じました。そこで一同は偶然實際に盗みをした青年の家の前を通りました。すると入口の前に一人の少年がゐましたが、主人の困ることなんか少しも知らないで、すつかり前後の事情を打付けてしまふ程の年のいかない者でした。此少年は主人の供をして市場に行つたから、よく知つてゐたのです。アリピウスは此少年を見て、直ぐあの場にゐたものであることを想ひ出し、建築家にそれを告げました。そこで建築家は件(くだん)の斧を少年に見せて——「之は誰のものか」と訊きますと——「私共のものです」と直ぐに告白して、更に深く訊ねられると、殘らず事情を打明けたのでした。そこでその事件はその家に移され、既にアリピウスを眞正の犯人と思ひ込んで、彼に對して威張つてゐた群衆は大に狼狽したのでムいます。貴下のみ言葉の管理者でありまして、同時に貴下の教會に於ける多くの事件の審判者となるべき筈であつた彼は、善い經驗と教訓とを受けて立去り

ました。

十　アリピウスの廉潔と、ネプリディウス

其次には私は彼と羅馬で逢ひましたが、彼は私と強い友情の緣に結びつけられて、一緒にミラノへ行きました。それは一つは私と離れることがいやなのと、もう一つは自分の意志によるよりも、寧ろ親の意志に服從して學んだ、彼が法律の智識を實際に活用するつもりてあつたのです。其處で彼は三度剖審官の役をつとめ、その清廉潔白を以て人々を驚かし、又自分では世間の人々が潔白よりも黃白を尊ぶのを見て驚きました。更に彼の天性の試煉は啻に貪婪を餌としてのみならず、又恐怖の拍車によつても行はれたのでムいます。羅馬に於て、彼は伊多利國會計長の副官を勤めてをりました。その頃其處に一人の最も有力な元老院議員がムいまして、その者の恩顧を受けたものも多く、また彼を恐れて、困つてゐた者も多かつたのでムいます。彼は法律には許るされてゐないことを、自分の權力を

濫用して、アリピウスにさせようと致しました。けれどもアリピウスは斷然反抗したのでムいます。そこで賄賂が彼に約束されました。然しアリピウスは衷心から之を輕蔑して、唾棄しました。そこであらゆる脅迫は彼の周圍に集まりました、が彼はそれを悉く一蹴し去つたのでムいます。斯くまでも有力である、無數の手段を盡くして、利を以て誘ひ、害を以て威しても、巍然として動かず、著名な人々の恩顧をも受けようとは冀はず、又その怨みを受けても恐れなかつた彼が稀有の美事な精神には、人々皆驚嘆致しました。アリピウスを自分の補佐役にしてゐた裁判官すらも、公然これを拒むことをしにくがり、内々は自分でもそんなことをし度くないものですから、アリピウスに責任をゆづつて、彼がどうしてもそんなことを承知しないから、出來ませんと言譯を致しました。實際裁判官がその高官の意志を通さしたなら、アリピウスは確にその職を抛つて去つたのでムいましたらう。けれども只一つ彼が殆んど誘惑に負けようとしたことがありました。それは學問好きの彼は、護民官の買ひ取る直段で、本を謄寫さして、自分のものとしようと致した事でムいま

す。けれども彼は正義といふものを考量して、その目的をより善い方に轉じ、さうすることを禁じてゐる公平の方か、それによつて許さうとする權力の方よりも有力であると考へたのでした。是等は小さなことでムいます。けれども小事に忠なる者は大事にも忠でムいます。また貴下の口から出る眞理は決して無用ではムいません。即ち「汝等もし不義の富に忠ならずば、誰か眞の富を汝等に任すべきや」（ルカ傳第十六章第十節）と、また「汝等もし人のものに忠ならずば、誰か汝等のものを汝等に與ふべきや」（ルカ傳第十六章第十一・第二節）と。アリピウス當時は此とほり私に縋つてゐました。そして如何いふ狀態の生涯を送つたらいゝかと、私と同樣判斷に迷つてをりました。

またカルターゴに近いその故鄕を去つて、後、更に彼が永らく住んでゐたカルターゴをも去つたネブリディウスは、大きな財產と邸宅とを棄てゝ、その上にも彼に從つて來るのを好まなかつた母をも棄てゝミラノに來ました。是はたゞ私共に熾烈火の如き熱心をもつて、眞理と智慧とに活きようとしたが爲めに他ならないのでムいます。祝福された生活の

熱心な探求者として、また最も困難な問題の最も鋭い考究者として、彼は私のやうに嘆息し、私のやうにためらひました。斯うしてそこには三人の貧しい者の口がムいまして、御互に自分の窮乏を嘆き合ひ、「時に從ひて彼等に糧を與へ給はんが爲めに、貴下を俟ち望みました」（詩篇第百十四の十五）そして貴下の御憐憫により、私共の此世の業に伴ふあらゆる苦惱の裡に在つて、私共は前途を望んで、何で斯麼苦艱を忍んでゐるかと、其理由を訊ねましたが、只暗黑が私共を包んだゞけでムいました。ですから私共は後をふりかへつて——「では何時まで斯うであらうか」と申しました、私共は屢々斯う申したのです。しかもさう申しながらも、なほ是等のものを棄てなかつたのでした。といふわけは、是等のものを棄てたからとて、別に何を抱かうか、一定したものか明かには分らなかつたのでムいますから。

十一　オウガスチンの困惑

私はまた、物事を惟々（つらつら）と考へてみるに、智慧の切望に火と燃え立ちて、是をさへ見出し

たなら、其他の總ての虚しい慾望の、空虚な望みと、欺瞞する虚妄とを棄てゝしまはうと心を定めた私が十九の齢以後、どれ程長く年月が經つてゐるかに驚いてしまひました。然るにどうでせうか、私は最早三十歳になつても、矢張り舊の同じ泥濘にへばりついて、無常流轉、私の魂を衰亡せしめる浮世の歡樂を貪つて、申しました——「明日こそは私はそれを見付け出さう、ほうら、マニケウス派のファウストスが來たら、一切を解決してくれるのだ。噫、諸君、偉大なる方々よ、アカデミコスの人々よ、生活を整頓することは迚も確實に考へることは出來ないのですか。否、私達に一層熱心に探らして、それだけまた絶望さして下さるなよ。ほうれ、教會の聖書のうちに、曩には不思議に見えたものも、今や私達に不思議でなくなつたぢやないか。且つ他の意味に正しく解釋し得られるのだ。輝く眞理の發見さるゝまでは、私は私の子供の時分、私の兩親が立たして置いて呉れた立場に、自分の足を踏み締めてゐよう。けれども立場を何處に探ねようか。又何時探ねやうか。アムブロシウスにはそれを聽てくれる暇もあるまいし、私共の方ぢや又本を讀んでゐる暇もな

いのだ。寫本をさへも私共は何處で手に入れやう。何處から、又何時それを調達しやう。誰からそれを借りやうか。時を定め、或る時刻を私共の魂の健康の爲めに、割り當てゝ貰ひませう。大きな希望の曙光があらはれた。公教の信仰は私共が考へてゐたやうなことを教へない。その學者達は神は人の體の形に制限せられたと信ずることを不敬虔であると言ふ。して私共はそのことの「啓かれんが爲めに、叩く」(マタイ傳第七章第七節)ことを躊躇しない。午前の時間は學生達に占められてしまう(教授をする故)、殘つた時間に私共は何をしようか。何もしないでどうしよう。けれども私共は何時私共の大きな友人等を訪れやうか、私共はその人達に目をかけて貰らはなければならないのだ。私達が學生に賣るものを、何時拵へようか。此緊張した氣持から、いつ心をくつろがして、のうゝされようか」と。

「あらゆるものは死滅しろ、私共はこんな空しい虚榮を追ひ拂はう、そして一生懸命に眞理の探求に身を委ねよう。人生は悲慘で、死は不定である。死が俄かに襲ふて來たならば、私共はどんな狀態で此世を去るだらうか。また此世で等閑に附してゐたものを、何處で學

ばれやうか。或は寧ろ、此等閑の罰を受けないだらうか。若し死自らは一切の憂慮と、意識とを殲滅するものであつたら奈何だらうか。さうだとすれば是こそまづ研究しなければならないのだ。けれどもそれは神の禁じ給ふところである。キリスト教的信仰の權威の最絶頂が、斯う全世界の上に擴がるとは決して徒爾でなく、又無益でもない。若し肉體が死ねば、その爲め魂も生命が盡きてしまふものなら、神は私共の爲めに、斯うまで大きなことを、決してしては下さらなかつたのだらう。では何ぜ世の希望を棄てゝ、神及び祝福された生命とを求めるため、全然自己をさゝげてしまふことを躊躇しないのであるか。だが待てよ、斯うしたものもまた樂しいものだ。そのうちにはなか〳〵樂しみも少くはない。二度それに立ち戻つてくるのは恥かしいことだから、私共は輕々しく是を拋棄してはならないのだ。ほうれ、今ぢや或る地位を獲ることなんか何でもないぢやないか。他に何にも有つてゐないにしても、私共は優れた友人を澤山もつてゐるのだ。また我々はさう急かずとも、長官になることが出來るだらうし、又我々の負擔を重からしめない程の資產附きの

妻も貰へるだらう。此處らがまづ我々が慾望の限度であらう。多くの偉大な人物、まなぶべき價値の最も多い人達は結婚して智慧の研究に身を委ねたのである」と。

私がこんなことを語つたり、こんな方面の定まらぬ風が變り變つて、私の心を彼處此處と吹きまくつてゐる間に、時は容赦なく經つてしまひました。けれども私は貴下に立歸ることを躊躇致しました。そして一日〳〵と貴下に於ける生活を遷延してをりましたが、その爲めに私自身に在つて死することを延期は致さなかつたのでムいます。幸福な生活を慕ひながら、私はその本家本元に入ることを恐れました。否、それから逃げながら、それを求めたのでムいます。私は、女に抱擁せられないければ、自分は餘りにみぢめなものだと思ひました。そして此弱さを癒すべき貴下の御慈悲といふ藥については、試みたことがなかつたから、思つたことがなかつたのでムいます。節制といふことも、私は自分にそれを行ふ力があるとは思ひませんでしたけれども、私共人間にはあるもので、愚かにも「汝給ふにあらずは、何人も慾を仰ふる能はず」（ラテン聖書中智慧の書第八の二）と書かゝれてゐることなどは知

らないうへに、若し私が自分の内部の呻吟をもつて貴下の耳に對して「開けて下さるよう」叩して、堅い信仰をもつて私の心配を貴下お任せしたならば、貴下が之を下さるのであるにとを知らなかつたのでムいます。

十二　獨身と結婚生活

アリピウスは私が妻を娶ることを制止して申しますのには――「若し妻を娶るなら、私達が久しく望んで來たやうに、安易な暇をもつて、智恵を慕ふ生活を決して一緒に送つては行けなからう」と。彼は當時自ら此點では非常に謹嚴でめつて、人も驚いてゐた程でムいました。又彼はその青年の始めに交接を經驗しましたが、それに執着することはなかつたのです。そして寧ろ彼はそのことを悔い、それを蔑み、それ以來今に至るまで全く性慾を抑へて來ましたので、猶更さうだつたのでムいます。けれども私は婚姻した人でも智慧を培ひ、神の恩寵を受けて、友達を眞實に愛した例をいくつもあげて、私は彼に反對致しました。私は彼等の偉大な精神を去ること遙に遠かつたのでムいます。そして肉的の疾患と、その快味とにとらはれて、それを解かれることを恐れながら、自分の鎖を縮めて曳き歩るき、また恰も彼が私の傷に觸るものゝやうにその善い諫言を斥けました。彼は私のいましめを、餘計な御節介をして、解いてくれるものに思はれたのでした。そればかりでなく蛇（サタンの形容創成記を見よ）は私の手によつて、アリピウスに語り、私の舌により、美はしい係蹄を編んでその徑をひろげ、彼の正しく、自由な足を絡らみまして、捕らへようと致しました。

アリピウスは、自分が並み〳〵ならず尊敬してゐた私が、此快樂の鳥黐につけられて、此事について、私共の間に議論を交はす毎に、私が、自分は決して獨身の生活を送ることは出來ないと云ふのを怪しみました。私の方ではまた、彼が怪しむのを見ると、自分を辯護致しました――「それは君はこつぞりと、一寸の間やつたばかりで、今は殆んど記憶にだけ殘つてゐるに過ぎないことだから、何にも苦しまないで、容易に侮られるけれど、僕の方では永い間慣習となつてゐる快樂だから、それは大變な相違がある。また婚姻といふ名

さへつけば、僕がこんな生活を決して輕蔑しなかつても、君はさう不思議には思はないだらうよ」と。そこで彼もまた決して斯樣な肉の快樂に負かされたが爲めではなくて、只好奇心の爲めに婚姻を希望致しました。彼は私に申しました――「君の生活は非常に樂しいものに見えるが、君が、此點に缺けたなら、生活も生活ではなく、刑罰であると謂ふのはどういう譯か僕知りたいからなんだ」と。即ち、斯うした囚れの鎖から解放せられてゐた彼の心は、私が奴隷となつてゐるのを見て、不思議におもひ、怪しみながら之を試めしてみようといふ慾望を起し、とう〳〵それを試みることになりましたが、更に一歩進んで、恐らくその怪しんでゐた奴隷の狀態に陷つたかも知れません。といふのは彼は「死と契約を結ばう」としたからでムいます。又「危險を愛するものは、それに陷るものだからです」(イザヤ書第廿八章第十五節)そのわけは、秩序正しい結婚生活、家族生活の務めにどれ程名譽があつたからとて、そんなものはたゞほんの僅かばかり私共を動かしたに過ぎなかつたのでムいますから。しかも私にあつては之を欲したのは重に私をとらへて、いぢめぬいた、飽くことを

知らない情慾に滿足を與へる習慣であり、彼をとらへて、曳摺つて行つたのは、嘆美する心でありました。いと高く在す御方よ、貴下が私共の卑しいのを棄て給はないで、憐むべき私達をあはれみ、奇しく、秘密の道によつて、私達を救つてやらうと、御入來なさるまでの私は、こんなものでムいました。

十三　オウガスチン妻を求む

そこで私は妻を娶らうと熱心に努力を續けました。私は求婚したり、女を約束せられました。之は母の苦心によるもので、母は日毎に私が洗禮を受けるに適するやうになつて行くのを見て、大變悅び、彼女の祈願と、貴下の御約束とが私の信仰のうちに段々と成就せられて行くのを認め、一度結婚したら、健全な洗禮によつて、私が潔められるように願つたのでムいます。まつたく其時分、私の要求と彼女の望みにより、母は心の強い叫びをもつて、私が行はうしてゐる婚姻について、貴下から何か幻によつて御告げを蒙りたいと、

日毎に貴下にお祈りを捧げたのでムいますけれど、貴下は遂に何事をも示さうとは爲し給はなかつたのです。尤も彼女は或る虚しき幻の樣なものを見ましたけれど、是は人が猛烈に精神を集中するときに起る種類のものでした。母はこんなことを私に話しましたが、それは貴下が何事かを示し給ふたときのやうな信仰を以てしないで、却つてそれを蔑んで話しました。そのわけは母は何とも言葉には現はし難い一種の直覺によつて、貴下の啓示と彼女自身の魂の夢との間に在る相違を辨別することが出來ると申してをりましたからです。けれども事情が切迫して、私はひとりの處女と婚約を結びました。けれどもその娘は結婚するにはなほ二つ年が若かつたのでムいます。けれども私は氣に入つたので、その年齢が達するまでは待つことにきめました。

註　法律による結婚の年齢 aetas nubilis はユスチニアヌス法典により十二才からであつた。

十四　理想社會の計畫

さて我々多くの友人仲間では、人生の煩しい苦難を語り合ひ、論じ合ひ、また嫌ひ、紛擾の巷を去つて、靜かに生活をしようと、殆んど決心をしたのです。此靜かな生活といふのは私共が有つてゐるものを殘らず持ち寄つて、一つの共同的家庭を作り、私共の友情の誠實により、是は誰のもの、あれは誰のものといふやうに、各自に所有しないで、總ての人が持寄つたものだから、全體を各自のものとして、また全體を總ての人のものとしようといふことでムいました。そこで私共が思ふには、此團體に加はつてゐる者は約十人あつたらうと。そのうち數人はなか〳〵な富裕なものでしたが、私共と同じ市民であつたロマニアヌスは中にも金をもつてゐました。彼は私が幼いときから非常に親しい友人でムいましたが、その時にはその事業を猛烈に行つた結果が重大な裁判沙汰になつて、法廷へ引き出されてゐました。彼は私共の新計畫に最も熱心でムいました。その上、彼の財產は他の者共よりのものよりも遙かに多かつたので、彼の聲は此計畫を說くとき特に權威がありました。私共は毎年二人の役員を選らんで、之に一切必要なことをやらして、他の者は面倒

しないでをらうといふのでムいました。けれども私共のうちの或る者は既に妻帯者であり。又他の或る者は結婚しようとしてゐるので、さうした生活をその妻女達が承諾するや否やといふことを考へ始めたとき、斯うもうまく立てられた計畫は、私共自らの手のうちで、味塵に碎かれて、棄てられてしまひました。そこで私共は嘆息して、世の廣い、坦々たる大道に私共の歩みを運ばせることになりました。さうなつたわけは、私共の心の裡には、多様多岐の思ひがあつたからでムいます。　然し貴下の聖旨は永遠に變ることはムいません。この聖旨によつて貴下は私共の考へを嘲り、貴下の聖旨の基礎を据ゑ、私共の魂を祝福を以て滿たし給ひました。

十五　舊の妾は去り、新たに妾來る

兎角するうち、私の罪は增し加へられました、そして私の結婚するのに邪魔になるといふ理由から、私と一緒にいつも臥てゐた妾は、私の側から引き離されたので、彼女にとら

はれてゐた私の心は裂かれ、傷つけられ血を流しました。そこで妾は他には決して男を知るまいと貴下に誓ひまして、自分が生んだ私の庶子を殘してアフリカに歸つて行きました。けれども女をすら摸ねることの出來なかつたあはれな私は、許婚の女が妻となるまでにはなほ二年もあるので、迚も遲いのに我慢がしきれないで、又別の女を手に入れましたが、是れも妻ではなかつたのです。といふのは、其女も婚姻の戀人ではなくて、只肉慾の奴隷に過ぎなかつたからでムいます。斯うして二度目の女により魂の患ひは持續せられ、力をつけられ、又增加せられて、婚姻の領域に届きました。しかも前の女を離別したことから受けた傷は癒やされないで、却つて非常に痛み、惱ましく、その後私の苦痛は薄らぎましたけれど、愈々失望すべきものとなりました。

十六　死と審判の恐れ

憐憫の源よ、貴下に讃美を捧げます、貴下に榮光を捧げます。私は愈々みぢめになり、

貴下ば愈々近づき給ひました。貴下の右の手は絶えず私を泥濘の中から引き出して、洗ひ浄め給ふたのですが、私はそれを知らなかつたのでムいます。また死と、將に至らんとしてゐる貴下の審判の恐怖より外には、何物も私を肉的歡樂のより深い淵から呼び返しは致しませんでした。また私の友人アリビウスとネブリディウスなどと一緒に善惡の性質について議論を闘はした時、私は斯う申しました――「僕が若しエピクウロスの信じなかつたこと、即ち人の死後その靈魂は生き殘つて、その生前の行爲に從つてそれ〳〵應報を受けるといふことを信じなかつたら、僕の心に於て勝利者として棕櫚の葉を受けたらうに」と。私はなほも訊きました――「僕達が若し不死であつて、不朽な肉體の歡樂を味ひながら、それを失ふ恐れがなくして生きていかれるならば、僕達は幸福であると言はざるを得ない。何で他に求めるものがあらうか」と。しかもそんなことは大きな辛慘の基であることを知らなかつたのでムいます。私は斯のやうに沈緬し、又目が盲いて、正直と美とは（それ自身の爲めに受け入れらるべきものとして）只内心によつて辨別さるべきもので、肉眼によつては見出されないものであることを知らなかつたのです。また、あはれな私は、こんな僞り（汚れたもの）が、どういふ源泉から流れ出してゐるかも考へないで、友達と一緒にこんなに愉快さうに話し合つたのでムいます。なほ又肉の歡樂がとれほど潤澤にあつたにしろ、當時私が抱いてゐた觀念によつてすらも、私は友達がなければ、幸福にしてはいかれなかつたのでムいます。しかも其友人を私はまつたく彼等自身の爲に愛し、私は又只私自身の故でもつて愛しられたのであると知りました。

あゝ曲れる徑よ！　貴下を離れ去つて、なほも善いものを獲ようと望んだ不遜な私の魂は禍です。私の魂は仰向けになり、横に臥、又腹匐つて、いろ〳〵に反轉してみましたが、矢張り苦しみを免れませんでした。只貴下だけは休憩していらつしやいました。そしてどうです、貴下は私共に近く在して、私共をその慘ましい漂浪から救ひ出して、貴下の道に置き、慰めて仰言います「來れ、われ汝等を導かん、またわれ彼處に汝等を負はん」（イザヤ書第四十六章第四節）

第七篇

一　神觀なほ解けず

私の恥づべき、罪の青年時代は今や死んで、私は壯年時代に移つて行きました。（彼の年は三十一オであつた）齢をとるにつけて、愈々私は空虛なものに汚されました。斯うして私共の肉眼に見えるものを除いては、如何なる本體をも私は考へることが出來なかつたのです。神よ、私は少し智慧がついてきて、傾聽しかけてゐましたから、私は貴下を人間の形に於て考へずそんなことを避けたのでムいました。そして私は私共の信仰の母である公敎會の信仰のうちに之を見出して喜びました。けれども他に何とも貴下を想像しようとも思ひませんでした。そして人たる、又斯麼人である私は、貴下を至上、唯一の眞な神と考へようと致しました。そして私の魂の奥底に於て、貴下は朽ちず、傷けられず、また變らないものと本當

に信じました。といふのはどういふ譯か分りませんが、私は朽つべきものは朽ちないものよりも劣等であることを明かに見て確信し、また何の躊躇もなく私は傷けられないものは傷けられるものよりも優等であるときめてゐたからでムいます。私の心は猛烈にあらゆる私の妄想を叱りつけ、只一擊のもとに、私の心の眼に群がつてゐる不潔のものを追ひ拂はうと努めました。けれども追ひ拂ふと直ぐに、瞬くうちに、それは再び群を爲して私を取り圍み、私の眼に迫り、私の眼を曇らして、貴下が人間の形にこそはましまさねど、それでもなほ貴下、すなはち私が、朽ち、傷けられ、變るものよりも優等であると思つた、朽ちず、傷けられず、變ることのない貴下を、世界に滿ち〳〵てか、或は又その外に無限の擴がりをもつてか、どつちにせよ空間に在すものとより外に考へることが出來なかつたのでムいます。そのわけはどんなものであらうが、此空間といふものを取り去られたなら、虛無、左樣全く虛無であつて、空虛ですらもあり得ないと思はれたからでムいます。例へば一の物體がその空間から除かれ、その空間には土もなければ、水もなく、又空氣もなく

一切のものがないけれど、なほ空間として、即ち無一物の延長として殘るとは全然ちがつてゐると思はれました。

ですから頭の御粗末千萬な私は私自身をすら判斷し得られないで、凡そ一定の空間に擴がりもなく、又溢れもせず、凝固もせず、膨脹もせず、或は此のうちの二三の次元の形を受けなかつた、或は受けることの出來なかつたものは全然無であると考へました。それは私の心は私の眼でみるやうな形に總てのものを纏めたからでムいます。　私が使用して、そんなものの像を描き出した此私の注意こそは、矢張りさういふ種類のものであつたことをさとらなかつたのでムいました。ですから私は、私の生命の生命にまします貴下を考へて、無限の空間に擴がり、此世界の全容積を到る處に貫通して、之を超越し、無量無窮の空間に遍在し給ふので、天も貴下を含み、地も貴下を容れ、萬有は貴下を保存して、しかも萬有は貴下に於て限られるけれど、貴下は何處でも限ぎられ給ふことのない巨大な一體にましますと想像致しました。即ち地上にある空氣が日光の自身を透過することを拒まな

いやうに、或は自身を裂き又は切るやうなことをしないで、自身を全く充たして貫かしめるやうに、私は只天と、空氣と、海との本體のみでなくて、地の本體もまた貴下を通過させることが出來るもの、そこで最大な部分も、又最少の部分も等しくそのあらゆる部分に亘り、神秘な靈感によつて、内からも外からも貴下の臨御を受け、貴下は斯くしてその造り給ふた萬物を治め給ふのだと思ひました。別に考へやうがなかつたので、私は斯う推察致しました。けれどもそれは間違ひでムいました。何ぜかなれは、若しそのとほりだとすれば、地の大きな部分は貴下の大きな部分を、小さな部分は小さな部分を含むといふことになり、結局、萬物が貴下によつて滿される有様は下のやうなものとなるからでムいます。即ち象の身體は雀の肉體よりも大きくて、その占めてゐる面積の大きいだけに、貴下を容れ奉つることもまた多く、その結果、貴下は世界の各部に片々に臨御ましまして、大なる部分では大に、小なる部分では小に在すと。けれども貴下はさうではなかつたのでしたが、それでも未だ貴下は私の闇を照らし給ひませんでした。

二　ネブリディウスの爭論

主よ私は、かの欺かれつゝ欺く者、また啞であつて（貴下の言葉が彼の口から聞こえないからです）語る者共を反駁することが出來ました。卽ち以前、私共がカルターゴにゐた時、ネブリディウスによつて說明せられたのを聞いて、私達がすつかり動搖さゝれたところの論を以て辯駁し得たのです。其說は斯うでムいます――「光明たる」貴下に對しマニケウス敎徒の對立せしめる暗黑の世界も、若し貴下が之と戰ふことを欲し給はなかつたならば、貴下に對し何をすることが出來ませうか。なぜかれば、彼等が若し、その暗黑は貴下に少しく害を加へてゐたゞらうと答へましたなら、貴下は傷けられ、又朽つべきものとなり給ふことになりませう。しかも若しその反對に、少しも傷けられ給はなかつたゞらうと言つたなら、貴下がそれと戰ひ給ふ理由がなくなりませう。別言すれば、貴下の一部分または一つの肢體、或は貴下御自身の本體から出た子孫が、反對の勢力、また貴下に造られないところの天性と混じ合つて、是等のものにより甚しく墮落し、一層惡るいものに變はり、遂に幸福から不幸に移り、救ひ出される爲めに、又潔められる爲めに、助けが要るといふやうな戰は、まつたく理由がなくなりませう。又貴下の「言」は此魂の束縛を解き、汚れを淸め給ふと申しても、しかもその御言葉自らは此同じ一つの本體から出てゐるものですから、矢張り朽ち果つべきものでムいます。ですから、貴下は、どんなものにましますとも、貴下の本體は朽つることはないと申しますなら、こんな言葉は皆嘘であつて、呪ふべものでムいます。けれども若し朽つべきものであると言ふなら、それこそ大の僞りであつて、その口から出るや否や、直ちに排斥すべきものであると。

そんなわけで、此ネブリディウスの議論は、滿腹の私がムカ〳〵して吐き出していゝ程な、いやな彼等を反駁するに充分足りたのです。何ぜかなれば、斯う考へたり、喋つたりしては、心も又舌も、最も戰慄すべき冒瀆なしには、遁れ去ることは出來なかつたからでムいます。

三　自由意志は罪の基

けれども私は又、啻に魂のみならず、私共の肉體までも造り給ふて、なほその上にも一切の萬有をも創造し給ふたところの私共の主に在す眞の神は、汚されることなく、變ることなく、移り給ふこともないと、私は確信してをりましたけれど、しかも惡の原因は明白に、又容易にさとることが出來なかつたのでムいます。然しそれは何であらうと、不變の神が惡によつて變じられるといふやうな、信仰の局限を受けないようにして、それを討究しなければならないと私は考へました。と申すのは自分自身を、その討究してゐる惡とするやうなことにはならないかと懸念したからでムいます。ですから、私が衷心から嫌つてゐたマニケウス教徒の信條は確かに間違つてゐることを認め、安心して惡の何たるかを研究致しました。そのわけは彼等は自分の身體が惡いことをしたと見るよりも、寧ろ貴下の本體が惡を容れ給ふのであると見て、彼等自ら惡に滿たされてゐたからでムいます。

そこで私は、自由意志こそは私共の惡を爲す原因であり、また貴下の義しい審判こそは私共が惡に苦しむ原因であると聞かされたことを悟らうと努力致しました。けれども是を明かにさとることは出來ませんでした。ですから私の魂の目を此深淵から引き出さうと努力しましたが、また再びそれに沈んでしまひました。屢々努めては沈み〳〵致しました。けれども是は、私が生命をもつことを知つてゐる程、よく私が意志をもつてゐることを知つてゐるといふことで、私を少しばかり貴下の方に向つて、光りに引きあげました。換言すれば、私が或ることを爲さうと欲し、或は欲しない時、その欲する、又は欲しない主動者なるものは私自身に外ならぬことを確實に認めたのでした、そして此處にこそ私の罪の原因の在ることを直ぐ悟つたのでムいます。けれども意志に逆らつて爲したことは、行つたと云はうよりも、寧ろ行はしめられたものであることを知り、それは自分の咎ではなくして、自分が受けた罰であると考へました。私は貴下は正しくましますと考へますから、自分は斯う不正當な罰を受くべきものではないと申しました。けれども私はなほ申しまし

た――私を造つたのは誰か。善の神、善そのものに在す神ではなかつたらうか。然るに私は惡を欲して、善を欲しないのは何故であらうか。そしてその結果罰しられるのがなぜ正當なのだらうか。私は最も甘い私の神に全然つくられたのに、こんなものを私のうちに入れ、此苦がい萌芽を私の内に入れたものは誰だ。さうしたものが、若し惡魔でありとすれば、その惡魔といふものは一體何處から來たのか。もし又、惡魔は自分の惡るい意志によつて天使から成り下がつたものだとすれば、彼を惡魔たらしめた此惡るい意志は何處から彼のうちに來たのか。總ての天使は最も善い造物主のつくり給ふたものではないかと。斯麼ことを考へて私は再び意氣悄沈し、迷はされてしまひました。けれども人が惡を行ふといはうよりも、寧ろ貴下が惡を爲さしめ給ふと考へる迷ひの地獄（此處では誰も貴下に告白致しません）には伴れて行かれませんでした。

四　神は不朽

そこで私は、前に朽ちないものは朽つるものよりも優つてゐることを發見したとほりに此事について何か他のものを見付け出さうと努力致しました。でその爲めに、私は貴下がたとへ如何なるものに在すにもせよ、決して朽ち給ふものではないと告白致しました。何せかなれば、最も高く、又最も善い貴下よりも優つた、如何なるものをも考へ得る人は未だ嘗つてありもしなければ、又後にもないからでムいます。既に申したとほり、朽ちないものゝ、朽つるものに優ることが、至上の眞理であつて、又最も確實ですから、貴下が若し不朽のものにましまさないとすれば、私は自分の心に私の神よりも優つてゐる者を想像することが出來るからでムいます。ですから朽ちないものゝ朽つるものに優ることを見たなら、其點に於て私は貴下を探し出し、それから何處に惡が存在するかを觀察し始むべきでムいます。即ち、貴下の本質を決して害ふことのない、腐敗が何處から來るかといふことを觀察すべきでムいます。如何なる意志によるも、如何なる必要からも、また豫知し難い原因に基くも、腐敗は決して神を害ひまつることはないのでムいます。何せかなれば、

神は御自身が神に在すが故でムいます。又神の欲し給ふところのものは善でムいますわけは、神自らが善に在すが故でムいます。また貴下の意志は貴下の力よりも大きくない爲めに、どんなことでも貴下は不如意の窮窟な目にあはされ給ふことはムいません。けれども若し貴下の御意志が貴下御自身よりも大でムいますなら、貴下御自身もまた大でムいませうなぜなれば貴下の意志と力とは仍ち神自らたるが故でムいます。また萬事を知り盡して給ふ貴下に、何の豫期なさらぬことがムいませうか。萬物のうちに貴下の知り給はない奈何ものもムいません。けれども何ぜ此上にも、神てふ本體は朽つべきものではないかどうかに就いて、語る必要がムいませうか。若し朽つるものでありとしたなら、それは神ではムいますまい。

五　罪惡の起原

私はまた惡が何處から來たかと訊ね、それを惡い道に於て求め、私の搜索そのものが惡

であるといふことを知らなかつたのでムいます。そこで私は自分の靈の眼前に、總ての創造と其の中に私共が見ることの出來るもの、卽ち、地、海、空氣、星、樹木、死ぬべき生物などを置き、更にまた、その中に私共が見ることの出來ないもの、卽ち蒼穹、總ての天使、天にある總ての靈などを置きました。けれども私はまるで是等のものは、私の想像するがまゝに、彼方に此方に置かれた物體であるかのやうに見なしました。又私は貴下の創造を一つの大きな塊型（マッス）として、その體の樣々の種類によつて區別せられ、その或は眞の物體であり、或は靈の代りに、私が物體であるやうに私自身が裝ふたものでムいました。そして私は神の容積を大きなものと思ひましたが、現實的な概念をもつ大きさではなく、私が知ることの出來ない大きさで、要するにたゞ漫然とした大きさであつて、しかも何れにせよ有限でありました。けれども主よ、私は貴下を、たとへ到る處に無限には在すけれど總ての部分に於て之を取り圍み、又貫通してるらつしやると想像致しました。卽ち丁度到る處に海があつて無限を貫き、又到る處に只一つの無限の海の外には何ものもなく、且つ

その中に大きいけれども有限な海綿があつて、その海綿はその總ての部分に於て、此無量の海水に充たされてゐるといふやうなものでした。私は此様に貴下の創造そのものを有限であるとし、そして無限なる貴下によつて充たされるのであると考へました。そこで私は斯う申しました――「神を見よ、また神の造り給ふたものを見よ。神は善である。否最も力強く在して、こんな物よりも遙に優秀に在すのだ。けれども善に在す神はこんなものを善に造り給ふたのだ。而して如何にそれを八方から取り卷き、充ち給ふかを見よ。では悪は何處にあるか。何處から奈何して此處へ忍んで來たか。其根本は何であつて、その種子は何か。或は悪といふものは全然ないものか。もし無いものとすれば、何ぜ私共は無いものを恐れて避けるのか。或は私共の恐れるのは無駄であるとすれば、此の様に徒に私共の魂を刺戟し、苛責する恐怖そのものこそは悪だ。左様恐るべきものがないのに猶ほ私共が恐れるから、一層大きな悪だ。だから此場合、私共の恐れる悪といふものが果してあるのか、それとも恐怖そのものが悪であるのか、どちらかだ。では悪は何處から來たらうか。善い

神は總てのものを善く造り給ふたのではないか。だから造つた主も、造られたものも皆善なのだ。では悪は何處から來たらうか。或は一種の悪い物質があつて、神はそれでもつて悪を造り、完成し、整頓し、その上になほその中に若干の物を殘して、之だけを善に變へ給はなかつたのか。けれども何ぜそんなことをなさつたのだらうか。どんなことでも爲すことがお出來なさるのに、全體を變化さして、どんな悪も後に殘らぬようにすることがお出來なさらなかつたのだらうか。最後に、神は何ぜそのものから何かを造らうとし給ふたのか。その全能をもつて寧ろ此悪しき物質を無に歸せしめ、御自身のみが全く、眞にして最も高い、無限の善とならしめ給ひさうなものだのに。或はまた、それは眞に神の意志に逆らつて存在し得られたものだらうか。或は悪は若し永遠の昔から存在したものなら、何故に神は過ぎ去つた無限の時間に、悪の斯う存存することを許し給ふて、斯麼に久しく經つてから後、それから何物かを造らうとし給ふたのだらうか。或は神が若しその時になつてから、俄かに思ひ立つて、何事かをしようとなさつたものならば、全能者は寧ろ此悪い

物質を無いものにして、御自身のみを眞、且つ無限の善たらしめ給ふた筈だが。或は善に在す神は、善いもの丶工匠であり、また造物主であることがいけないのならば、此惡るい物を先づ取つて無となし、善い物質を造り、是を以て萬物を造り給ふたであらうに。何ぜかなれば、神が若し自ら造り給はなかつた此物質の助けを受けないで、善いものを造り給ふことが出來なかつたとすれば、彼は全能者たることは出來ない筈であるから」と。私こんなことを私のあはれな胸のうちに、いろ〳〵と考へて、烈しく身を嚙む煩悶にすつかり押し潰され、眞理を見出すこともないうちに、死んでしまふだらうと恐れました。けれども公敎會のうちに在す貴下のキリスト、私共の主なる救主の信仰は、堅く私の心に結びつきました。私の心はまつたくは未だ多くの點に於て確定しないで、且つ正しい敎理から外づれてはゐましたけれど、なほ全然之を棄てることはなく、却つて日毎に益々その利益を受けました。

六　占星學の迷妄

此時分、私はまた占星者等の僞りの占ひ、不敬虔な迷妄とを棄てました。私の神よ、再び之について、私は貴下に向ひ、衷心から貴下の御慈悲を感謝致します。それは貴下でムいます。全然貴下でムいます、(貴下より外に、眞に死することのない生命であつて、又自らは光りを必要とせないで、而も光りを必要とする心を照らし、世界を支配して、ハタメク樹の葉にまでもその智の及ぶものは誰でせうぞ) 私の頑冥をなほして下さつたのは——此頑冥によつて私は賢い老人ギンディキアヌスや、又驚くべき才をもつ青年ネブリディウスと抗爭したのでムいます。賢い老人は私に烈しく反對し、秀才の青年は、いくらか疑はしさうに、屢々申しました——「未來を豫言し得る術はない。その者共のトひといふのは一種の富籤に過ぎない。彼等が言つた多くのものゝうちに、本當に起つたことがあつたにしても、それは自覺に基づくものではない、只喋つてゐるうちにまぐれ當りに當つたのだ」

と。そのとき貴下は私に、占星家に怠りなくトなつてもらう一人の友人をそなへて下さいました。彼は占星術には善く通じてはゐなかつたのでしたけれど、今申したとほり、好奇心からそれを訊いてゐたのでした。しかしその父から聞いたといふ、或ることを知つてゐたのでしたが、その事が此術の價値を覆すに足るものであるとは知つてゐませんでした。此友人といふのはフィルミヌスとよばれ、高等の學藝を敎はり、辯舌の修養をしてゐたものでしたが、親友であるところから、私にむかつて、自分が此世に希望を起しかけたことについて、所謂る彼の星宿から見て判ずればどうなるだらうかと相談したのでムいます。けれども私は此事については既にネブリディウスの意見に傾きかけてゐたときでしたから、敢て占ひを拒みもしないで、不確かながらも、心に浮ぶまゝのこととを言つてやりました。それと同時に、自分は今や占星術などは馬鹿氣た、つまらないものと思ふことを言ひ添へました。その時、彼が申しましたるには、自分の父は占星術の書に甚だ興味をもつてゐるそして彼と同等に之に熱心な友人をもつてゐた。二人は共に學び、語り、こんな馬鹿げた

ことに對する自分達の熱狂を一層煽り立て、とう〳〵その家に飼つてゐる、物言はぬ動物の仔を產む時刻を之によつて推測したり、またそれに關聯した天體の位置を觀察し、之によつて所謂る斯術の新らたな實驗をなさうと致しましたと。彼は更にその父が斯ういふのを聞いたことがあると申しました——母が彼を孕んでゐる時、父が友人の女中も又懷姙してゐました。犬のお產でさへも、極めて精密に豫測しようとしてゐる主人が、どうして之を見逃しませう。そこで極めて精密に觀測して、日と時刻と、更にその分時までも計算したところが、妻の方の子も、女中の方の子も同じ時刻に生れました。そこで二人とも、一人は自分の子に、他は新たに生れたその奴隷の子に、いづれも極く微細な點に至るまでも同じ星を當てなければならなかつたのです。何ぜかなれば二人の女が分娩を始めると、互にその家に起つてゐることを知らせ合ひ、實際に產の氣がつくのを見ると直ぐ互に送るべき使者の用意を致しました。此使者は卽座に報知を齎すように、何れも各自の領地で苦もなく準備されたのでムいました。そこで双方から各々人をやつたのですが、その使者はど

つちの家からも同じ距離を隔てた中間で出會ひ、双方とも星の位置や、その他の細い點までも、寸分の相違が認められなかつた程よく一致してゐました。フィルミヌスは申しました。けれどもその高い身分に生れた私は、世の光榮な道に進んで名を上げ、富を増したのに、此同じ星の下に生れた奴隷は決してその境遇の軛を弛めらるゝこともなく、その主人につかへたのですと。

私は之を聞いて信じました。此の様に信ずべき人に聞いたからでムいます。その結果私がそれまでの行き當つてゐた難關はすつかり壞れてしまひました。私はまづ第一にフィルミヌスを此好奇心から脱がれさしてやらうと努力して、次のやうに申しました。「君の星廻りをしらべて、本當に君に起つたことを知るには、僕は先づ君の兩親が、その附近の人達の中で、すぐれてゐたこと、君がその市の貴族の子であること、なほ自由人に生れ、紳士的教育を受け、非常に多く學問をしたことなどを知らなければならない。けれども若し君と共通の星である其奴隷が、私にその運を聞きにきたなら、私はまた、自分の言葉を

眞實にする爲めに、其奴隷が極めて卑しい血統に屬すること、その狀態の低いこと、又他の紳士とは非常にちがつた詳細のことを訊ねなければならない。だから若し僕が本當のことを話さうとするなら、同じ星宿を見て、いろ〳〵ちがつた運をそれでトはなければならんことになる。又若し同じ運を判じ出したなら、僕は嘘を吐くことになる。それだから僕は、總て此星宿を見て、そのトひが當つたといふことは、術によつてゞはなく、只偶然のまぐれ當りで、また間違ひといはれることは斯術に未熟なためではなくて、偶然當らなかつたゞけのことなんだと言はう」と。

さて斯う入口が出來たので、私は、自分が既に攻擊したり、蔑視して論破してやらうと思つてゐた此種の占星術を商賣にしてゐる阿呆共が、私に反對して、それはフィルミヌスが嘘を吐いたからだの、フィルミヌスの父が彼に嘘を敎へたからだのと言はないようにと思つて、大部分は母の胎から、ほんの僅かな時間——たとへどんな力にもせよそれが物の性質に影響を及ぼしたと、その者共が主張したところで人間の觀察では認めることの出來

ない、また眞の事を豫言せんが爲めに、卜者共がしらべる圖表の中には決して表はされない時間をおいて生れることをよく心にとめて考へたのでした。また彼等は決して眞實を語りはしないのです。何ぜかなれば、同じ圖表を見る彼はエサウとヤコブ（双生兒である）とについて同一運を有つものと占ふべき筈ですから。然るに二人の身の上に起つたことは同じではなかつたのです。だから彼の言ふことは間違つてゐるといふべきです。それとも當つてゐたとすれば、彼は同一の圖表を檢べて、同一の判斷を下さなかつたものと云はなければなりません。換言すれば、彼の言葉の當つたのは、術によつたのではなく、偶然に過ぎないのです。何ぜなれば、宇宙の最も正しい支配者にまします主よ、貴下は隱くれた本能によつて働き（相談するものも、助言をする者も、何をしてゐるか自分では分らんのです）相談するものには、彼が當然聞くべき筈のことを、諸々の魂の隱くれた功績により、貴下の正しい審判の奥底から聞かせ給ふからなのです。人をして、貴下にむかつて「是は何ですか」、「あれは何ですか」と言はせないで下さい。人にさう言はせないで下さい、斷じて言

はせないで下さい、人間は遂に人間たる外はないのでムいますから。

七　惡の根元を討ねる苦

さて私の扶助者なる主よ、貴下は斯樣にして私を鎖から解き給ふたのですが、私は「惡は何處から來たのでせうか」と訊ねて、其處を出ることは出來ませんでした。けれども貴下は如何なる思想の動搖によつても、貴下の實在し給ふこと、貴下の本體の不變に在すこと、貴下の守護し、審判し給ふこと、貴下の聖子なる我々の主キリスト、また貴下の公教會の權威が私に命ずる聖書と、そのうちに貴下が人の救の道を置いて、我々の死後に存續すべき生命に至らしめ給ふことなどの信仰から、私を離れ去らしめ給はなかつたのです。斯うして、是等のことが私の心に確實に据ゑられて、搖るぎもしなかつたので、私は熱心に「惡は何處から來るものでせうか」と討ねました。私の神よ、私の胸はどんな苦悶を忍んでをりましたらう。如何に呻吟してをりましたらう。私は口に出さずして、切に求めまし

た時、私の魂の無言の苦悶は、貴下の仁慈に對して大に叫び呼はる聲でありました。私の苦しむことを貴下は知召したのでしけれれど、人はそれを知らなかつたのでムいます。此苦しみから出て、私の舌によつて、私の最も親しい者共の耳に入られたのはどんなものでしたらう。時間の經過も、又私の口舌も消し難い私の魂の動亂は嘗て彼等の耳に響いたでせうか。然るに私の心の呻きから絞り出されたものは、悉く貴下のお耳に達したのです。そして私の願ひは總て貴下のみ前にあつて、私は自分の眼光を支配する主人ではなかつたのです。そのわけは、光りは内に向ひましたが、私は外に向つたからでムいます。又それはその場所(空間)にはなかつたのに、私自身は場所に含まれてゐる物に熱中致しましたので其處に私は魂を休むべき何の場所をも發見し得なかつたのです。又そんなものも私を歡迎して呉れて、「之で充分だ、それでよし」と私に言はせることは出來ませんのでした。更にまた、私を自分にとつて充分に善い處へ歸らして呉れることも致しませんでした。そのわけは私はそんなものよりは優つてゐましたけれど、貴下よりかも劣つてゐたからでムい

ます。そして私は貴下に歸屬して始めて、貴下は私の眞の歡喜となり給ひました。また貴下は私よりも低級に造り給ふたものを私に配屬せしめ給ひました。而して是は貴下のみ像(すがた)のうちに生きて(人は神の像に似せて造られたのである故)貴下に仕へて、私の肉體を支配して行くべき正しい掟、私の眞の適度、又中庸を得た安全でムいました。けれども私は傲慢にも貴下に逆らつて起ち、私の厚い楯をむけて主の頸に馳ぜかゝつたとき(ヨブ記第十五章第二十六節參照)、こんな低級に造られたものが私の上に乘せられ、私を壓へつけ、私をしてどうにもゆつくりと呼吸することを出來ないやうに致しました。そんなものは集團をなして私の眼を遮り、私が貴下に歸らうとすると、求めもしないのにその形が私の思ひの中にあらはれて、丁度「取るに足らぬ、汚れたものよ、貴樣は何處へ行くつもりか」と言ふやうでムいました。そして是等のものは私の傷から出來たものゝやうでムいました、といふのは「貴下は傲慢なものを傷けられたものゝやうに卑くし給ふからです」(詩篇第八十八の第十一)そして私は自分の傲慢によつて貴下から離れ、また傲りに膨れ上つた私の顏は、眼を塞いでしまひました。

八　神の救ひ遂に來る

けれども主よ、貴下はとこしへに在し給ひ、しかもとこしへに私共を怒り給ふのではムいません。何ぜかなれば、貴下は私共の塵と灰であることを憐み、且つ貴下のみ前に私の不具を改造することをよしと見給ふたからでムいます。また貴下は良心の刺戟によつて私を覺醒し、私の心の眼に、貴下のみ像がはつきりと映つるまでは、私をして安閑とさして置き給ひませんでした。そこで貴下の癒し給ふ、隱くれたみ手によつて、私の傲慢はしづめられ、また私の心の亂れて昏んだ瞳は泣き、健全な悲しみの、しみる眼の藥によつ日に日に癒やされました。

九　プラトーン派と基督教

それで貴下は先づ私に、高ぶる者を拒み給ふても、謙る者には恵みを與へ、また貴下の

言葉が「肉體」となつて人類のうちに宿り給ふたことにより、貴下の御慈悲の大きな働きにより、謙遜の道を人々に示す爲めに、甚だしく傲慢な人を用ひて、ギリシャ語からラテン語に譯せられたプラトーン派の書物を私に與へ給ひました。私はそのうちに、全然このとほりではなかつたのですけれど、次と同じやうな意味の言葉でもつて、多く、種々の點から立論された說を讀みました。卽ち「太初に言あり、言は神と共にあり、言は神なりき。この言は太初に神といもにありき。萬の物これによりて成れり、而して成りたる物に一つとして此によらで成りたるはなし。成りたるものに生命あり、この生命は人の光なりき。光は暗黑に照る、而して暗黑は此を悟らざりき。而して人の魂は光に就きて證をなすと雖も、自らはこの光にあらず。されど神の言は神なれば、此世に來りて總ての人を照らす眞の光なり。而して彼は世にあり、世は彼によりて成りたるに、世は彼を知らざりき。」(以上の言葉はヨハネ傳第一章、第一節にあるものと同じで、たゞ傍點の部だけがない)といふのでした。けれども此うちに私は「かれは己れの國にきたりしに、己の民は此を受けざりき、されど此を受けし者、卽ちその名を信ぜし者

には、神の子となる權を與へ給へり」といふ句は讀みませんでした。

私は矢張りこの本で、「神にまします言は肉によらず、血脈によらず、人の慾によらず、肉の慾によらず、たゞ神によりて生まれしなり」と讀みました。けれども「言肉體となりて、我等のうちに宿り給へり」とは讀みませんでした。私は此本のうちに、多く樣々の方法であつても、父の貌を爲し給ふみ子は神に等しからんとして盜みをなすことを好み給はぬ、何ぜかなればみ子の性は神と同じであるからと言つてあるのを見付けました。けれども——「自己を空しうして僕の貌をとり、人の如くなり給ひました、そして人の姿をして現はれ給ふて、自己を卑くして、死に至るまで、十字架の上につけられて死に至るまでも人に順ひ給ふたのです。その爲めに神は彼を死者のうちから高くあげて、諸の名にまさる名を彼に賜ひました。これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉くイエスの名によりて膝を屈め、且つもろ〳〵の舌の——「イエスキリストは主に在し給ふ」と言ひ表はして、榮光を父なら神に歸せるようにしようといふにある」とは是等の本の中には書い

てなかつたのです。一切の時以前、また一切の時を超越して、貴下の獨りの聖子は變り給ふことがなく、貴下と共に永久に存在し給ふこと、魂の祝福を受けるには、彼の充滿していらつしやるうちから受けなければならないこと、又賢からんがためには、人々はみ子のうちに宿つてゐる智慧を頒けていたゞいて、更新せられべきことなどは此書のうちにありました。けれども「時に及びて不虔なる者のために死にたまへり」また「なんぢはなんぢの獨子を惜まずして、われら凡てのために付したまへり」とは、其書のうちにはなかつたのです。その故は「貴下はこれ等のことを智者に隱して、嬰兒に顯はし給ふ」からですまた「勞する者、重荷を負ふ者彼に來れ、かれ汝等を休ません、彼は柔和にして心卑ければなり」「われらの患難と、我等の勞苦とを見、また我等の凡ての罪を赦して、彼は柔和なる者を正義に導き給はん、その道を柔和なる者に示し給はん。」といふ御聖旨によるのです。けれど謂る嚴格な教の長靴を履く者は「我に學べ、さらば汝の魂に休息を得ん」と、み子の仰せられたことを是に聞きは致しません。といふのは神を知りながらなほこれを神とし

て崇めず、感謝もせず、「その念ひは虚しく、その愚かなる心は暗くなれり、自ら智しと稱へて愚かとなりたればなり」（ロマ書第一章第二十二、二十二）とあるとほりだからでムいます。

なほまた私がそのうちに讀んだのは「彼等は朽つることなき汝の榮光に易へて、偶像及び様々なる像に似せ、朽つべき人および禽獸、匍ふものに似たる像となせり。」（ロマ書、第一章第二十三節）即ちエサウがその家督の權を失ふたエヂプトの食糧のことです（創世記第二十五章第三十三、四節）何ぜかなれば貴下の長子である人民は（ユダヤ人のこと）貴下の代りに四足の獸の頭を拜み、その心はエヂプトに歸り、彼等の魂である貴下の像を、草を喰ふところ牡犢の像の前に屈ましたからでムいます（詩篇第百六の二）私はそんなものを此處に見付けましたけれど、これに養ひを取りは致しませなんだ。そのわけは、主よ、貴下は兄を弟に仕へしめる爲め、ヤコブから、兄を貶しめた咎を取り去ることを嘉し給ふたからでムいます。斯うして貴下は異邦人を呼んで、貴下の遺業を與へ給ひました。そこで私は異邦人のうちから貴下のみ許へ參りました。そして何處にあつても、それは貴下のものであるのを見て、私は貴下が御自分の民のエチプ

トから携へて出でさせたいと御望みなさいました黄金に心をとめました。また貴下はアゼンスの者共に、貴下の使徒によつて「彼等の詩人の或る者の言つたやうに、我等なんぢのうちに生き、動き、また在るなり」（使徒行傳第十八章第廿八節）と仰言ひました。まつたく是等の書は其處から來たものでした。けれども私は、「貴下の黄金を以て仕へ、神の眞を易へて虚僞となし、造主を措きて、造られたるものを拜し、且つ之に仕へた」（ロマ書第一章第二十五節）ところの偶像に私の心を向けませんでした。

✝ 神は不滅の光

そこで私はもう己れに歸れと諭されて、貴下の御導きにより、私の自我の内部に入りました。貴下が私を御扶け下さつたればこそ、そんなことも出來たのでした。そこで私は入つて、魂の眼、（それは弱くはありましたが）此魂の眼をもつて、私の心の能力以上に、不變の光りを見ました。これは總て肉眼で見ることの出來る此世の光りではムいません。ま

た之と類を同じくした一層大きな光り、換言すれば、その輝きが遙かにまさつて大きいので、萬有を照らすといふやうなものでも厶いません。この光りはそんなものではなくて、それとは相違、左様、すべてそんな光りとはまるでちがつたものでムいました。けれどもこの光りは、水の上に浮いてゐる油のやうに、或は地上の天のやうに私の魂の上にあつたのではムいません。それは私の魂をつくつたから、それに優越してゐたのです。（單に位置が上であつたのではない、實質的優越だつたの意）又私はこの光りに造られたから此光りの下にゐたのです。眞理を知る者はこの光りの何たるやを知つてゐます、そして之を知るものは永遠を知るものです。愛は之を知つてゐます。あゝ永遠なる眞理よ、眞理なる愛よ、愛なる永遠よ、貴下はわたくしの神にまし給ふのです。私は晝も夜もあなたにむかつて嘆いてをります。私ははじめて貴下を知つたとき、貴下は私を迎へ給ふて、そこに見るべくして、未だ私が見ないものがあることを私に知らし給ひました。そして貴下は劇しい光りを私の上から降らし給ふて、私の弱い眼を射給ふたのです。その爲めに私は愛と畏怖とで顫るへました。また私は自ら

同じでない、異つた區域（靈的存在は距離によつて距だらず、不同によつて距たる）に居て、遙かに貴下から離れてをりまして、恰も天上から貴下の御聲が聞えて、かう仰言つたやうに覺えました——「俺は成人の食物だ。成長しなさい、さうしたらお前もそれを喰べることが出來るのだ。けれども肉を養ふ食物とはちがひ、お前がわしを同化するのではなく、反對にわしがお前を同化するのだ」と。而して私は、不義なるが故を以て、人を懲らし、また貴下は私の魂を蜘蛛のやうに消え失せしめ給ふことを知りました。（詩篇第三十九篇第十一參照）そこで私は言ひました——「眞理は有限または無限の空間に擴がつてゐないから、無だらうか」と。貴下は遠くから私に叫んで、答へ給ひました——「我は有りて在るものなり」（出埃及記第三章第十四節）と。そして私はこれを心のうちに聞くやうに、聞き、全く疑ふ餘地がなく、眞理を無しとするよりも、私は活きてゐることを疑ふ方を容易であると致しました。眞理は造られたものを通して、明らかに悟り得られるのでムいます。（ロマ書第一章第二十節）

十一　萬有存否の因

また私は貴下より以下の他物を見ました。そしてそれは全然あるのでもなければ、また全然ないのでもないことを悟りました。といふわけは、貴下から出てゐればこそ在るのですけれども、貴下が在すやうに無いから、無いのでムいます。さうですから神に縋りまつるは私に善いことでムいます。といふのは私が若し神のうちに宿らなければ、私は自分のうちに宿ることが出來ないからでムいます。けれども神は自身のうちに宿り給ふて、萬物を更新したまふのでムいます。またあなたは私の主にましますのです。その故は貴下は私の幸福を必要とし給はぬからなのでムいます。

十二　萬物皆善

また朽つべきものも善であることが私に明かとなりました。それは若し最高の善でない

ならば、朽ちもしますし、また善でないならば朽つることもないからでムいます。何となれば最上の善であつたとすれば、朽つべからざるものでありますし、また若し全く善でないならば、朽たしめらるべきものがそのうちに含まれてゐないはづですから。腐敗は物を損ねますけれど、その中から善を取り去らなければ、損ねることが出來ないものだからでムいます。だから腐敗は損ねることの出來ないものを損ねはしないか、或は凡て朽たされるものは善を缺いでゐるか、孰れか一方ですが、後の方がより確かでムいます。けれども物が若し一切の善をもつてゐないとしたら、それは全くその存在を失ふでせう。物が若し存在して、しかも、はや朽つることがないとしましたら、前よりは優れたものとなりませうし、また朽つることもなく永久に存在するでせうから。ものが悉くその善を失つて、而も優秀なものといふ説以上に何が奇怪なものがありませうか。それですから物が若し悉皆善をなくしてしまふならば、それは全然存在しなくなりませう。物が存在する限りは、飽迄も善なのでムいます。換言すれば、凡そありと有ゆるものは皆善なのでムいます。それ

によつてみますと、私がその起源を探りつゝあるところの悪は、本體ではないのでムいます。何ぜかなれば、若し本體でありますなら、卽ち善でなければならない筈でムいますから。何ぜかなれば、それは不朽の本體、別言すれば至上の善か、それとも又、それがどうにかして善でない限りは、腐敗させ難い、或る腐敗せる本體でなければならぬからでムいます。そこで私は、貴下が萬物を造り給ふたこと、また貴下の造り給はなかつたどんな本體も決してないことを知り、またそれが私に明白にせられたのでムいます。なほ貴下は萬物を平等に造り給はなかつたので、萬物はそれ〴〵善であります。それ〴〵善にして、又共に皆甚だ善く、我等の神は萬物を甚だ善く造り給ふたからでムいます。(創世記第一章第三十一節)

註* フロティヌスの影響を受けたオウガスチンは統一、平等よりも多數、變化、階級を含む調和を重んじた。

十三　神に惡はなし

また貴下に對しては何にも惡はムいません。まつたく、貴下に對してのみならず、貴下の創造全體にも惡はムいません。そのわけは、貴下が世界に於て定めたまふた規則を、外から侵して、損ひ得るものは一つもないからでムいます。けれども其部分に於て、何物かが他の或るものと調和しないから、惡とせられます。けれども是が他の或るものと調和すれば善とせられ、またそれ自身でも善なのでムいます。してまた、相互には協和しないそんなものも、なほ私どもが地と呼ぶところの低級な部分卽ち、雲や風の起る低空を頭上にいたゞく部分とは、よくそぐふのでムいます。ですから、そんなものは有るべからぬものだといふことを神は私に禁じ給ふのでムいます。何ぜかなれば、若し私がこんなものより外には何にも見ないでせうものなら、まつたく私はもつと善いものを欲しがるでせうから。けれども私共は只是だけの物についてだけでも貴下を讃めなければなりません。貴下の賞讃を受け給ふべきことは「此地を始めとして、龍や、總ての淵、火、雪、氷、み言葉に從ふ嵐、もろ〳〵の山、もろ〳〵の丘、實を結ぶ樹、すべての香柏、獸、もろ〳〵の審士、

年行ぬをのこ、若きをみな、老いたる人、をさなきもの、など皆貴下のみ名をたゝふることによつて」示されます。けれども「是等のもろ〳〵の天より、汝をほめたゝへ、もろもろの高き處にて、我等の神をほめたゝへ、なんぢの凡ての御使、なんぢの萬軍、日と月、すべての星と光、もろ〳〵の天の天、天の上なる水」(詩篇第百四十七篇一—十二)が貴下のみ名をほめたたへます時、私はもはや是より以上のものを望みませんでした、何ぜかなれば、私は總てのものを悟つたからでムいます。又より健全な判斷を以て、上なるものは下なるものよりも優さつてゐるが、上なるものが單獨であるよりかも、上下皆一緒の方が猶更善いことを悟りました。

十四　遂に神を悟る

貴下の創造の少しでも氣に入らない人々は、健全なものではムいません。同樣に私が貴下の造り給ふたものが多く私の氣に入らなかつた時、私は健全でなかつたのです。又私の

魂は私の神に對して、不機嫌になりきらなかつたので、それを不機嫌ならしめたものを貴下のものと見なすことを好まなかつたのです。此處に於て、魂は二個の別々な本體から成るといふ說を取るに至りましたが、それに安住を得難く、只徒に口舌を弄するばかりでムいました。そしてそれから立戻つて、魂は自ら全空間の無限を汎く貫通する神を造つて、それを以て貴下のであると考へ、それを心のうちに据ゑました。そこで魂は又もや貴下のお厭ひなさる、それ自身の偶像の神殿となり始めました。けれども貴下が、私の知らぬまに、私の頭をなだめ、虛しいことを見ないようにと、私の眼を閉ざして下さつた後、私は幾分か以前の私自身でなくなりました。そして私の狂氣はあやされて眠りました。斯うして私は貴下に於て醒め、貴下を無限に於て見ましたが、それは異つた仕方に於てゞムいました。しかも此視力は肉から導き出されたものではムいませんでした。

十五　萬有は神の眞と愛とを頒つ

また私はその他様々のものを顧みまして、その存在は貴下から出てゐること、また總ての有限なものは貴下のうちにあること、けれども只その様式がそれ〴〵ちがつてゐることは卽ち空間に於て在るのではなく、却つて貴下は總ての物を貴下のみ手のうちで、貴下の眞理に於て維持し給ふが故に、貴下のうちにあるといふこと、また萬物はその存在を有する限りは眞なること、また存在しないものを、存在すると思はない限りは、虛僞と稱すべきものではないといふことを私はさとりました。私はまた萬物は啻にその場所のみならず、その季節と適合すること、また唯一の永遠にましまし給ふ貴下は算へ難き時間を費して、後働きを始め給ふたのではないことを知りました。といふのは、今なほ働き、なほ殘り給ふ貴下による外には既に過ぎ去つた年も、亦來るべき年も、あらゆる時間といふものは、決して去來するものではないからでムいます。

十六　萬有皆善、只或る物に不適

私はまた健全なものゝ口においしいパンも、不健全なものゝの味覺にはまづいものとなり、また明らかな眼には慕はしい光りも、病氣してゐる者の眼には厭はしかるべきことは別段怪しむに足りないといふことを認めました。だから貴下の正義は惡い者が嫌ひます。貴下が善いものに造り給ふた蝮や虱にもまさつて彼等にいやがられます。然るに蝮や虱も矢張り貴下の創造の劣等な部分に適應して善でムいます。不善な者共は、貴下に似ることが少なければ少ない程、愈々劣れるものに適應し、貴下に似ることが多ければ多い程、優つたものに適應するのでムいます。斯うして私は不義とは何かと訊ねて、それは實體ではなくて、神である貴下の至高な實體を離れ、その臟腑を投げ出して、外面へ膨れ上るところの意志の悖戻に過ぎないことを發見致しました。

十七　神を識ることを妨ぐるもの

すると私は今、貴下を愛して、また以前のやうに、貴下の代りに幻影を愛しなくなつた

のを見て驚いてしまひました。けれども私は堅實に神を把持して之を樂しんだのではなくて、貴下の美に魅せられてしまつたのでした。それでも遂には自分の重さで、烈しく貴下から再び裂き取られて、是等の劣つたものに向つて、悲しみつゝ墮ちて行きました。此自分の重さといふのは肉についた習慣でした。けれども貴下についての記憶は依然私に殘つてをりました。また私は自分の頼り縋るべき者のあることを決して疑ひませんでした。只私は未だ貴下に依りすがる者ではなかつたゞけでした、といふのは朽ち果つべき肉體は私の魂を壓して、地上の幕屋（身體のこと）は多くのことを瞑想してゐる心に重しとなるからでムいます。そして私は、「世の創造以來神の見ることを得ない御働きは、その永遠の能力と神性すらも、神に造られた物により、明かに理解せられて、見ることが出來る。」（ロマ書第一章二十節）と確信致しました。といふのは、私は何によつて天上または地上の物體の美を賞したか、また私を扶けて、變るべきものを正しく審判し「是は斯くあるべく、是は斯くあるべからず」と言はしめるものは何であらうかを檢覈致しましたとき、なほ又、私は斯う判斷した

が、では何によつて斯う判じたのだらうと訊ねました時、變るべき筈の心を超越して、變らない眞の永遠の眞理の存在することを發見致しました。斯くして私は次第に物體から官能により知覺するところの魂へと移り行き、またその魂から肉體の感官の外にあるものを傳達し、またこゝより更に、總て肉體の感覺によつて受けたものを渡されて、それを判斷するところの理性の機能に進み行きました。此機能は私のうちで、自ら變化するものであることを發見して、自らその智を高め、かうして習慣により、自分の思想を抽き出し、矛盾せる幻想の群から引退するのでムいます。それは斯うして、少しの躊躇することもなく變らないものは、變るべきものに優ると叫ぶとき、その光りに沾ひをつけようといふのでムいました。それでまた、それは或る方法で知られなければ、變るべきものにまさるといふ確實な證據はないといふことも知れました。斯うして、顫るへる一瞥の閃きで、遂に「存在する者」にまで到達致しました。次いで私は眼には見え給はない貴下が、造られたものによつてさとられ給ふことを見ました。けれども私はそれに瞳をとめて、見てはをられな

かつたのです。また弱い私は撃退せられて、私が平生の習慣にふたゝび追ひ戻され、只身にもつてゐるのは懐かしい昔の記憶と、またたとへてみれば、匂ひを嗅いだゞけで、未だ食ふことが出來なかつたものに對する憧憬の外には、何物もなかつたのでした。

十八　基督のみが救ひ

かうして私は貴下を樂しむに足るだけの力を獲得すべき道をさがしたのでしたが、「神と人との仲保者、萬物の上に在して、永久にほめたゝふべき人であるキリスト・イエス」（モテ前書第二章第五節）を抱くまでは是を見出さなかつたのでした。イエスは私を呼び給ふて「我は道なり、眞理なり、生命なり」（ロマ書第九章第五節）との給ふたのです。そして彼は私共の受けることの出來ない糧に、私共の肉を混ぜ給ひました、別言すれば、「言」は肉體となりました。それは貴下が用ひて萬物を造り給ふた貴下の智慧が、嬰兒である私共に乳を與へるやうにとの思召であつたのです。といふのは私は自分が謙遜して、謙遜し給ふたわが主イエスを

抱きまつらず、またイエスが弱くなり給ふたのは、何事を私に教へるつもりであつたかを知らなかつたからです。何ぜかなれば貴下の創造のより高い部分の上に優越してゐる永遠の眞理にまします貴下の「言」は、投げ棄てられたものを、「それ御自身」にまで上げ給ふからでムいます。けれども此より低い世界に於ては「それ御自身」の爲めに我々の土の卑しい住家（我々の肉體のこと人は土より出づ）を建て給ふて、是により、彼は自分に從順ならしめようとした者共を謙ら下せて、自分の所に移轉せしめ、彼等の傲慢の病ひを健全ならしめて、その愛を醱酵させてお遣はしになりました。それは彼等が自分といふものを恃んで、なほも遠くに迷ひ行かぬように、けれども神聖それ自らが、その身に人間の皮を着てゐらつしやるが爲めに、我々の脚下に弱つてゐまし給ふのを見て（創世記第三章第廿一節）人間が自らの弱さを知り、そして遂に疲れて、その神聖に身を投げかけるように、そして再び立つときに、彼等を自分と一緒にその神聖が引き上げ下さるようにといふのでムいました。

十九　基督の權化について

けれども私は以上とは違がつた考へを以て、わが主イエス・キリストを單に何人も比較し得られない程に卓越した智慧をもつ人であると考へました。殊に我々に對する神慮により、それにかなつて不思議にも處女から生れ給ふたことは、不死の生命を得んとするには如何に浮世のものを輕蔑しなければならないかといふ一例を示し給ふて、イエスは大なる權威を受け給ふたやうに見えました。けれども「言肉體となれり」といふ聖句のうちに、如何なる奥義を含んでゐたかは私の夢知らなかつたところでムいました。たゞ私は彼の言のうちに述べてあるところによつて、イエスが食ひ、飲み、睡り、歩み、歡び、苦しみ、そして道を說き給ふたこと、肉だけが貴下の「言葉」にまつはりついたのではなく、魂も心も共に「言葉」にまつはりついたことを知つたゞけでした。是は貴下のみ「言葉」の變らないことを知つてゐる者は皆知つてゐるところで、私も此時私の及ぶ限り之を知つてゐ

まして、少しもそれについて疑ふところがなかつたのでムいます。といふのは或る場合には意志によつて身體の四肢を動かし、また或る場合には動かさず、更に或る場合には或る感情によつて動かされ、又時としては動かされず、なほまた時には人間の合圖（言葉の）を使つて賢いことを言ひ、時には沈默するなど、總じてこんなことは變化する魂と心との附屬物でムいます。また若しイエスについて記るされてある是等のことが、皆僞りであるとすれば、總てのことは皆僞りといふことになりませう。また是等の書のうちには救ひといふものに對して、如何なる信仰も殘らなくなるでせう。けれども其處に書いてあることが眞實であるから、わたくしはキリストに於て、完全な人、卽ち啻に人の肉體ばかりではなく、或はまた叡智をもたない感覺的な魂ばかりでもなく、また眞の人間であることを認めました。此人を私は啻に眞理が有形となつたものとしてのみならず、また人間の性質の或る大きな秀逸、智慧の最も完全な分有者として、他にまされるものと判斷致しました。けれどもアリピウスは思ひました——キリスト教徒は、神が肉を着給ふたのであるから、キ

リストに於ては神と肉とのほかに、魂はないと信じてゐる、また人間の心が神のものであることを考へなかつた――と。そして彼は、キリストの行爲について書かれてゐる傳說は生命があり、叡智をそなへたものでなければ、することの出來ないものであることをよく了解してゐましたから、彼はます〳〵徐々とキリスト教の信仰の方へ進み行きました。けれども後になつて、是はアポルリナリウス派の異端の誤謬であつたことをさとりましたので、彼は喜んで公教會の信仰と歡迎し、それに加はりました。けれども私は告白しますが、私が「言肉體となり」といふ言葉を解釋することに於て、公教會の信仰の眞理とフォティヌスの虛妄との相違のあることを認めたのは、稍々しばらくしてからでした。異端を排斥することは、貴下の教會の綱要と、健全な眞理をます〳〵顯著ならしめるものです。何となれば、承認された眞理を弱い者共の間に明かならしめる爲めには、矢張りそこに異端者がなければなりませんのですから。

二十　プラトーンの書

けれども當時、プラトーン派の人達のさうした書を讀みまして、後それから無形の眞理を探ぐることを敎はり、私は見ることを得ない貴下を、造られたものによつてさとることが出來るのを知りました。けれども一旦は突き戻されながらも、私は自分の心の暗いがために、瞑想することができないでゐたものを識り、貴下の在し給ふこと、貴下の無限にましまして、しかも有限または無限の空間に擴がつてゐらつしやらぬこと、貴下は眞にゐまし給ふて、永久に變ることがなく、その部分にも、またその運動にも些かも變化がないこと、また他の總てのものは彼等が存在するといふ、此最も確實な證據によつてだけ、貴下から出たことを確に認めました。私は實際かう信じたのですが、けれども貴下を享けて樂しむには餘りに弱かつたのでした。私はまるで何でもよく知つてゐる者のやうにお喋りを致しました。けれども若し私が我等の救主にましますキリストに於て、貴下の道を求めなか

つたならば、私は遂に之を知ることなくして死んでしまひましたらう。何ぜかなれば、私はもう既に、私自らの刑罰を充分に負はされて、人に賢く見えるようにと窃かに念じ始め哭き悲しみするどころではなく、却つて、傲慢に、自分の智慧にふくれ返つてゐたからでムいます。謙虚の基石たるイエス・キリストの上に建てられたその慈悲はそも〳〵何處にありましたか。また何時是等の書は私にこのことを教へましたらうか。けれども私は下のやうなことを信じます——私が貴下の聖書を研究する前に、まづ躓き仆るべきこと、どれだけ此聖書が私を感化したかを、私は自分の記憶にとゞめること、更にまた後になつて私はその聖書によつて教へ易くなされ、貴下御自身の指が私の癒やしを企て、私の傷を治療した時、私が、僭越と懺悔との差異、別言すれば、その行くべき處を知りながら、如何にして行くべきかを知らない者と、たゞ祝福された國を知らせるばかりでなく、其處までつれて行つて休息させる道との差別を知るようにとの御配慮があつたことなどでムいました。その理由を申せば、私が若し最初に貴下の聖書に模型(モデル)せられて、逆にそれに親炙し、

貴下が私にとつて親愛なものとなり給ひ、さうして後にプラトーン派の諸書を讀みましたならば、恐らく是等の書籍は、堅い信仰の基石の上から、私を曳きずり卸してしまひましたでせうから。或は私が若し其處に味はうてゐたところの健全な氣分に確實に立つてゐましたなら、私は恐らく、自分は只これらの書籍を學んだから、之を得たのであると思つたでせう。

二十一　聖ポーロの書翰

それだものですから、私は最も熱心に貴下の靈の尊い書、就中使徒ポーロの書にとらはれました。さうしますと、私が曩に認めたポーロの矛盾、即ち彼が議論の本文は、律法(おきて)と豫言者達の證言とはよく一致しないところが時にあると思はれた難點も自ら消失して、此貞潔な雄辯(神の道をとくこと、前に「神のことを言はぬ雄辯は啞である」といふ言葉があつた。此處はその反對)を語る顏は只一つであることを知り、私は喜び戰いて之を學びました。そこで私は始めました。そして私が前にその別

な本で讀んでゐた眞理は何に限らず、貴下の御恩を褒めたゝへつゝ此處にあることを發見致しました。また見るものは誰であらうとも、啻に彼が見ることのみならず、また見るべき力を受けなかつたかの如くに、(即ち自分獨りでつたとのやうに)誇らないようにといふのでした。何ぜかなれば、私が有つてゐるものに、何に一つ貴下にいたゞかないでゐるものがムいませうか。また更にそれは、永久に在して變り給はぬ貴下を見るように、彼に勸めるばかりでなく、癒やされて、貴下をとらへるようにするためでムいました。また遙か遠くを見ることの出來ない者が、それを通つて貴下に行き着き、貴下を見、貴下をとらへる道を歩るくようにといふのでした。人は衷なる人に從へば、神のみ敎へを悅びは致しますが、その身體に於ては、その心の法則と鬪ひ、私を身體のうちにある罪の法則の下に、捕虜となさせる他の法則に對して、どう致すのでせうか。と申すのは、主よ、貴下は正義に在すのに、私は罪を犯し、不義を行ひ、不敬虔の行ひをしたからでムいます。そして貴下の手は我々の上に重く乘しかゝり、私共は當然「死の長」(ヘブル書第二章第十四節)である古い罪人に付されました。彼は私共の意志を說服して、之を自分の意志と同じからしめたからです。その意志により人は貴下の眞理にゐないのでムいます。あはれな人は何を爲しませうか。此死の體から、彼を救ひ出してくれる者は誰でせうか。たゞ我々の主イエス・キリストによれる貴下の恩寵ではありませんか。貴下はキリストを貴下とともに永遠のものとして生み給ふて、貴下の道の初めと爲し給ひました。然るに此現世の君主はキリストに於て何にも死に相當する罪過を見出しもしないのに、彼を殺してしまひました。それで我々に反對する書類は塗り消されましたらうか。私が前に讀んだ本には此事は入つてをりません。こんな本には斯うした敬虔の情、懺悔の涙、貴下の犧牲、惱める靈、碎けて悔いる心、民の救ひ、新婦である都、聖靈の證據金、私共の贖ひの盃が入つてをりません。其處では誰も「私の救ひは神から流れ出でるのだから、私の魂は神に歸服しないだらうか。神こそは私の救ひ、私の守護者にましますのだから、私はもはや動かされはしない」(詩篇第六十二の一、二)と歌ひません。また何人も此處に「凡て勞する者はわれに來れ」(馬太傳第九章第三十八節)と彼の叫び給ふのを聞きま

せん。彼等はキリストが柔和であつて、謙遜にましまし給ふので、それに學ぶことを嫌ひます。それは貴下が「是等のことを智き者、慧き者に隠して、嬰兒に顯はし給ふ」（馬太傳第十一章二十五節）からでムいます。そして嶮峻な嶺から平安の故郷を見て、その處に通ずる道を見出さずに（申命記第三十二章四十八―五十二節）空しく過ぎ難い道をとほらうとして、獅子とよぶ龍を君主とする逃亡者（詩篇第九十一の十三）また脱走者達に沮止せられ、待伏せを喰はされることと、天より來る主の軍勢にまもられて、その平安に通ずる道を行くことは、全然ちがつたことだからでムいます。此處では天の軍隊を脱走したものをも掠奪をしません、といふのは、彼等はこれを刑罰として避けたからです。私が貴下の使徒達のうちで、一番小さな者（コリント前書第十五章第九節）を讀みましたとき、是等のことは不思議にも私の腸にしみわたり、私は貴下のみ業もをおひ、ひじやうに震へてしまひました。

第八篇

一　老儒シムプリキアヌス

私の神よ、私は感謝の念をもつて、貴下の私に對して下し給ふた御慈悲を想ひ出して、今之を貴下に申上げます。わたくしの骨を貴下の愛にひたして、「主よ誰かなんぢに比ぶべきものあらんや。なんぢ我が縲絏を解きたまへり、われ感謝を供物としてなんぢに献げん」（詩篇第卅五の十節）と、私に言はして下さい。貴下がどうして之をとき給ふたか、私はそれを此處に述べませう。而して貴下をあがめるものが皆之を聞くとき「崇きかな天地の主、その名は大にして奇しきかな」（詩篇第七十六の一節）と言ひませう。貴下のみ言は堅く私の心に粘りつき、私は到る處に貴下にかこまれてをります。たとへ比喩として見、また鏡を見るやうに不確實ではあつたとは言へ、今わたくしは貴下の永遠の生命を確信致しました。けれども私は

一切の實體の源泉にまします一つの朽ちない實體のあることを疑ふのを全然よして、なほその上、あなたについての確證を要求しないで、却つて益々堅く貴下に結び付かうと願ひました。けれども私が此世の生涯に就いては、一切のものがあやふやで、また私の心は古いパン種を取り除かねばならなかつたのでした。（コリント前書第五章第七節）「道」にまします救主は私を悅ばし給ひましたけれども、それでも私は矢張りその狹い道を行くことを躊躇致しました。あなたは私がシムプリキアヌスのところへ行く心を私に起させたまひました。（シムプリキアヌスは神學者で著者に大影響を與ふ）それが私の眼には善い事に見えました。彼は貴下の良い下僕でムいまして、貴下の恩寵はその上に輝いてゐるやうに私には見えました。私はまた彼がその若い時分から、敬虔な生活を送つたことをも聞いてゐました。今彼は年をとつてをりました。且つ非常に熱心に貴下の道を修めて、永い年月を過ごして來ましたので、彼は確に多くの尊い經驗を有つてゐるやうに私には見えました。また實際のところ彼はさうした經驗をもつてゐたのです。そこで私は自分の煩悶を彼の前にならべまして、彼が自分の經驗によつて

私のやうな惱める者の貴下の御道をとほらして頂く一番善い方は、どつちであるかを、私に敎へて呉れと願ひました。

私がこんなことをしたわけは、よしや敎會に人はいつぱいになつてゐても、或る者は右し、或る者は左して、その歸趨が明瞭に分らなかつたからでムいます。然しさうだからと言つて、今更再び世の常道に從つて行くことは私が好まぬところでムいました。また私の願望も最早昔のやうに、榮譽、または富貴の希望を私の心に燃やさず、そのやうに重い鎖に繫がれるのは、私にとつて甚しい重荷でムいました。その故は、私が愛してゐた貴下のお家の美しいのに比らべては、こんなものは、最早私を悅ばすに足りなくなつてゐたからでムいます。けれどもなほ私は堅く女にとらはれてをりました。また使徒は是よりも優つたものを私に擇らべと勸めは致しましたけれど、結婚することを私に禁じは致しませんなんだ。（コリント前書第七章第廿七節）けれども私は弱いので、寬廣な處をえらびました。そして私はたゞ此事のために悶々輾轉して、心配に窶れました。そのわけは他の樣々な事で、私の意志に

反して、私自らを結婚生活に一致せしめるように拘束せられ、私はそれに沒頭して、奴隷にせられてしまひましたからでムいます。私は眞理の口から「天國の爲めに自らなりし閹人（睾丸を拔いた人　此處では禁慾者）あり」と聞きました。けれどもまた、眞理は「これを受け容れ得るものは受け入るべし」（マタイ傳第九章第十二節）と申されました。本當に、神について知るところなく、また眼に見える善いものから、善い神を見出し得ない人は愚かでムいます。けれども私は最早愚かなものゝうちにをりません。それを超越してをりました。貴下の創造せられたもの全部の證言により、私は我々の造り主に在す貴下と、貴下の「言」、貴下と共にます神、貴下および聖靈と共に一つに在す神、貴下が用ひて萬物を造り給ふたものを私は發見致しました。けれどもなほ他に一種の不信者がムいます。「彼等は神を知つてゐながらもなほこれを神として崇めないで、感謝しないのです」（ローマ書、第一章第廿一節）私は此のうちにも陷つてしまひましたが、「貴下の右のみ手は私を支へて、私を其處から引き出し」（詩篇第十八章第廿五節）私を癒やさるべき處に置き給ひました。蓋し貴下は「視よ、主を畏るゝはこれ智慧なり」（ヨブ書第

廿八章第二十八節）また「自ら見て賢しとするなかれ」そは「自ら賢しと稱へて愚かとなるべければなり」（箴言第三章第七節羅馬書第一章第廿二節）と人に仰せられたからでムいます。けれども私は既に「良い眞珠を見出してゐましたから、私の有てゐるものを悉く賣りて、此を買ふべき筈でありましたのに」（馬太傳第八章四十六節）私は躊躇致しました。

二　井クトリヌスの回心

そこで私は、貴下の恩寵を受けることに於ては、アムブロシウス（今の司教）の父であつて、その人をアムブロシウスが父として本當に愛した。シムプリキアヌスを訪問致しました。私は彼に自分が迷ふてゐることを述べました、けれども私がプラトーン派の者共の或る書（これは一時ローマの修辭學教授であつたギクトリヌスのラチン語に譯したもので、彼は後クリスチヤンとなつて死んだと聞きました）を讀んだことを申しましたときに、彼は私が他の哲學者達の著書を讀まなかつたのは大によろしいと言つて悅び、さうした著書

は「この世の小學に從ひ」（コリント前書第二章第八節）惑ひと虛妄に充滿してゐるけれども、プラトーン派は總ての方法によつて、神とその「言」との信仰に人を導くものであると申しました。そこで「智き者に隱くされて、嬰兒に顯さるゝキリストの謙虛」（マタイ傳第十一章第廿五節）を私にすゝめようと思つて、彼は、自分が羅馬にゐた時分に最も親密に交際してゐた處のギクトリヌスのことを私に話しました。私は彼の言つたことを此處に繰り返さないではをられません。其譯は、あらゆる高等の學藝に通じ、哲學者達の書いた斯類の本を澤山讀んで批判をした此博學な老人、多くの貴い元老院議官の師であり、また此世の人々が見てもつて非凡となすところの顯著な治績の表彰である羅馬のフォルム（廣場）に立像に相當し、又立像するとも出來た彼、此齡に至る迄偶像禮拜者であつて、又其不敬虔な儀式に參與した彼――（當時羅馬の傲慢な貴族達は殆んど總て此儀式に加はり、又羅馬人に熱烈な愛を起さしたところの

「吼える神たるアヌビスと總てのあらゆる種類の怪物たる神々――それはネプチュ

ーンやヴェナスと鬪つた――及びヴェナス」

やを、崇拜して（――此神々は嘗つては羅馬が征服したものでムいました。）老ひたるギクトリヌスは、雷の如く轟く聲で、多年の間、その敎への有力な辯士でムいました――この彼がどうして貴下のキリストの幼兒となり、貴下の洗禮盤の嬰兒となることを恥ぢとせず、その頸（うなじ）を謙虛の軛にかゞめて、その額を十字架のそしりに垂れるやうになつたかを考へてみますことは、大に貴下に感謝すべき、貴下の恩寵の大きな讃美となるのでムいますから。

主よ、天を垂れて降り、み手を山につけて煙をたゝしめ給へる主よ（詩篇第百四十四の五）貴下のどんな方法でもつて貴下自らをその胸に傳へ給ひましたか。シムプリキアヌスの言つたやうに、彼は聖書を讀み、最も熱心にキリスト敎のあらゆる書籍を探り究め、そして明はにではなかつたですか、窃かに親しくシムプリキアヌスを訪ふて申しました。「私はもうキリスト敎徒であることを知りました」と。之に對してシムプリキアヌスは答へました「私はさうとは思ひません。まだ貴下をキリストの敎會のうちに見ないうちは、貴下をキリスト

教徒のうちには數へません」と。彼は笑つて云ひました「では壁がキリスト教徒をつくるのですか」と。斯うして彼は既にキリスト教徒であつたことを屢々語り、その度毎にシムブリキアヌスは同じ答へをなし、そして「壁」の諸譴はまた屢々繰り返されました。彼がそんなことを言つて煮え切らなかつたわけは、その友人等の傲慢な鬼神禮拜者達を怒らすことを氣遣つたからでムいます。「主の未だ挫き給はなかつたレバノンの香柏よりの如く」（詩篇第廿九章の第五節）そのバビロン式（滅亡に導くの意味）の威嚴の絶頂から、大きな怨恨の重壓が自分の上に墜ちてくるだらうと思つてゐたのでムいます。けれども彼は讀んで驚き、確信を獲、かくて「彼がもし今キリストを人の前に言ひあらはすことを耻ぢんか、聖き使たちの前に否まれんことを恐れ」（ルカ傳第九章第廿六節）また貴下の「言」の謙虚の奥義を恥ぢて、是等の傲慢な鬼神どもの不敬虔な儀式を恥ちずに、その傲慢に傚らつて、これを受け入れることを恥ぢなかつたのは重い咎を受くべきものであると彼に見えたので、彼は虚妄に對しては厚ケ間敷なり、眞理に對しては顔を赧めるものとなりました、そして彼自身が申しましたやうに、

意外にも突然シムブリキアヌスに向つて「私共は教會に參りませう。私はキリスト教徒にならうと思ひます」と、申しました。そして彼は自分の歡びを包みきれぬさまでシムブリキアヌスと一緒に教會へ行きました。けれども彼は入門の式（額に十字架の記號を指で描き、手を頭に置き、鹽を授ける式）を受けた後、間もなく名を記して、洗禮によりて新たに生まれ、羅馬は愕き、教會は歡びました。傲ぶる者どもは之を見て憤慨し、齒がみして消え失せました。けれども主なる神は貴下の下僕の希望でムいました、そして虚妄と僞の狂亂とを顧み給はなかつたのでムいます。

遂に、彼が信仰を告白すべき時が到來致しました。此告白は、貴下の恩寵に近寄らうとする人々が、高い處にのぼり、位者の眼の前で或る言葉を暗記して置いて述べるのが例となつてゐました。彼の話によりますと、長老たちはキクトリヌスにむかひ、その告白を窃かにしてもよいと申し傳へました。是れは羞かしがり、逡巡するだらうと思はれる者に許されてゐた慣例でムいました。けれども彼は寧ろ總て聖い會衆の前に於て自分が救はれた

ことを告白しようと致しました。そのわけは、彼は救ひでもない修辭學すらもなほ公然宣べ傳へたからでムいました。自分の言葉を述ぶるときですら、狂ふてゐる群衆を物の數ともしなかつた彼が、どうして貴下の「言」を宣べるときに、貴下の柔和なる信者の群を懼れませうか。ですから彼が壇に登つたとき、彼を知れる限りの者は、何づれも歡呼して、彼の名をたゝへたのでムいました。まことに誰か彼を知らなかつたものがムいましたらう。悅びあつてゐる群集の皆の口を通して、ギクトリヌスだ、ギクトリヌスだといふ低い囁きがかはされました。彼等が彼を見た時突然歡喜の叫びをあげたやうに、彼等が彼の言ふところを聽かうとしたとき、彼等は俄にパッタリと靜まつたのです。彼はまつたく泰然自若として、此眞實の信仰を宣べ、人はみな、彼を自分の心の中に引き入れようと望みました。左樣、愛と悅びとをもつて彼を引き入れました。愛と悅びとは卽ち彼を引き入れようとして彼等の手となつたのです。

三　罪增せば恩も增す

善き神よ、絕望の狀態にゐるものなどの魂が救はれるのを見て、人が歡ぶことは、常に人により望みをかけられ、そして餘り危險な目にもあはなかつた魂が救はれたよりも、遙にまさつてゐるのは、一體どういふわけでムいませうか。それは斯うして、慈悲ふかくおわします父よ、貴下も亦悔い改める一人の罪人のため、改悔の要のない九十九人の正しい者にもまして悅び給ふが故でムいます（ルカ傳第十五章第七節）また迷つた羊が牧羊者の肩に乘せられて、伴れ歸られ、皆の者に大に歡ばれ、また一枚の銀貨が貴下の金庫に囘收せられて、これを見出だした女と共に隣人たちの悅ぶのを聞く度毎に（ルカ傳第十五章第七節）私は大きな悅びを以て之を聽きます。また貴下のお家に於て、貴下の御子息のことが讀まれ、あの方が一度はお死になさつて、お生きになり、死んでしまつてから、また歸つておいでになつたことを讀むときには、貴下のお家の嚴肅な饗宴の悅びは、涙ぐましいまで感激すべきものでム

います。何ぜかなれば貴下は、その神聖な御慈悲によつて聖められた天の使ひや、わたくしどもを歡び給ふからでムいます。何ぜかなれば貴下は永久に變り給はないからでムいます。何ぜかなれば、貴下は、常に同じではないところの萬物を、永久に同じ方法で知ろしめすからでムいます。

それでは何ぜ魂は、その常に愛してゐるものを、前から持つてゐたよりも、それを發見し、又は回復することを餘計に喜ぶのでムいませうか。左樣、他のものも之を證明し、また總てのものも「その通り〳〵」と叫んでゐる證據に充ち滿ちてゐるのはどうしたものでムいませう。勝利を得た皇帝は凱旋致します、けれども若し戰はなかつたならば、克つことは出來なかつたでムいませう。また戰ひに危險が多ければ多いだけ、いよ〳〵凱旋の歡喜も大きいわけでムいます。嵐は水夫共を吹きなやまし、破船の厄をもつて脅かし、人は皆死の近寄つたのに色を失ひますけれど、空と海とが靜かになれば、その歡喜は、その恐怖の大きかつたに比較して、いよ〳〵大きいと同じでムいます。また親しい者が病氣にか

かつて、その脈をみれば最早危篤に瀕して、彼の回復を願つてゐるものは、誰も彼も心を傷めてをりますとき、それが直ると致しませう、そして未だ以前ほどの勢はないけれど、床を出て歩むやうになれば、以前に健康であつた折りに、力強く歩るいた時にはなかつた程の大きな歡喜がムいます。左樣、人は只突然、また私共の意志とは反對に私共の上に墜ちかゝつてくるものばかりではなく、計畫して、たづね求めするところの人生の歡樂すらも、苦痛を通して始めて獲られるます。すなはち、先づ飢ゑ渴く苦痛がさきにたゝなければ、食つたり、飲んだりしても一向面白くはムいますまい。また酒に醉ふものは、口のなかに渴きをおぼえるその熱を得る目的で、鹽の辛いものを喰べます。また許婚の婦人を、すぐにその情人にわたしてしまはないならはしになつてゐるのは、彼は良人として、永い永い猶豫にまちわびて、嘆息を漏すことがなく嫁を取り、その爲めに彼女を輕ろんずるやうなことのないようにといふ用意でムいます。

汚れた、そして呪ふべき快樂に於ても此通りでムいます。正しいとせられてゐる喜悅に

於ても同様でムいます。最も眞摯であつて、至誠な友情に於てもさうてムいます。更にまた一たび死んでまた生き、失くなつてからまた獲られたものもそのとほりでムいます。大きなよろこびは、いかなるところに於ても大きな苦痛によつて先立たれます。主にまします我が神よ、之は何うしたことでムいますか。貴下は貴下御自身に對して永久の歡喜にましまし給ひ、また貴下の周圍のものは永久に貴下に於て悅んでをるのではありませんか。また物の部分ごとに、進歩があつたり、退歩があつたり、反撥が起きたり、應答があつたりして、千變萬化するのは何の意味でムいますか。それは物の習らはしでムいませうか。それともまた最も高い天から、最も低い地に至り、世の初めから其終りに至り、天使から蟲に至り、最初の運動から最後の運動に至るまで、その種に從ひて、善き萬物と、貴下の正しき凡ての聖業(みわざ)とをその各の處に置き、またおの〳〵その期に應ぜしめ給ふた時、貴下がそんなものに與へ給ふたものは盡きてしまつたのでムいませうか。噫々！　貴下はその高さに於てどれ程高くましますでムいませう。またその深さに於てどれ程深くわたらせ給

ふでムいませう。しかも貴下は如何なる處に於ても身を退き給ふことはムいません、そして私は滅多に還りは致しません。

四　大人物囘心の價値

主よ、さあどうぞおやり下さい、我々を搖り起して、呼び返して下さい。我々を燃やして、貴下に引き寄せていたゞきませう、我々に香ぐはしく、また甘くなつてください。我々に愛しさせて下さい、我々に驅けさせて下さい。ギクトリヌスが入つてゐたよりもずつと深い盲目の地獄を出て、多くの人々は貴下に還り、貴下から受けるところの光りに照らされるのではムいませんか。その光りを受ける者は貴下の子となる權(ヨハネ傳第一章十二節)を受けるのではこいませんか。けれども彼等が若し世間に知られることが少なければ、眞に彼を知つてゐる人達でも、彼等の爲めに喜ぶことは少ないのでムいます。けれども多くの者が一緒になつて歡ぶときには、各自の歡びはいよ〳〵豐富になるのでムいます。そのわけは

彼等が互に熱し合ひ、燃やし合ふからでムいます。更にまた多くの人々に知られるが故に權威をもつて多くの人を救ひの道に入れ、また自ら先頭に立つて多く人々を伴れて行きます。さうするとその先に立つて行く自身も、多くの附隨者のために悅ばされるのです。といふのは彼等は私自分だけで歡ぶのではなく、他の附隨者達と共に悅ぶからです。それは貴下の幕屋のうちでは富めるものが貧しいものに先だつて、貴い者は賤しいものに先だつて受け入れられることは斷じてないからでムいます。寧ろ「貴下は、强き者を辱しめんとて、世の弱き者を選び、有る者を亡ぼさんとて、此世の賤しきもの、輕んぜらるゝもの、卽ち無きが如きものを選び給ふ」（コリント前書第廿七章廿八）たからでムいます。それでこそ「貴下の使徒のうちいと小さき者」（ポーロ自身の言葉）——貴下がその舌によつて、以上のやうな最も健全な言葉を出さしめ給ふた——ですらも、總督ポーロが、此戰ひによつて、すつかりその誇りを打碎かれて、キリストの軛を負はされて、大なる王（神の意味）の臣民となつたとき、其大きな勝利の證據として、その在來の名サウロをポーロと呼びかへられることを喜びました。そ

のわけは敵は自分が强く捕らへてゐたもの、また自分がそれを手先につかつた更に多くの者を捕らへたものゝ手で却つて打ち敗られることが多いからでムいます。けれども敵は傲ぶる者をその尊貴によつて、愈々つよくとらへ、またこの傲ぶるものゝ權威を借りてさらに多くのものを捕らへます。ですから惡魔が難攻不落の城砦として保つて來たギクトリヌスの心と、また多くの人々を殺すところのその大きな、精鋭の武器であつたギクトリヌスの舌とがどれ程、より以上に悅ばれ、尊ばれたでせう。從つて貴下の子供である信者にもまたそれだけ悅びが一層大きい道理です。その理由は、我々の王は「强い者を縛り上げて」、王から奪はれてゐたその「器は潔められて、貴下のみ榮へにふさわしからしめられ、且つあらゆる善事に於て、主の御用に立つようにせられた」からでムいます。（馬太傳第十二章第二十九節馬可傳第十一章第二十二、五節）

五　歸正の障害

けれども貴下のシムプリキアヌスがギクトリヌスのことを私に語つてきかした時、私は火の如く熱心に燃えて、直に之に倣はうと致しました。私はシムプリキアヌスが之を話した意中も、畢竟此目的の爲めであると思つたのです。けれども彼は、ユリアヌス皇帝の時代に、キリスト教徒の高等學藝および辯論の術を敎へることを禁じられてゐたこと、彼が此法律に服從してゐたこと、そして貴下が赤兒の舌をも雄辯にならしめ給ふところの貴下の「言」を棄てるよりは、寧ろ彼の雄辯學校を棄てたがましであると思つたことなどを附言しましたとき、私は斯う思ひました——彼はたゞ主のみに仕へる機會を得てゐるから、幸福であると同時に斷乎として立つてゐるのであると。斯うした信仰こそは私が欲しがつて嘆息してゐたものでしたが、他人から施された鐵鎖でなくて、自分の意志てふ鐵鎖に私はすつかり縛られて、どうにも仕方がなかつたのでムいます。卽ち邪しまなる意志は肉慾となり、肉慾の下に隷屬するとは驕て習慣となり、習慣がもし反抗を受けないならば、それは驕て性質となつてしまふのでムいます。此連環によつてつながれて（ですから私はそ

れを鎖と呼びます）私は動きがとれなかつたのでムいます。けれども唯一の確かな喜びの神よ、心のまゝに貴下を拜み、また貴下を樂しまうとおもふ新たな意慾は、年を閱みして强固となつてゐる私の從前からの舊意志に、未だ打ち勝つことは出來なかつたのでムいます。ですから一つは舊く、一つは新らしく、一つは肉であつて、他は靈であるところの私の二つの意志が、私の衷に鬪ひ、そしてその爭鬪によつて私の魂を荒廢に歸せしめてしまひました。

そこでわたくしは、わたくしが嘗て讀んだ、肉の望むところは、如何に靈が逆らひ、靈の望むところは肉が逆らうかといふことを、實際の經驗によつてよく悟り得ました。本當に私はその何れをも要求してゐました。けれども矢張り自分の心のうちで貶してゐるものよりは、心のうちで嘉賞してゐるものを求めました。といふのは私は最早前者のうちにはゐなかつたのでムいますから。私は自分からすきで事を行つたよりも、寧ろ大部分は心ならずして（惡事）行はされたのでムいました。けれども私は自分の欲しないところに、進んで

來ましたのでしたから、習慣によつて此爭鬪力が私に保證されるやうになつたのは、私自らによつたのでムいます。ですからたとへ正しい刑罰が罪人に臨み來つたところで、誰か克くそれに抗辯することができませう。私もまた、いつもやつてゐた下の如き辯解の辭を最早有たなかつたのでムいます――「眞理は確實に知ることが出來ないのだ、それだから私は世を輕蔑してもなほ神に仕へることをしないのだ」と。然るに今や眞理は確實に分ることになりました。けれども私はなほ地につながれて、貴下のみ手につく兵卒たることを拒みました。そして貴下に進み行くにあらゆる障害が加はゝることを恐るべき筈なのに、却つてそれ程にその障害の加はらないことを恐れました。

斯うして私はまるで睡つてゐる人が氣持よく荷を背負されてゐるやうに、此世の荷物をつけられたのでムいます。そして私が貴下について瞑想してゐた考へは、恰も醒めよう醒めようとしながら、また一層深い睡りに負けて、昏々と睡りに落ちるやうでムいました。然し永久に睡りたいと願ふ者がないのですし、また總ての人々の眞面目な判斷によるも、

醒めてゐる方がいゝのでムいます。けれども人は多く、その手足がだるくて仕方がないときには、その眠氣を追ひ拂ふことを躊躇致します。そして半ば不愉快ではありながら、起きなければならない時間が過ぎてもなほ隋眠を貪るのでムいます。それと矢張り同樣に、私は自分の慾にとらはれてゐるよりも、貴下の御慈悲に身をまかすはうが、私のためにはるかに善いと確信してはゐましたけれど、自分の慾は私を樂しませて、打ち負かし、貴下の御慈悲は私を悅ばして、私を束縛致しました。けれども又「眠れる者よ、起きよ、死人のなかより立ちあがれ、然らばキリスト汝を照らし給はん」（エペソ書第五章第十四節）と、私に仰せられました貴下に對しては、私はついに何にも御答へするところがなかつたのです。また仰言つたことの眞實であることを到る處に示し給ふた貴下に向つて、私は眞理と知りながらもたゞ「やがては」「見よ、やがては」「只今」「少し待つて」といふ鈍ろくさい、睡氣にみちた言葉のほかには何の答も致さなかつたのでムいます。けれども「只今、只今」は只今ではなかつたのです。またわたくしの「少し待つて」は隨分久しいあひだでムいました。

私のからだのうちには、他の法則があつて、私の精神上の法則と戰ひ、私のからだのうちにある罪の法則の奴隷と致しましたから。私は只徒らに、内部の人（心）でだけ神の律法を悦んでゐたのでムいます。何ぜかなれば、罪の律法は習慣の暴力となつてゐますから、實際のところ、そのため心は不本意ながらその方へ引き寄せられて、捉へられるのでムいますから。斯う好んで自らその中に陷入つて行きまするので、此樣に捉へられしまふのは尤も千萬のことでムいます。あゝわれ惱める人なる哉。此死の五體から私を救ひ出して下さるは誰某（どなた）でムいませうか、私共の主イエス・キリストを通しての貴下の御恩寵を外にしては。

六　ポンティチアヌスの事

おゝ主よ、私のあがなひ主よ、私を最も緊密に縛りからげてゐた肉慾の絆（きづな）浮世の務の繫縛から、貴下はどういふふうにして私を救ひ出し給ふたかを述べて、貴下の

み名にむかつて感謝を捧げませう。私の習慣となつた心の不安定は、愈々烈しく私を襲ふて來ましたので、私は日毎に貴下向つて溜息を吐いてをりました。私を共重荷で呻かせるところの俗務が許すときには、私は貴下の教會へ屢々出席致しました。アリピウスも私と一緒でムいました。彼は既に三度、顧問の任務を終つて、その法律の務を罷めて、丁度私が雄辯術を他人に賣つてゐたやうに、若し教へて出來ることなら、法律上のいろ〳〵な助言を誰かに賣らうとして待つてゐるのでムいました。そのときネブリディウスは私共と親交のあるところから、ミラノの市民で、且つ文法家であり、私共一同と親しい仲であるヴエレクンヅスの下にあつて教授することを承諾致しました。ヴエレクンヅスは、自分が信實な援助を受ける必要があつたので、誰かさうした者を、友誼上、私共のうちから、是非一人來て欲しいと願つたのでムいました。ですからネブリディウスが之を承引したのは決して榮達名譽の爲めではムいませんのです。彼がもしそのやうなものを望むならば、彼は自分の學問によつて、更に一層大きな榮達の路に上り得られたのでムいます。けれども彼

は友人としては、最も義侠心に富み、また心の柔しい人でありましたから、義理によつてその職を引受け、私共の頼みを斥けなかつたのでムいます。ですから彼が一度その職に就くや、非常に慎重にその任務に盡くし、浮世の所謂るエライ人達に知られることをさけ、斯うして心の混亂されることを防ぎ、自由に仕事をし、また悠々として、出來るだけ多く時間を討究、讀書、或は智慧に關する事の聽講に使はうと致しました。

そこで、或る日のこと、何故であつたか私はもう記憶してはをりませんが、ネブリディウスが留守であつたとき、アフリカから來た私と同じタガステの人、ポンティチアヌスといふものが、私とアリピウスに面會に、私の家へやつて參りました。此人は羅馬皇帝の朝廷で、顯要な位置を占めてをりました。彼は何をもとめるために私共のところへ來たか、私は知らなかつたのですが、兎に角に彼を通して、會見致しました。するとその者はフト私共の前にある遊戯盤の上に一冊の本がのつてゐるのに氣がついて、それを手に取りあけて、開けてみたのでしたが、それは彼の豫想を全然裏切つて、使徒ポーロの書翰であるこ

とを氣付きました。勿論彼は、私が敎へることがいやになつてゐた雄辯學の本であらうと想つてゐたのでした。彼は微笑を浮べて私を見上げて、申しました、自分は意外にも此書を見、しかしそれが私（オウガスチン）の前にあるのを見て、嬉れしくも思へば、また不思議にもおもふと。その理由は彼はキリスト敎徒でムいました、そして彼は信者として、屢々敎會に行き、瀕りに、いつも我々の神にまします貴下のみ前に跪いて、祈禱を捧げたからでムいます。そのとき私は、自分が此書を讀んで苦しんでゐることを話しますと、そこに彼が話者（はなして）となつて、エヂプトの修道士アントニウスのことが話頭に上りました。此修道士の名は當時は未だ私共には知られてゐなかつたのですが、貴下の下僕たちの間には非常に高名でムいました。然るにポンティチアヌスは私共がアントニウスのことを知つてゐないのを見て、是程著名な人物を私共の知らないのを訝かり、なほその人の話を詳しく致しました。で私共は、それほど近い時に、しかも私共と殆んど時代を同じくして、正しい信仰をもつて、公敎會のうちに、このやうな不思議なことが證せられた話を聞いて、すつ

かり驚かされてしまひました。双方ともまつたく驚いたのでムいます。即ち私共は奇蹟がいかにも大きいので驚き、話した方では私共が是程有名な話を知らなかつたことを驚いたのでムいました。

アントニウスの話から、彼は修道士達の仲間のことや、貴下にとつて美い香りである彼等の習慣や、また荒野の中でも信仰の花咲き果のなる沙漠のことなど、私共が少しも知らなかつたことなどに移りました。またミラノに於ても、市の城壁の外に、一つの修道院がありまして、それをアムブロシウスがもりたて、善い兄弟達が一ぱいに充ちてゐたのでムいましたが、それもまた私共は知らなかつたのでムいます。ポンティチアヌスは斯う語り續け、私共は默つて熱心に聽いてをりました。

さて彼は私共に語つて申しますには、或る日の午後、皇帝が演技場の競技を見る爲めにテイエル（ロマ西方の古都）で、外出されたとき、三人の從者とともに、市の城壁近くにある庭園のうちを散歩してゐましたが、そのうちフト彼等は二人宛別々になつたのです。即ち一人

の從者は皇帝について行き、他の二人は又一緒になつて別に逍遙してゐました。そして彼等が逍遙してゐるうちに「心の貧しく、天國を自分のものにしてゐる」（マタイ傳第五章第三節）貴下の下僕たちの幾人かゞ住つてゐる或る小屋へ參りましたとき、其處にアントニウスの生涯を記るした一冊の本のあるのを彼等は發見致したのでムいます。彼等のうちの一人はそれを讀んで驚き、また熱烈な讃仰の念に燃え立ちました。そして彼はそれを讀んでゐるうちに、自分もこのやうな生活をして、貴下に仕へ奉らうと思ひ、浮世のわざを棄てようと考へました。此從者二人は公務の施行者といふ職についてゐる人達でムいました。そのとき、その一人は卒然神聖な愛と、眞面目な恥辱とに充たされて、自分の身を憤慨し、きつとその友に眼をつけて申しました——「君にお願ひだ、どうぞ僕に言つて呉れ給へ、一體我々がいろ〳〵苦勞して、行き着かうとするのは何處なんだらう。我々は何を求めてゐるのだらう。我々はどんなものゝ爲めに奉仕してゐるのだらう。宮廷に於ける我々の希望は皇帝のお氣に入りとなる以上に何があるだらうか。しかもそのうちに脆くないもの、危險

に充ちてゐない何物があるだらうか。またどれだけ多くの危險を通つて我々はより大なる危險に到着するだらうか。更に我々は何時其處に到着するだらうか。けれども神の友となるのなら、私が望みさへすれば、今でも直ぐになれるのだ」と。そして彼は自分が新たに生れる陣痛の苦しみを以て、その眼を再びこの本に向けて、讀んでゐましたが、貴下のみそなはし給ふ彼の裏にある人間は一變して、彼の心が明かになるや否や、直ちに彼は此世を遁れたのでムいました。彼はその本を讀んで、その胸に波が立ち騒いたとき、自身に對してしばらく憤激したのでしたが、やがて善い道をみとめて、その方に向つたのでムいました。そして今や貴下のものとなつて、彼の友達に申しました——「僕は今自分の希望から、離れて、神に仕へようと心をきめた。僕は今から直ぐに此處の修道院に入らうと思ふのだ。君は僕の眞似をしないまでも、僕に反對することはしないで呉れ給へ」と。するとその友は「僕も矢張り君にたよつて行かう、そこで一緒にそれほど立派な褒美と、それ程立派な奉仕とをつとめて行かう」と答へました。斯うして二人とも今は貴下のものとなつ

たのでムいました。「彼等はそのもつてゐた一切を棄て、貴下に從ひ、必要な費用を出して、塔を建てた」（ルカ傳第十四章廿八—廿五節）ました。そこへポンティチアヌスと、彼とつれ立つて花園の池の側を歩んでゐた者とは、此二人をたづねて、同じ場所へ來合せました。そして二人を見付けだして、「日がもう暮れたから、歸らうぢやないか」と言ひました。けれども二人は自分達の思ひ立つたことと、その企てと、またどうしてそんなことを思ひ立つたかといふことを述べて、自分達と一緒にさうなること（修道士となること）は拒んでも、彼等がその爲めに自分達を窘めないようにと願ひました。けれども他の二人は少しもその心は變へませんでしたけれど（彼の言ふところによれば）矢張り自分等の果敢ない身の上を嘆き、囘心の二人を祝福して、どうぞ自分達のことも祈つて呉れと願つて、宮廷へ歸つて行きました。然し二人の者はその心を天に向けて、小舍にとゞまりました。そして二人とも許婚の妻をもつてゐたのでしたが、二人の歸正が知れるや、その女たちも亦童貞の身を貴下にさゝげました。

七　聖人の心動く

以上はボンティチアヌスの語つたことでムいます。けれども主よ、貴下は彼が語つてゐる間、反省するようにと、私を自身に向はしめ、私が心にとめるとをきらつて、身をそむけてゐたら後から私をとらへ、私の顔の前に立たしめ給ひました。それは私がどんなに穢れてゐるか、どんなに曲つて醜くあるか、斑點がついて爛れてゐたかを私にみせようといふお積りでムいました。そこで私は自分の汚れを見て、怕れました、けれども我を去つて何處に遁れる處もムいませんでした。私は自分の眼を自身から反らしてしまはうと努力致しましたが、ボンティチアヌスは依然としてその話をつゞけ、またあなたは再び私をわたくして自身に向き合はさして、わたくしの眼の前にわたくしをお突き出しになりました。それは「わたくしが不義を見出して、これを憎まんが爲め」（詩篇第卅七章の二）でムいました。わたくしはそれを知つてはをりましたけれど、わざと見ないふりをして、これを忘れてしまひました。

けれども健全な感情をもつて此二人の者が、悉くその全身を捧げて、その精神的の病ひを癒やされようとしたことを聞き、その人々を愈々切愛することになりましたとき、その人達に比らべて私の身はいよ〳〵呪はしく、厭はしいものになりました。それは私は十九才の時、シセロの「ホルテンシウス」を讀んで、智慧に對する熱烈な慾望を起して以來、既に多くの年、おそらくは十二年もほんやりとして過ごして來たからでムいます。然るに私はなほ地上の幸福を斥けることを躊躇し、またよしやそれを捜し出さないまでも、只それを探すだけですらも、既に發見されてゐる諸々の寶や、此世の諸王國にもまさり、また肉體の快樂を、只意のまゝに爲し得られるにもまして遙かに結構なものに身を捧げることを躊躇致しました。けれども憐むべき青年であつたわたくし、青年時代の初期に於て一層あはれであつたわたくしは、貴下に對して――「わたくしに貞潔と自制を與へたまへ。けれども今直ぐにではムいません」と、自分の貞潔を祈りました。それは貴下が直ぐにわた

くしの祈りを聽き給ふて、わたくしを不潔なものゝうちから引き出して下さることを恐れたのでした。私の肉慾は殲滅せられるよりも、寧ろ滿足せしめられんことを希望したのでしたから、そこで私は冒瀆な迷信を抱いて、マニケウス教の邪曲な道にまよふてをりました。わくしとて此教へを道理であると思つたわけではムいません、けれども敬虔の心を以て研究することもないのに、只漫然と、敵視した他の教へに比らべて、それは遙にまさつてゐると思つたのでムいます。

そこでわたくしは、自分が此世の希望を棄て、たゞ貴下にだけ仕へることを毎日〳〵ためらうてゐるのは、畢竟、わたくしの前途を定むべき確實なものが現はれて來ないからのことであると思つてをりました。けれどもわたくしは今自分の眼の前で裸に引き剝かれて、自分の良心に斯く責めさいなまれる日が來たのでムいます。良心は責めて申します――「お前の舌は何處にあるか、お前はいつも口癖に、はつきりと分つてもゐない眞理の爲めに、虛榮の荷を卸ろしたくはないと言つてゐたではないか。それだのに、今眞理はは

つきりと分つて來たのに、此荷はやつぱりお前に負はれてゐる。けれどもそんなことの研究に浮身を窶しもなければ、また十年餘もかんがえ込まなかつた者共は、ちやんと肩からその荷物を卸ろして、天翔る翼を貰つてしまつたぢやないか」と。

ポンティチアヌスが斯う語つてゐる間に、わたくしは恥の爲めに恐ろしく良心を刺されまた烈しく心を搔き紊されました。けれども彼は、自分の其處へ來た目的である話を終ると、さつさと歸つてしまひましたので、わたくしは自分に歸りました。私は自身の心に果して何を言ひ盡さずして殘しましたらう。また貴下のあとを跟けて行かうと努めるわたくしに、自分の魂を從はせようとして、果して如何なる非難の鞭をもつて、わたしはそれを答たなかつたでせう。然るにわたくしの魂は尻込みして、反抗し、自分の辯解すらも致しませんのでした。一切の議論は盡くされ、駁せられて、殘るはたゞ慄へてゐる無言の畏懼でムいました。しかもわたくしの魂は、まるで死を恐れるものゝやうに、軈ては自分を蕩盡せしめて死に致す習慣の退潮に、自分が乘ることを禁じられはしまいかと恐れてゐたの

でムいます。

八　内部の爭鬪

そこで、わたくしが自分の魂に烈しく反抗して、わたくしの胸の部屋のうちで起した此家内の大爭鬪の最中、わたくしは心に憂ひ、顏に當惑の色を浮べて、アリピウスに叫んで言つたのでムいます――「何が我々を惱すのか。それは一體何なのか。君は何を聽いてゐるのか。無學なものが却つて天を奪つてしまつた。それだのに學問はありながら、僕達はどうだい、まあ肉と血のうちにのたうちまはつてゐるぢやないか。それとも僕等は之まで先に立つて來たものだから、そんなもの共の後ろに跟いて行くことを恥ぢなけりやなるまいか。又跟いて行かないのが結局恥ぢだからうか」と。マア私は斯麼やうなこと話しましたするとわたくしの心の餘りに激してゐるので、アリピウスは後退りして、愕きながら默つてわたくしを眺めてをりました。わたしの聲は常とはかはり、わたくしの額と頰と、眼と

顏色と聲とは、わたくしの言葉の語らなかつたことを語つたからでムいました。するとそこに私共の宿に一つの小さな庭園がムいましたが、私共はそれを矢張り家中の一部のやうに使用致しました。といふのは主人、卽ち此家の主人は、其處に住まつてゐなかつたからでムいます。わたくしは自分の胸の煩悶に堪えかねて、とう〳〵そこへ走りました。それは、わたくしは此處にゐて、自分の心の中に惹起された、激烈な爭鬪を誰にも邪魔されず遂に善い結果に導くまで、鬪はうといふのでムいましたから。その仕方を、神よ、貴下は知ろしめしても、わたくしは存じませんのでした。けれどもわたくしはまつたく、健康であらうとして、發狂し、生きようとして死んでをりました。また自分はどんなに惡るいものであるかを知つてゐましたが、のち、間もなくわたくしが、どんなに善いものにならうかといふことを知らなかつたのでした。わたくしは庭園のうちに退きましたが、アリピウスはわたくしのあとを追ふて、そこまで參りました。よし傍にゐたとて、彼なら別にわたしの邪魔にはならなかつたのですし、また彼としては之程まで惱んでゐるわたくしを、

どうしても見棄てて置かれなかつたからでムいます。わたくしは出來る限り建物から遠退いて坐つてをりました、私の神よ、わたくしは貴下のみ志と契約のうちに入つて行かなかつたことを口惜しがつて（エゼキエル書第十六章第十節）すつかり心を紊され、烈しく怒つてをりました。わたくしの總ての骨は（詩篇第卅五の第十）わたくしに、それに入れと叫び、天にとゞく讃美の聲をあげました。しかも我々その中に入るには別段船や、車や、または足によらなくても濟むのでムいました、否、私共も家から現に我々が斯うして來て坐つてゐる處に來るほども足を運ぶ必要はなかつたのでムいます。それは啻に我々がその方へ行くだけではなく、またそのうちに到達するには、只行かうとする意志さへあれば、しかも強く徹底した意志さへあれば、すなはち、變りやすく、半ば傷き、此方へころび、あつちへよろめき、一方は上がり、一方は沈んで、闘へる意志ではない、別な立派な意志さへあればよいのでムいました。

最後に、人がもしも手足を失ふか、もしくばその手足を繩でしばられて、病ひの爲めに

弱くせられ、或はその他の方法によつて弱められるときには、しないと思ふこともすることが出來ないでしまふことがありますが、わたくしは斯くの如く逡巡して烈しく焦れ込んでゐながら、このやうな多くの働きを肉體で致したのでムいます。で、わたくしが若し髪を拐つたり、自分の顔を打つたり、指を組み合せて、私の膝を抱いたりしましたら、それは皆、私がしようと欲したからしたのでムいます。けれども若し私の手や足やが私の意志に從つて動かなかつたなら、わたくしはそれを欲したからとて、さうすることは出來なかつたのでせう、ですからわたくしは今意志と力とが一つでなかつた場合に多くの事を致しました。しかしてその一方に於ては、私がしたいと欲するや否や、すぐに爲し得られる力をもつてゐて、しかも比較にならない程強くわたくしが悦んでしたらうところのことを、却つて致しませんでした。さうなつたわけは、斯麼事に於て、能力は即ち意志でムいまして、意志することは即ち實行することであつたからでムいます。しかもさうはせられなかつたのでした。そしてわたくしの心は自分に服從して、その大きな意志を、たゞ意志の範

圍内で行ふよりも容易に、私の肉體はわたくしの最も弱い意志に從つて、その願使のまゝに手や足やを動かしたのでムいました。

九　心と肉體との關係

この奇怪なことは何處から參りましたでせうか、また何故でムいませうか。私が此疑問を呈しますように、貴下の御憐憫でわたくしを照らして下さいまし。即ち人間の隱れたる罪と、アダムの子孫の最も暗黑な苦悶とが答へるのでムいませうか。この奇怪なことは何處から來ましたか、また何ぜでムいませうか。こゝろが肉體に命ずれば、肉體は直ぐに從ひますのに、こゝろが心自身に命じますれば、抵抗を受けるではムいませんか。こゝろが手に、動けと命令すれば、手は直に動きまして、命令と服從とを別々に分けることが出來ないのでムいます。然るに心は矢張り心で、手は即ち肉體でムいます。心はこゝろにそれを欲せよと命じて、意慾せしめますのに、心自身は外にゐるのではないにも拘らず、其と

ほりに致しません。此奇怪なことは何處から來てをりますか。また何ぜでムいますか。私は申します、心は、それに意慾せよと命令致しますが、自身が意慾しなければ、命じません。それだのに心は命じられたことを致しません。けれどもその意慾が全體的でないのでムいます。そのために、その命令することも全體的ではムいません。何ぜかなれば、それが意慾する限り、それは命令し、またそれが意慾しない限りは、命令されたものが爲されないのでムいます。意志は意志があるべしと命令します、けれどもその意志たるや、それ自らであるべく、他の意志であつてはならないのです。然しその命令が全體的でムいませんから、その命令は存在致しません。何ぜかなれば意志が全體であるならば、それは既に存在してゐるのですから、存在せよと命令などは致しません。ですから、半分意慾し、半分意慾しないといふ奇怪なことはムいません、それは單に心の病氣でムいます。即ち眞理は起さうとするが、習慣は臥かさうとするところから、すつかり起き上りきらないのでムいます。ですから二個の意志があるといふことは、そのうちの一つが完全でないことに基

づくもので、一つの意志は他の意志の缺いてゐるものをもつのでムいます。

十　意志の多様

おゝ神よ、思考することに於て、二個の意志があるのを見て、一つは善、一つは悪と、二種の心が我々のうちにあると稱へて、虚妄なことを語り、魂を惑はすものゝ亡びるやうに、彼等を貴下のみ前に死に去らしめ給へ。彼等が此悪しきものを保持しますならば、彼等自らは本當に悪いものでムいます、又彼等が眞理を維持して、貴下の使徒が彼等に對して「汝等もと闇なりしが、今は主にありて光りとなれり」（エペソ書第五章第八節）と言ふように、眞理を受け入れますならば、彼等自らは善くなりませう。けれども彼等は、主に於てゞはなくて、彼等自らに於て光であることを望み、魂の性質は卽ち神の本實であるなどと想像してその傲慢により、一層甚しい暗黑となりました。それといふのも彼等は恐ろしく高慢となり、總ての人を照らさうとして此世に來り給ふた眞の光りである（ヨハネ傳第一章第九節）貴下から遠

ざかつたからでムいます。お前達のいふことを愼み、恥ぢて面を赫くししなさい、そして彼の御方に近づいて光りを浴びなさい、そしたならお前の顏は赫むことはなからう。（詩篇第卅六の第五）私自らは、久しく考へてゐましたやうに、主なる私の神に奉仕することをかんがへますときに、斯う意慾してゐたものであれば、これを意慾しなかつたものも私自らであることが分りました。わたくしの意慾は全體的でもなければ、また全體的に意慾しないでもなかつたのでした。そのために私は自分と爭鬪し、自分のうちを分裂さしました。此分裂はわたくしの意志に反して起つたものでしたけれど、それは決して他に一種の心があることを證據立てず、却つてそれは私自身の罪があるから、その罰を受けたのであることを證明致すのでムいます。「ですからこれを行ふものはもはや私ではなくて、わたくしのうちに宿る罪でムいます」（ロマ書第七章第十七節）一層氣儘に犯した私の罪に對する刑罰でムいます。私がアダムの子孫であつたからでムいます。

若し相剋する意志の數だけ、それ〴〵皆ちがつた性質があると致しますれば、たゞ二つ

のみならず、また多くの性質がある筈でムいます。誰かゞ若しその集會所に行かうか、或は劇場に行かうかと思案すると致しませう。すると此人達は叫ぶのでムいます――「見給へ、此處に二つの性質がある。一つは善い性質で、此方へ人をつれて行き、も一つは悪い性質で人を彼方へ引き戻してしまふ。なぜならば、若し二つの意志がないとすれば、相反する意志の間に生ずる、此躊躇は何處から起つてくるか」と。けれども私は申します――「集會所につれて行く性質も、劇場に引き戻す性質も同じく悪である」と。けれども彼等は彼等の方へ來る性質を善であると信ずるのでムいます。そのわけを申せば、私共のうち誰かゞ若し劇場に行くべきか、或は私共の教會に行くべきかと思案して、自分の意志の分裂爭鬪の爲めに迷ふてゐると致しましたら、マニケウスの教徒でも、矢張り之が答へに迷ひは致しますまいか。といふのは、彼等は私共を教會へやらうとする意志は彼等教會の奥義を受けて、それに從ふ彼等にあつてもまた等しく善であると告白しなければなりませんのですから(事實彼等はそんな告白は決して悅びませんが)。或はまたさうでなかつたら、

一人のひとのうちに相剋する二つの悪い性質、また二つの悪い魂があると考へなければならなくなります。そしたら善なる性質と、悪なる性質とが對立して、彼等のいつも言つてゐることは本當でなくなりませう。或は彼等は眞理に立ち戻つて、誰かゞ思案するときには、一つの魂がちがつた意志により燃え立たゝしめられるといふ說を拒むことは出來なくなります。

ですから、彼等が、一人の私のうちに、二個の爭ふ意志を認めるときには、二つの反對の實質から成り、二つの反對な原理に基き、一つは善、一つは悪なる二つの魂の間に爭鬪が起るのだと彼等に言はせないで下さいまし。眞の神よ、それは貴下は彼等を排斥、詰責し、罰したまふからでムいます。それは孰れにするも、丁度人を毒を用ひて殺さうか、劍によつて害しようかと思考すると同じく罪であるやうに、また他人の所有物の、是を侵かさうか、かれを侵さうか、放蕩して歡樂にふけらうか、或は慾張つて金錢を溜め込まうか更にまた、若し機會さへあれば、他人の家を掠めやうと、乃至はさうする手段さへあれば

姦淫を行はうかなどと思案する場合と同じく罪なのでムいます。若し斯うしたことが皆一時に起り、そしてみな等しく慾をそゝり立てたにしても、それを一時に果すことは出來ません。何ぜかなれば、是等の慾望は、その欲する多くのものゝうちに、心を四つ若しくはそれ以上の多數の相剋する意志によつて分裂さしてしまふからでムいます。然るに彼等はそんなに澤山のちがつた本體があると稱へは致しません。善の意志に於ても矢張りそのとほりでムいます。といふのはわたくしが彼等に向つて、使徒の書を讀んで樂しむことが善であらうか、或は謹嚴な詩篇を讀んで樂しむことが善であるか、それとも福音書を讀んで議論をするのが善であらうかと訊ねましたなら、彼等はその各々に對して、皆「よし」と答へるからでムいます。さうであるとすれば、若し總てのものが皆同樣に一時に快樂を與へるものとしますれば、どうでムいませうか。孰れを取るべきかと思案するとき、それぞれちがつた意志は人の心を多岐に分裂せしめぬでムいませうか。しかも此等の意志は皆善なのでムいます、しかもそのうち一つの意志が擇ばれて、多くの分裂してゐるそこに集結

して一つとなるまでは相剋するのでムいます。之と同じことは、天上の限りない生命が私共を喜ばすのに、此世の幸福の樂しみが私共を下界に引戻す場合には、是を好まぬも、或は全體の意志を以てかれを好まぬのも矢張り同じ魂でムいます。そこで意志は頗る悲慘な苦悶に引きさかれ、眞理によつて天國を擇ぶも、習慣によつて容易に浮世をも棄てないのでムいます。

十一　靈肉の爭鬪

斯うわたくしは魂の病ひにくるしみ、前よりも烈しく自已を責め、また鐵鎖にしばられながらも、それがすつかり斷ち切れてしまふまでは輾轉して止まなかつたのでムいます。尤もその時私が此鐵鎖にしばられてゐた程度は些細なものでしたけれど、それでも矢張り縛られることは縛られてゐました、そして主よ、貴下は嚴父の御慈悲をもつて、私の心の奥底を壓迫して、恐怖と耻辱との笞を倍加し給ひました。それはわたくしが再び負けるこ

とがないように、また、もうほんの僅か殘つてゐる縛めを、わたくしが斷ち切つてしまはないが爲めに、再びその鎖が力を得て、以前にもまして強くわたくしを縛らないようにとの御心盡しでムいました。私は自分の心うちに「そら、今だ、やれ、そら今だ、やれ」と言ひました、そして斯う言つたとき、私は殆んどそれをしようと致しましたが、實際にはさう致しませんでした。しかも私は以前の狀態に戻りはせずして、いま一歩といふところに立止まつて、ほつと一呼吸致しました、そして私はふたゞび試みまして、もう少し、もうほんの少しと進みながら、もう既んでのことで捉らへるといふ間際まで來ましたが、私はそれに到達せず、それに觸れもしなければ、捉らへもせず、死に死することも、また生命に生きることにも躊躇致しました。しかして私が今まで慣らされて來た悪い感情は、わたくしが未だ慣れてをらなかつた善い性情よりも強く私をとらへました。そしてまつたく異つた自分とならうとしたその瞬間は、いよ〳〵わたくしが近くに進むにつれて、いよいよ大きな恐怖をもつて私を打ちました。けれどもそれは私を撃退することは致しません

し、また私を歸り去らせもしないで、たゞ私を宙ブラリンに吊るしました。

玩具のうちの玩具、虚榮中の虚榮、私の古い情婦が未だしつかりと私をとらへて放さなかつたのでムいました。彼女はわたくしの肉の衣を把らへて、窃かに囁きました——「貴下は私共を棄てなさるのか。そのときから私達は最早永久に貴下と一緒でなくなるの?」と又「そしたら、そのときから貴下に取つては、是もあれも捉によつて許るされないものになりますよ」と。「是もあれも」といふ言葉で、彼等が示唆したものは何でムいませうか。どうぞ神よ、貴下の御慈悲でこれを貴下の僕(しもべ)の魂から取り除いて下さいませ。彼等は何たる汚濁、何たる耻辱を示唆したのでムいませう。私は當時彼等の言葉を碌々聞き入れもせず、また彼等は眼の前にあらはれて來て、私と顔を合せも致しませんでしたけれどまるで私の背後から來て、私に囁き、去らうとするのを、そつと引いて、自分等の方へ振り向かせようとしたやうでムいました。斯うして彼等は私を引き留め、私は身を彼等から振り放し、呼ばれてゐるところへ馳つて行くことを躊躇しました。といふのは横暴な習慣

は私に「お前はあの者共と離れて生きていかれると思ふのか」申したからでムいます。

けれども此言葉は今は極度に微温的に響きます。といふのは私が顔を向ける方、また私が顧るへながら行かうとする方に、制慾の貞潔な威容があらはれました。それが晴々してをりましたが、決して放逸に愉快ではなく、却つて卒直に彼女に來い、少しも疑ふとはありませんと、強請りました。まつたく、その善い模範に滿ちた敬虔の手を差しのべて、私を受け、私を抱かうと致しました。こゝには青年もあれば、老人も、また壯年も澤山居るし、敬虔な寡婦や年をとつてなほ處女であるものもをりました。そして彼等の各々のうちには貞潔そのものが宿つてをりました。けれども彼等は決して石胎女ではなかつたのでムいます。おゝ主よ、彼等はその良人にまします貴下によつて生んだ歡喜の子供達の多產な母でムいました。（詩篇第百十三の九）彼女（貞潔）は人を感激させる笑ひをもつて私に笑みかけ、丁度斯う言つてゐるやうに見えました――「貴下は此處にゐる人達にできることがおできなさいませんか。でも此人達の誰だつて、その主にまします神様の御助けがなくて、自分

獨りですることの出來たものはムいません。神様が私を此人に御與へなさつたのでムいますよ。貴下はそのやうに獨りで立ち、また獨りでお立ちにならないのは何ぜですか。貴下自身を主にお投げなさい。恐がることはムいません。主は決して身を引いて、貴下を仆れかすやうなことはなさいませんよ。安心して身を神にお投げなさい。主は貴下を受けて、貴下を癒し給ひませう」と。けれども私はやはり是等の愚かな囁きを聞き、躊躇してちうぶらりんになつてゐましたから、ひどく顏を赧く致しました。そこで彼女はふたゝび斯う言つてゐるやうでムいました――「貴下のお耳を貴下の不潔な部分に向けて聾になさい。それでもつて彼等を殺してしまふのです。彼等は貴下に愉快を話しますけれど、主なる貴下の神の律法を話しは致しません」と。わたくしの心のうちの此爭鬪は、わたくし自らに反逆してゐるのに外ならなかつたのでムいます。けれどもアリピウスはわたくしの近くに座つて、無言のうちに、わたくしの常ならぬ感激の結果を徐ろに待つてをりました。

十二　遂に歸正

けれども深遠な考慮が私の奥底から、わたくしのあらゆる辛慘を引きずり出して、わたくしの眼の前に積みあげました時、恐ろしい嵐が起つて、恐ろしい涙の驟雨を伴ひました。わたくしは之を注ぎ盡してしまはうと思つて、起ち上つてアリピウスを離れました。泣くには獨りこそ善いとわたくしは考へたのでムいました。そこでわたくしは、たとへ彼がゐたところで、わたくしの邪魔にならない程の遠くへ退きました。そのとき、わたくしはそのつもりだつたのですが、彼はちやんとそれを悟つてをりました。といふのは私は何事かを彼に言つたのでしたが、私の聲はすつかり涙に曇つてゐましたのですから。そこで私は起ち上りました。するとアリピウスは非常に愕きながらも、二人で坐つてゐた元の處に殘つてをりました。何ぜかは存じませんが、わたくしは、とある無花果の樹の下に身を投げ涙の溢れ出でるにまかせましたところ、わたくしの溢漲は、貴下に向つてかぐはしい犧牲

のそなへものを捧げることになりました。そして實際言葉は是とはちがつてをりましたけれど、大抵次のやうな意味のことを私は貴下にむかつて呟きながら申上げました——「主よ、かくて汝は幾何時を經たまふや、主よ、かくて幾何時を經給ふや。汝はとこしへに怒り給ふや、われらの先祖のよこしまなる業を紀念したまふ勿れ」（詩篇第六の四、同第七十九の五、八）と。私はそんなものに捉らはれると感じたからでムいます。わたくしは次のやうな悲しい言葉を出しました——「幾何時を經たまふのですか、幾何時を經たまふのですか。明日、またその明日までムいますか。何ぜ今爲し給はないのでムいますか。何故に私をわたくしの不潔の終りとならしめ給はないのですか」と。

わたくしが以上のことを語り、わたくしの心の非常な苦しい悔恨のうちに泣いてゐましたとき、フト、男の子か、それとも女の子か知りませんが、子供の聲が隣りの家から聞えて、何かを暗誦し、屢々「取れよ、取りて讀め」といふのが繰返されて聞えました。そこで私の顔色は忽ちに變りました。斯麼言葉のある歌を唱つて、子供が遊ぶ遊びがあるだら

うかと、一生懸命に考へてみましたが、どうもそんなことを何處でも聞いたことがあるとは思ひ出しませんでした。ですからわたくしは溢れ出づる涙を抑へて立ち上り、これこそは聖書を開いて、私が一番始めに見出す章を讀めといふ、神の御命令に相違ないと悟りました。といふのは他の人々が福音書を讀んでゐました時、不圖アントニウスが入つて來まして、その讀まれてゐる言葉を聞いて、それが自分に向つて言はれてゐる勸めであると悟つたといふ話を聞いてゐたからでムいます。アントニウスが聞きました言葉は「往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶(たから)を天に得ん。かつ來りて我に從へ」(マタイ傳第十九章第二十一節)といふのでムいました。彼は此神託を受けて直ちに貴下のみもとに立ち歸つたのでムいました。で、わたくしは急いでアリピウスの座つてをつたところに立ち歸りました。わたくしは立ち去る時に、使徒の書をそこに殘して置いたからでムいます。わたくしはそれを取つて開き、わたくしの眼が最初に落ちたところを讀みました。そこには斯ういふ文句がムいました——「宴樂、醉酒に、淫樂、好色に、爭鬪、嫉妬に歩むべきにあらず、たゞ主イ

エス・キリストを衣よ、私の慾のために備へをする勿れ」(ロマ書第十五章第一節)と。それから先をわたくしは讀みたくも思はなければ、また讀む必要ももちませんでした。といふのは此節の終りに來ると、倏ち、恰も平安の光りともいふべきものが、わたくしの心のうちに侵入して、疑惑の暗は殘りなく消え去つたからでムいます。

やがて私は指をその間に挿み、或は他の何かの印(しるし)をつけて本を閉ぢ、今は靜かな顏になつて、アリピウスにそれを知らせました。貴下が彼の心にどのやうな働きを爲し給ふたかは知りませぬが、彼は私に——「君の讀んだ文句が知り度いものだ」と申しました。由つてわたくしは彼にその文句を示しますと、彼は、わたくしの未だ知らなかつた、その次にある文句を讀みました。その文句は斯う書いてムいました——「されど信仰の弱き者を容れよ」と。此文句を彼は自分に當てはめて、わたくしに說明してくれました。で彼は此訓諭に力を得まして、彼の性格に最もふさわしく、また彼をして常に遙にわたくしとは違つて、善い方へ彼を進ました果斷と決意とによつて、心に少しの當惑も躊躇もしないで、斷

然私と一緒に信仰の路に入ることになりました。それから私共はわたくしの母のところへ参りまして、此事を告げ知らしましたので、彼女は大きに歡びました。彼女が歡喜の有様がどんなであつたかと申しますれば、彼女は喜んで跳び立ち、嬉れしい〳〵と聲をあげて我々が總て求めてゐるもの、總て思つてゐるものよりもズット勝さつたことを爲し得られる貴下を（エペソ書第三章第廿節）を崇めました。がそれは彼女が、あはれにも、涙を流して嘆きながら、いつも彼女の願つたより以上のものを、私の歸正によつて貴下が彼女に與へ給ふたからでムいます。貴下はわたくしを貴下に立ち戻らせ、それによつて、私をして妻をも、此世の如何なる希望をも求めないで、かの信仰の定木の上に立たしめ給ひました。久しき以前、貴下は此定木の上にわたくしを置いて彼女に示し給ひました。（本書第三篇參照）かうして貴下は彼女が願つたものよりも、遙かに豐かに、またわたくしの肉體から生れる孫によつて彼女が求めたところよりも、遙に貴い、潔い道によつて、彼女の嘆きを、歡びに變へたまひました。

第九篇

一　感謝

「あゝ主よ、われは汝の僕なり。我はなんぢの僕にして、なんぢの婢の子なり。汝はわが紲紲を解きたまへり。われ讃美の供物をなんぢに捧げん。わが心とわが舌とはなんぢをたゝへん」（詩篇第百十五の十六、七）またわたくしの心と、わたくしの舌とに貴下をたゝへさして戴きませう。まつたく「總てわが骨は言はん、主よ、誰かなんぢに比ぶべきものあらん」（詩篇第卅五の十節）と言はして下さい。私の骨にさう言はして下さい、そして貴下は私に、また私の魂に答へて下さい、「われは汝の救ひである」と。私は誰ですか、また如何なるものですか。いかなる惡をわたしは致しませんでしたらうか。わたくしの行ひに惑がなければ、わたくしの言葉に、わたくしの言葉に惡がなければ、わたくしの意志に惡がなかつたでムい

ませうか。けれども主よ、貴下は善にして慈仁にましまし、また貴下の右の手はわたくしの死の深淵をさぐり、わたくしの心の底から、墮落の淵を掻い乾し給ひました。そのために私は自分の欲することを望まずに、貴下の欲し給ふことを欲するやうになりました。けれども私の自由意志は、斯く多年の間、いづこにありましたらうか。またどのやうな低い深い、祕密な場から直に呼び出されて、わたくしの頸(うなじ)は貴下の「易い軛」(マタイ傳第十一章第卅三節)を受け、またわたくしの肩は、私の助け人であつて、私の贖主にましますイエス・キリストよ、貴下の輕い荷を負ふのでムいます。樣々な愚味な樂しみを棄てゝ行くことが、私によつてどれだけ樂しいことになりましたらう。また私が別れることを恐れたものゝなくなるのが、今や忽ち却つて歡喜となりました。それは貴下がそれを私の身から取り除いて下さつたからでムいます。眞實であつて、最高の歡喜にまします貴下はこれを棄て、そしてその代りに、肉または血にとつては樂しくないのですけれど、總ての歡樂よりも樂しくて、總ての光りよりも輝き、しかも總ての奥義よりも深遠で、一切の名譽といへども遙かに及

ばぬ程に尊くましまして、しかも自尊心のある者にとつては尊くましまさぬ貴下御自身を入れ給ひました。今やわたくしの魂は奔走と利獲との嚙む配慮から、また輾轉煩悶と、慾の痂蓋(かさぶた)を掻くことから解放せられました。そしてわたくしの幼ない舌は貴下にむかつて、わが光り、わが富、またわが救主にまします主よ、わが神よと、自由に申しました。

二　教師の職を棄てる

わたくしは貴下のみまへで、わたくしの舌でする職業を、口舌の市場より、騷々しくして奪ひ去らずに、徐々に引き去らうと決心致しました。かうして青年ども、すなはち貴下の律法でもなければ、またあなたの平安でもなく、たゞ僞りの狂亂と講壇上の爭論とを思つてゐる者共に、その狂暴の武器たる雄辯術をわたくしの口から買はせないようにしようと致しました。然るに茲に甚だ好都合であつたのは、折柄葡萄の收獲期が近寄つてその休暇(八月廿二日から十月十五日まで)までにほんの僅かな日子を餘すだけでムいましたから、わたくしは辛棒

してそれまで待つて、正式に職をやめ、以て貴下に購はれた私は、再び身を賣らぬことにしようと思ひました。ですから私の目的は貴下にはよく知れてをりましたけれど、人々の間には、只私の二三親友のほかには知られてをりませんのでした。私共の間には之を誰にも漏らさない約束をしたのでした。けれども涙の谷からのぼつて（詩篇第八十四の六）京詣での歌をうたつてゐる（詩篇第百廿の第百卅四）私共に、貴下は鋭い箭と、燒き盡す炭とを與へて、それでもつて私共を諫めるやうに見せかけて、實は妨げを爲し、また恰も人がその食物にするときのやうに、受けるふりをして、私共を殺すところの欺僞の舌を制禦し給ふたのでムいます。

貴下はあなたの御慈悲をもつて、私共の心臓を射たまひましたので、私共は貴下のみ言葉に心臓を貫かれたまゝそれを携へてをりました。そして貴下が暗いものゝ代りに輝くものとなし、一旦死んでゐたのをまた生かし給ふたところの、貴下の下僕たちが示した模範が私共の心に幾つも想ひ出されて、私共の強い昏睡狀態をその熱誠の火で燒き盡しました。畢竟私共を深淵に陷らせまいとの御配慮に基くことでムいます。また是等の模範は烈

しく私を燃燒せしめましたので、反對な者共があらゆる詭辯の舌から來るその呼吸も、たゞ却つて愈々わたくしの燃燒を熾んならしめるだけで、私共を滅ぼすことは出來ませんでした。けれども貴下が遍く全地に崇めしめ給ふその聖名により、貴下の誓ひと志願とを賞讃するものもありますから、もうほんの間近に逼つて來た休暇まで待つことをしないで、その以前に、多くの人達の前で明かに教師の職を退くことは、如何にも見榮を張るやうに思はれる懸念もムいました。たとへば私が斯うした行動をするのを見たり、又私が待設けてゐた葡萄の收獲期が非常に逼つてゐることを見たり致しましたら、世間の人達は、私が誰かエライ人に會ふつもりだなどと、樣々なことを申すのでムいませう。そして私の志を斯麼ふうに考へ、また論じ、貴下の善いことが却つて譏りの的になつたなら、私の目的に何の益がムいませうか。

そればかりではムいません。その夏、非常に苦しんで學問を致しましたが爲めに、わたくしの肺が弱くなりだして、深い呼吸をすることが困難になり、しかも胸が痛むので、肺

に故障が起きたことが明かになつてをりました。はつきりした聲を出し、長い話をすることが厭になりました。これで第一に私は惱んでゐたのでムいます。といふのは此病ひの爲めに、私は止むを得ず教師の職を罷めなければならないか、それでも癒えて、回復することが出來たにしても、少くとも之を中止しなければならぬほどになつてゐたからでムいます。けれども後、わたくしは貴下が我々の主にましますことを知るべく、閑暇を得たい切望を起して、その決心をつけましたとき、わがみ神よ、貴下は御存じでムいます、私は此時機にかなつて、少しも嘘僞ならぬ口實を得たことを却つて歡び始めました。その爲めに自分の子供達の利益を見て、私の教壇を去る自由を斷じて許したがらぬ親達の怒りを宥めることが出來ました。でムいますから、私は此やうな歡喜に充ちて、それまでの間の時間が經過するのをぢつと辛棒致してをりました。それは約二十日の間でムいました。けれども私はそれを勇氣を鼓して辛棒致しました。若し私が勇氣をもたなかつたら、恐らくわたくしは此重壓の爲めにひしぎつぶされてしまつたでムいませう。と申しますのは、曩にわ

たくしが此重任にたえたのは、常は貪慾と二人づれであつたのでムいますが、今はそれに代つて共に重荷をかつぐべきものが必要であつたのでムいます。或は私の同胞である貴下の下僕のうちには、私の此行爲を目して「既に衷心から貴下のみ手に屬して、戰ふと言ひながら、一時たりとも身を僞瞞の椅子に就かせるのは、罪を犯しゐるものである」と、申すものもムいませう。けれども私はそんな人達と議論を致すことは避けます。然し最も慈悲深くまします主よ、貴下は私が他の最も怕ろしい、葬り去らねばならない罪と一緒に、此罪までも、貴下の聖い御水によつて洗ひ潔め、赦してはくださいませんでしたか。

三　二友人の聖なる死狀

ヴエレクンヅス（第八篇に出た人名）はこの私共の幸福に對して、また〳〵心を惱したのでムいます。といふのは、自分の絆に非常に強く結ばれてゐた彼は、私共との友達關係がなくなりさうだと思つたからでムいます。彼の妻は信徒であつても、彼は未ださうではなかつたか

らでムいます。でその爲めに、彼は他のものよりも遙に強く引きとめられて、私共が始めた旅行から引退して、迎ち出來ない條件によるのでなければ、その他のどんな條件附でも自分はキリスト教徒にはならないと申しました。けれども私共が居たいとおもふ間は、遠慮なく彼の別莊をつかふて差支へないからと、非常に親切に申してくれました。主よ、貴下は正しい者の復活するとき、彼に報ゐ給ひませう。貴下は既に彼にその運命をお與へになつたのでムいます。即ち私共が羅馬に行つて不在であつた間に、彼は肉體の病氣にかゝり、そのときキリスト教徒となりまして、貴下の信徒として此世を去りました。けれどもそれによつて貴下は啻に彼のみではなくて、また私共をも憐みたまひました。貴下は此友人の私共に對するなみ〳〵ならぬ親切を思ひながら、しかも彼を貴下の羊の群の一疋として算へることが出來ないで、私共が辛棒し難い悲哀に苦しむだらうと御配慮ゐ給はつたからでムいます。我々の神よ、私共が貴下のものであることを感謝致します。貴下のおすゝめと、お慰めと、眞なる御約束とは私共に告げて申します、私共が浮世の熱病から癒やさ

れて、去つて貴下の内に憩ふたカッシキアクムの別莊に對して、貴下はヴエレクンヅスに酬ゐ給ふて、貴下の樂園の永遠の能力を與へ給ひました。貴下は乳を注ぐ山（詩篇第六十三篇三の一五）豐かな山たる貴下の山で、地上の罪を赦し給ふたからでムいます。

そのとき彼自らは惱みましたけれど、ネブリデイウスは悅びました。彼は未だキリスト教徒になつてゐないで、眞理にまします貴下のみ子の肉（ヨハネ傳第十四章六）を幻影であると信ずる、かの最も忌はしい誤謬の淵に陷つてゐましたが、それから跳び出して、私共が信じたやうに信じたのでムいます。尤も未だ貴下の教會の如何なる聖典にもあづかつてはをりませんでしたが、最も熱心な眞理の探求者でムいました。彼は、私共が改心し、また貴下の洗禮によつて新たに生れた後、久しからずして同じく公教會の忠誠な一員となり、またアフリカに於てその人民の間に於て、完全な貞潔と禁慾とをもつて貴下に仕へ、その全家をあげて、彼の働きに依つてキリスト教徒となりました時、貴下は彼を肉の桎梏から解き給ふたのでムいます。そして彼は今アブラハムの懷（ふところ）に生きてをるのでムいます（ルカ傳第十六章第廿二節）

この懐といふ意味はどうでムいませうとも、私の親しい友人であつて、貴下が迷ひのうちから救ひ出して貴下の子となし給ふた我がネブリディウスは其處に生きてをります、確にそこに生きてをります。このやうな魂にふさはしい處がその他にあるべくもおもはれませんのです。靈の信仰に經驗のない小人(せうにん)であつた時に、瀕りに(道)訊ねてゐた彼は、今そこに生きてゐるのでムいます。今や彼はその耳をわたくしの口に傾けないで、その靈の口を貴下の泉につけて、自分の望むがまゝに、貴下の智慧を及ぶ限り飲んで、窮まりなく幸福でムいます。けれども此私を忘却する程に彼は之に醉ふてゐるとは思へません。何ぜかなれば彼が飲む泉の主人にまします貴下は、私を憶へてゐ給ふからでムいます。そこで私共は、こんなに歸正してはゐましたが、矢張り友情を以て悲しんでゐるヴェレクンヅスを及ぶ限り慰めてやりました。また彼の境遇、すなはち結婚生活に忠實であるようにと勸めました。そしてネブリディウスが、只もう行ふばかりになつてゐたので、今にも私共に跟いてくるかと待つてをりました。すると、御覽なさい、さうした月日もよう〳〵轉じ去つた

ではムいませんか。わたくしは心の奥底から安心して「わが心なんぢに向ひて、われ汝の聖顏を探ねたり、主よわれ汝の聖顏をたづねんと云へり」(詩篇第廿七の八節)と自由に歌はうと慕ひましたから、日數が長く、久しく經つたやうに見えました。

四　愈々退隱

さて心のうちではもう遠の昔に解職せられてゐた修辭學の教授職から、實際に於て私が解職せられる日が參りました。軈てその事も實行せられました。貴下は私の舌を救つて下さつたのでムいます。貴下は既に此舌から私の心を救ひ置いて下さいました。わたくしは歡んで貴下をたゝへ、總て私の親近のものをつれてカッシキアクムにあるヴェレクンヅスの別莊へ移りました。其處へ行つてから、私が著はした本は、貴下に對する奉仕ではムいますが、矢張り傲慢な學派にあこがれてゐたことは、私と一緒にゐたものとの闘はした議論の書、及びみ前で獨り議論した書にあらはれてをります。まだ不在であつたネブリディ

ウスに對してどうであつたかは、私の書簡が之を示してをります。けれども十分の暇を得て、當時示し給ふた貴下の大きな御慈悲を貴下に對して偲べるのは何時のことでムいませうか。ましてや今は他の更に大きな慈悲を取り急いで申さうと致してをるのでムいますもの。主よ、貴下がいかなる刺ある笞で私の心を打ち馴らし給ひましたか、またどうして私を平にし、惡念上の諸々の山や丘やを低くし、私の曲つてゐるのを直くし、けはしいところを平にし給ひましたか、またどうして私の心の兄弟であるアリピウスを、貴下の獨り子なる我々の救主イエス・キリストの名に從はしめ給ふたかを、わたくしの記憶におもひ出して、貴下に感謝することは私にとつては誠に樂しいのでムいます。アリピウスは始め私共の書中に主のみ名の挿入せられるのを拒みました。彼は蛇の敵（蛇は惡魔を意味す。創世記）なる教會の健全な牧草の香氣よりも、寧ろ既に主の折り挫きたまふた學派の學藝の香柏の香りが私共の書中にあらんことを望んだのでムいます。

貴下の誠の愛に對しては新參者でムいまして、入門志願者に過ぎなかつたところの私は

入門志願者であるアリピウスと共に別莊にをりましたとき、傲慢の精神を排斥するところの信仰の歌であり、また敬虔な聲であるところのダビデの詩篇を讀みまして、わが神よ、わたくしは如何なる聲を汝に擧げましたらう、わが母は女性を衣とし、男性の信仰を有し、老齢の平靜と、母の慈愛と、キリスト教徒の敬虔とをもつて、私にすがつてをりました。わたくしは是等の詩篇のうちで、どんな聲を貴下にあげましたらうか。また是によつてわたくしは如何に貴下に對して胸を然やされましたでせう。また燃える胸をもつて、若し出來ることなら、人類の傲慢に對して、全世界に之等の御旨を宣べ傳へようと致しました。まつたく是等の詩は全世界に歌はれまして「物としてその和喞（わたつみ）をかうぶらざるはなし」（詩篇第十九の第六）でムいます。わたくしはどんなに激しく、鋭い悲みをもつてマニケウス教に對して怒つたことでムいませう。またいかに彼等を憐みましたでせう。彼等は貴下のこの聖典、此治療法を知らないで、彼等を健全ならしめる解毒劑にむかひ、却つて猛り狂ふてをりました。

わたくしが閑暇を見て、詩篇第四を讀むとき、彼等が、何處か私の近いところにゐて（しかもそのゐることを私は知らないでゐて）彼等が私の顏を見、またの聲を聞くこと、どんなにその詩篇が私に影響を及ぼしたかを、私は聞き度いと思ひました。「我が義を守り給ふ神よ、我が呼び求むる時に答へ給へり、わが患みたる時、なんぢ我をくつろがせ給へり、主よ、我を憐み、わが祈を聽きたまへ」（詩篇第四の一）私がこんなことを語つてゐるのを、彼等が知つてゐるとは私が知らないで、しかも彼等が聽いてゐることを私は望みます。若し彼等が私に聞いてゐることや、私を見てゐることを私が知つてゐるとしますれば、それを同じことを、それと同じやうには私は語らうとしないでムいませう。けれども私がよしやそのとほりに語つたにせよ、なほ私が單獨に、また貴下のみ前で私自身に語つたとほりに彼等は解しては呉れなかつたでせう。

わたくしは恐れ戰き、更にまた父よ、貴下の御慈悲のうちに希望と、歡喜とに燃やされました。そして貴下の善い靈は私に振り向きまして「人の子よ、いつまで心鈍きや。なんぢら空しきことを好み、虛僞をしたひて、幾何の時を經んとするか」（詩篇第四の第二）と仰せられましたとき、こんな希望と歡喜とは、すべてわたくしの眼と聲とから出てました。何ぜかなれば、わたくしは或る時虛榮を好み、また虛僞を慕つてゐたからでムいます。そして主よ、貴下は既に貴下の聖者を偉大ならしめ（キリストのこと詩篇第四の第三）これを死者に中から甦らせ（エゼキエル書第一章第廿節）貴下の右に置き給ひました。その方をして高いところから、その御約束、即ち助け主にましますところの眞理の靈を送らせふ御思召に基くものでムいます。その方はもう靈を遣はし給ふたのでムいますが、私はそれを存じませんでした。その御方は確に之をおつかはしになつたのでムいます。といふのは、その御方は今や崇められて、死者の中から甦り、再び天に昇り給ふたからでムいます。此時までイエスは未だ御光を受け給はなかつたので、靈は未だ與へられてをりませんのでした。（ヨハネ傳第十四章第十六、七節）また豫言者は叫びました――「いつまで心頑なるや、汝等何故に空しきことを好み、虛僞をしたふや。主その聖きものを崇めたるを知れ」（詩篇第四の二、二節）と。彼の方は「いつまで」と叫び給ひます。彼の

方は「これを知れ」と、お叫びなさいます。然るに私は此とほり久しく知らないで、空しいことを好み、虚偽を慕つてをりました。ですから私はそれを聞くと戦きました。と申すのは此言葉の言はれたのは、私自らも矢張り斯る者であると思ふ、同じ性質の人間に對してであるからなんでムいます。換言致しますれば、私が眞理と見做しました諸々の幻影のうちに、空しいことと、虚偽とがあつたからなのでムいます。また私は自分の記憶の悲しみのうちに、多くのことを聲高く、また力強く叫びました。今もなほ、空しいことを好み、虚偽を慕ふものどもが之を聞くことを望みます。恐らく彼等は胸が悪るくなつて、その毒を吐き出したでムいませう。そしてそこで彼等が貴下に對して救ひを呼んだとき、貴下は彼等に聞き給ふでムいませう。といふのは肉に於ける眞の死により、あの御方は私共の爲めに死に給ひ（ロマ書第八章卅四）今、私共の爲めに、貴下に御執成しをして下さるからでムいます。

私は「怒るとも罪を犯すこと勿れ」（詩篇第四の四）と讀みました。而して、我が神よ、この後罪を犯させないようにと、過ぎ去つたことについて自らに向つて怒ることを既に知つた私

は、どれぐらゐこれに心を動かされたことでムいませう。まつたく正しい怒りを私は知りました。といふのは、私は自身に對して怒ることをしないで、怒りの日と、貴下の正しい審判の啓示の日とのために、自らに對して忿怒を積んだ人々（ロマ書第二章五節）の言つてゐるやうに、私によつて罪を犯したのは、暗黒の民とはちがつた性であるが爲めではムいません（第五篇第三節參照）そして私の善は最早、私の外部にあるのでもなく、また私の眼をもつて太陽に於て求むべきものではなかつたのです。（卽ち外部の光りでなく內なる靈の光）何ぜかなれば、外的のものに歡ばうとするものは、直ちに虚しくなつて、肉の眼に見える、無常なものゝうちに、自分を消耗して、その上、自分が飢ゑた思想に於て、自分の影を舐めるからでムいます。あゝ彼等が、この（思想上の）斷食にすつかり疲れ果てゝ――「誰か善いことを私共に見せてくれないものか知ら」と、云ふやうにしたいものです。そしたら「主よ、貴下の聖顏の光りは、我等の上に封ぜられたり」（詩篇第四の六）と、貴下は言ひ、彼等はそれを聞いたでムいませうに。私共は世に來る萬人を照らす光りではムいません（ヨハネ傳第一章第九節）貴下に照らされるものでムい

ます。即ち私共はしばらく暗でムいましたが（エペソ書第五の八）今、貴下に於て光りとなるように
といふのでムいます。噫、どうぞ彼等が衷なる永久の光りを見ることが出來ますように。
私は自分でそれを味得しながら、彼等に示すことを出來なかつたことを思ふと、たゞもう
殘念で、齒嚙みを致しました。然るに彼等は貴下から離れた心を、その眼によつて、私の
ところへ持つて來て（その心を眼にあらはしてすらもの意味也）しかも「誰か善きことを我等に見する者あらんや」
と申してさへも、私は彼等にそれを示されませんでした。けれども私は自分の案内で、自
分に對して怒つたところ、心をさゝれところ、自分の古い人（古い自我）を殺して、犧牲に供へ
たところ（詩篇第四の五）、その處に於て私は貴下に希望をかけました。貴下はそこに喜びを私の
心に與へ給ひました。（詩篇第四の七）かうして私はそれを眼に讀み、心に知りて叫び出しました。
また私は時を徒費し、またこの假りの事物に無駄をさせられて、地上の幸福の增加せられ
んことを願ひは致しませんでした。私は貴下の永却は單純さのうちに、「他の穀物と、酒と
油とを有つてゐた」のでムいます。（第五篇を參照）

そして私は次の文句を讀みましたとき、衷心から高らかに叫びました——「あゝ安らか
にして、あゝ變らざらん」（詩篇第四の八）と。あゝ何とあの方は仰言いましたでせう——「われ
は臥してまた眠らん」（同上）と。それは「死は勝に呑まれたり」（コリント前書第十五章五四）と書いてある
お言葉が成就するとき、誰か私を妨げませう。そして貴下は全く唯一にましまして變り給
ふことはムいません。また一切の苦勞を忘れてしまふ安息は貴下のうちにムいます。と申
すのは貴下より以外には存在するものがなく（申命記第四章第卅五節イザヤ第四十五章第五節）また貴下でないその
他のものに心を向くべきものでなく、たゞ主よ、貴下のみ獨り、私を希望のうちに居らし
め給ふからでムいます（詩篇第四の第八節）わたしくは之を讀んで心を燃されました。けれども啞ま
たは死者に對しては、どうしていゝか私にはちつとも分りませんでした。私もその時啞或
は死者の類の一人でムいまして、病める者、また天の蜜にて甘くせられ、貴下のみ光りに
照らされた聖書に反對して、烈しく、盲目的に吠える者でムいました。そして私はこの聖
書の敵に反對する熱心を以て燒き盡くされました。

是等閑日月の間に起つた總てのことを私は何時想ひ出すでムいませうか。けれども私は貴下の笞の嚴しさと、貴下の慈悲のふしぎに迅速なことを忘れず、また沈默することは致しません。この時貴下は齒痛を私に起さして懲らし給ひました。そしてその痛みが烈しくなつて、物も言へなくなりましたとき、一緒にゐました總ての友人達に、萬事に亘つて健康の神に在すところの貴下に向ひ、私の爲めに祈つて貰はうといふ心がわたくしに起りました。そこで私はこれを蠟板に書いて（當時まだペンと紙とは一般に使はれず）友人達に與へて之を讀ましたのです。そこで私は謙遜にして、敬虔、素朴な思ひを以て、膝をかゞめますや否や、直ちに痛みは云つてしまひました。けれども何の苦痛でしたらうか。またそれはどうして去つてしまひましたでせうか。わが主わが神よ、私は非常に怖れて告白致します。私は嬰兒のときから、未だ嘗てそのやうな痛みを感じたことはなかつたのでムいます。かうして貴下の聖旨は深くわたくしの心に印象せられて、私は信じて、喜び、貴下のみ名を稱へました。そして此信仰は私をして、まだ貴下の洗禮によつて赦るされてはゐなかつたところの私の

過去の罪に對して不安を感ぜしめました。

五　アムブロシウスの勸め

葡萄收穫期の休暇が終りましたので、わたくしはミラノの人達に辭職を申出て、その學生達に對して雄辯術を敎へるものを傭はしました。それは私が貴下に奉仕せんと欲ふたばかりでなくて、また呼吸の困難と、私の胸が痛むが爲めに、到底敎授の職をつゞけて行かれなかつたからでムいます。かうして私は書簡によつて、貴下の祭司である聖人アムブロシウスに行き、わたくしが曩に犯した誤謬と、現在の自分の志とを告げ、斯のやうな大きな貴下の恩寵を受けるに容易であつて、且つ適當な者となるには、貴下の聖書のうち何を讀むのが一番よろしいかといふことを、敎へてくれるやうに願ひました。そこでアムブロシウスは、豫言者イザヤの書を私に薦めました。これはイザヤが他にまさつて明らかに福音と、異邦人に對するお召しを豫言してゐたからであると私は信じまする。けれどもその

初めの部分が解し難かつたので、全體も矢張りそのとほりであるだらうと想ひまして、主のお言葉のふりにもつとよく慣れてから、改めて讀まうと思つて、それを擱きました。

六　遂に洗禮を受く

聽て私の名を名乘つて、公衆の前に信仰を告白するときが來ましたので、私共はカッシキアクムの別莊を去つてミラノに歸りました。アリビウスもまた私と共に、貴下に於て新たに生れんことを望みました。彼は既に貴下の聖典を受けるにふさわしい謙遜を着て、非凡の勇氣をもつて、凍つた伊太利の地を裸足になつて踏む難行をした程な、肉體の克己者でムいました。わたくしは肉によつて私から生れたわたくしの罪たる、私の子アデオダトウスをつれてをりました。神よ、貴下は彼を善く造り給びました。彼は未だ十五才になりませんでしたが、その才に於ては既に多くの堂々たる學者をも凌いでをりました。主なるわがみ神、萬物および私共の不具を造り直し給ふ豐かなる力の造り主よ、わたくしは貴下

に、貴下の賜物について感謝致します。私はこの子供のうちに私の罪のほかには、何一物ももつてゐなかつたからでムいます。と申すのは人々は彼をあなたの難行に於て育てましたが、このやうに私等を靈感せしめたのは貴下でムいまして、他のものではないからでムいます。私は貴下の恩惠を貴下に感謝致します。私共の本のうちに「教師論」といふものがムいました。アデオダトウスと、私との間に交された對話篇でムいます。この書のうちに、私と對話してゐる彼の名によつて述べられてゐる思想は、皆十六才になる彼が考へたことであつたことは貴下は御存じでムいます。なほも驚くべく多くのことを、私は彼に於て發見致しました。彼の才能には私も畏れてをりました。斯麼奇蹟を行ふのは貴下でなくて誰でムいませうか。貴下は早く彼の生命を世の中から取り去り給ひました。そして私は安心して彼を憶ひ出し、彼の少年時代、或は青年時代について、或はその全人格についても別に恐れるところはムいません。私共と時代を同じくして洗禮の恩寵に預り、貴下の訓練のうちに育てられるやうにと、私共は彼をつれて行きました。かくて私共は洗禮を受け

過去の生涯の心配は私共を離れて去りました。そしてその頃、私は人類の救ひにかゝわる貴下の聖旨の深いことを思ひまして、ふしぎな喜びに飽くことがなかつたのでムいます。わたくしは貴下の教會の美妙な音にすつかり感動されて、どんなにか貴下の讃美歌と雅歌とに泣きましたらうぞ。その聲々はわたくしの耳に注ぎ入り、眞理は私の心に滴りました。そして心から敬虔な感情が湧きいでゝ、涙は頬をつたふて流れ落ち、しかもそれでもつて幸福を味ひました。

七　迫害を逭る

ミラノの教會堂が斯うした慰めと奬勵とを用ひて、兄弟たちが大きな熱心により、聲に出し、心に思つて合唱し始めたのは久しいことではムいませんでした。（オウガスチンは三八七年復活節に洗禮を受けた）即ち幼帝ヴレンティニアヌスの母ユステイナがアルリアヌスに誘はれて陷つた自分の異端を庇ばうために、貴下の人アムブロシウスを迫害してから、僅かに一年ばかりで

たしかにそれ以上でなかつたでムいます。敬虔な主のみ民等は、その司教である貴下の僕と一緒に死を覺悟して、會堂を守つてゐたのでムいました。すると貴下の婢でムいますところの私の母は、此迫害に對し、憂慮と戒心の主要な一部を身に引き受けて、祈禱の生活を送つてをりました。私共は貴下から靈の熱を受けても尙ほ凍つてをりましたけれど、しかも愕き騷いでゐる市街の光景にすつかり興奮さゝれてをりました。此悲哀に倦んじて、貴下の民が疲れ果てゝしまはないようにと、東方の習慣にならつて、讃美歌と詩篇とを歌ふべしといふ定めを置きました。この習慣は當日から今日に至るもなほ存在して、今や多くの者、否全世界を通じて、殆んど貴下の凡ての羊の群はこれに倣つてをります。

それから次に貴下は幻影によつて、殉教者プロタシウスとゲルヴシウスとの肉體が隱くされた場所を、たゞ今名指した貴下の司祭に啓示し給ひました。私共は此二人を斯うして多年の間、貴下の秘密の御庫のうちに、朽ち果てないようにして匿し給ふたのでムいました。是は貴下が、適當の時機になつてから、之を出して此女帝の怒りを押し過めてしまは

うといふ御思召になつたものでムいます。二人の屍體が發見され、發堀せられ、恭しく尊崇せられて、アムブロシウスの邸宅に移つされましたときには、惡鬼も自ら告白するとほり、嘗に汚れた靈に惱まされた人々が癒やされたばかりでなく、多年の間盲目であつて、市中によく知られてゐた一市民は、皆が騒ぐので、何をそんなに喜ぶのかと訊いて、此奇蹟が行はれてゐることを知るや、手引きの人に其處へつれて行つて呉れるように願つて起ち上りました。いよ〳〵其處につれて行かれると、彼は自分の手布をもつて、「その死なんぢの前に貴き汝の聖徒」(詩篇第百十六の第十五)の柩にふるゝことを許るしていたゞき度いと望みました。彼がさう致しまして、その手布を自分の眼につけましたところが、忽ちに眼は開かれました。そこで噂さは益々擴まり、貴下に對する讃美は燃え輝き、貴下の敵である者共の心すらも、たとへ信仰といふ健康な方には向はなかつたにもせよ、なほその迫害の狂暴を抑へました。わが神よ、貴下に感謝致します。何處から何處まで貴下はわたくしの記憶を呼び返して下さいまして、私が、こんなに大きい事件であつたにもかゝわらず、忘れて看

過してをりました是等のことを貴下に感謝せしめ給ふのでムいますか。けれども貴下の膏油はその香りの妙へに馨しかつたとき(雅歌第一の三)私はなほ貴下に從つて走りは致しませんでした。その爲めに私は嘗ては貴下を求めて嘆息した如く、私は貴下の讃美歌を唱ひながら一層澤山涙を流しました。そして今は遂に此草の庵の空氣の許す限り、私は貴下に於て呼吸致しました。

八　母、聖モンニカ

一つの心をもつ人々を一つの家に住まはせ給ふ貴下は、私共の市の青年で、エウォディウスをまた私共の仲間に加へ給ひました。彼は役人でムいましたが、私共よりも先に貴下のみ許に立ち歸り、洗禮を受け、その俗務を棄てゝ、貴下の御用に立つ覺悟を致しました。私共と一緒にゐて、相共に聖い目的に住はうと致しました。わたくしは何處かに、最も有用に貴下に仕へ得べき場所を求めて、一緒にアフリカに歸らうと致しました。そこで私共